アドベンチャーヒーローブックス

ADVENTURE HERO'S BOOKS No.10

リンクの冒険
ハイラル英雄伝説

スタジオ・ハード／構成・文

Link's Adventurous Quest:
The Legend of Real Hero in Hyrule
by Studio Hard Co, Ltd.

Illustrations by Ryo Nakamura
Character and Story Base License

First Published by Keibunsha Co,
Honcho, Nakano, Tokyo Japan.
Courtesy by Jiro Kasahara, Editor of Junior Encyclopedia.

アドベンチャーヒーローブックス 10

リンクの冒険
ハイラル英雄伝説

もうひとつのハイラル、ここで勇者リンクの
新なる冒険が始まろうとしている――

プロローグ

ある、ひとつの思いが、時空を超えた。

それはひとつの世界に隣り合うもうひとつの世界に届いた。

そしてそれに応え、ひとりの偉大なる男が時空を超えてやってきた。

これはその勇者の物語である。

そこに闇があった。

漆黒の中にたいまつが燃えている。その炎のゆらめきの向こうにうごめく影。巨大で、醜くおぞましい無数の怪物ども。

あるものは低く、またあるものはかん高く奇声を発している。それは世にも奇怪な光景だった。

やがて声は静まった。魔物どもの前にひとりの男が立った。

「みなの者、よく聞け。おまえたちの王ガルゴアさまは、1万歳の寿命を終えられ、ついに亡くなられた。みながこうして集まったのは、その悲しみゆえであろう」

そう言って、男は魔物どもを見回した。切れ長の目は異様な輝きを帯び、唇は醜くゆがみ、薄笑いを形作っている。

「――だが、ガルゴアさまを、再び生き返らせる方法がある。それはこの世界に伝わる伝説の英雄・リンクの生き血を、このガルゴアさまの灰にふりかけることだ」

男は真紅の壺をかざし、怪物どもに見せた。とたんに、どよめきが起こった。男は歓声の中で、満足げに目を細める。にやりと笑ったとたん唇のはしから2本の牙が垣間見えた。

「さらに、我らはこのハイラルを征服する。〈**大神殿**〉に隠された秘宝を奪えば、それは可能だ！」

男の声は闇に吹く風のように魔物どもの上を渡っていった。

男の名は、デオーといった。かつて魔王ガルゴアに仕えていた魔物の化身である。そしてまた、きみたちがこれから戦うおそるべき敵でもあった――。

ここは、もうひとつのハイラル。先代の王の時代より、攻め入られた魔王ガルゴアによって支配され、闇の世界と化していた。何百もの魔物どもが、人々を次々と餌食にしていた。

どうすれば、平和は訪れるのか。国王はその現状を見るに見かねて、乳母・インパの元へ行った。

この老婆は、先代の王にも仕え、その王によってさまざまな言い伝えを聞かされていた。そのため、今の王の顧問としての役目もつかさどっているのだった。

そのインパは王に向かってこう告げた――。

「魔王ガルゴアは、ハイラルに呪いをかけて死んだのじゃ。それを解くには、たったひとつの方法がある。

この国には、今、“知恵”と“力”のトライフォースがある。そのおかげで、昔この国の平和は保たれていたのじゃ。実はトライフォースは3枚あるのじゃ。3枚目のトライフォースそれは“勇気”という。そしてこの3枚がそろったなら、どんな呪いも消し去ることができる。ただし――。

正義の心でこれを使うなら、永きにわたる平和をもたらそう。じゃが、もしこれを邪な心で使うなら、この世の終わりが来よう。

この国のご神祖さまはそれを恐れ、“勇気”のトライフォースをハイラルのある場所に隠されたのじゃ」

王はそれを聞いて心底ゾッとした。だが、ハイラルを救うためにはその“勇気”のトライフォースに頼るしかない。彼は意を決して、そのありかをたずねた。

「“勇気”のトライフォース。それは**〈死の谷〉**という魔境にある大神殿に隠されている。そこへたどりつくまでにハイラル各地にある3つの神殿に行かねばならない。その中にある神像にこの3本のクリスタルをはめよ。そこで、**〈死の谷の大神殿〉**でトライフォースを得るために必要なヒントが得られよう。クリスタルは一つの神像につき3本必要じゃ。必ず3本とも持って行くのじゃ。

もしそのヒントなくば、確実に死が来よう。

もうひとつある。**〈死の谷の大神殿〉**に行ったなら、このクリスタルと、ミラクルシールドなるものを神像に供えよ。それが“勇気”のトライフォースを得る方法じゃ」

インパはそう言って、王家に伝わる3本の水晶を渡した。それぞれの神像に、この3本のクリスタルをそろえて持っていかねばならない。さもなくば**〈大神殿〉**のヒントは聞き出せない。

「さて、その重大な任務を遂行できる者。それは手に勇者の印として、▲のアザの現れた者だけじゃ。この者だけが**〈大神殿〉**に入ることができる。そして、そのアザのある勇者はただひとり……」

インパはそう言って、ひとつの絵を指さした。そこにはひとりの少年の姿があった。

インパの持つ予言書にしるされた勇者は、リンクと呼ばれ、この地に光を持たらすと伝えられている伝説の英雄だ。人々は、英雄・リンクの出現を切に願っていた。

英雄・リンクとは何者？　そう、彼こそ別の世界のハイラルで、魔王ガノンを倒した偉大なる剣士。きみたちは彼をよく知っているはずだよね！

だが、そのリンクは今もガノンを倒したハイラルで、魔物と戦っている。はたして彼はこの世界へ来てくれるのか？

さて、時を同じくして、王の居城。

ここでまた、大事件が起こった――。

「ゼルダ姫、病に倒れる」

各地から医者、薬草の権威が集められた。が、姫の奇病はいっこうに治らず、また原因すらわからないということだった。

ああ、王の悩みはいかほどのものだったろう。

これもまた、ハイラルに巣くう魔物どもの仕業なのだろうか。人々は、再び来る災厄の予感に恐れおののいたのだった。

そんなある時、人々の願いはついに通じた。

王の間に、ひとりの剣士がやってきた。彼は王の前に跪き、自らの名を名乗った。リンクと――。

ゲームのルール

さて、あなたはこれからリンクと共に冒険の旅へと出かけます。そして、隠された“勇気”のトライフォースを手に入れ、ハイラルに平和を取り戻さなければなりません。そのためには、さまざまな敵を倒し、情報や小道具を手に入れたりしなければなりません。ゲーム中に入手した物は行先の選択をする際、重要な鍵となります。忘れないように冒険記録紙に記入しながら進めます。

では、ゲーム中フル活用する記録紙の使い方を説明していきましょう。

●戦闘方法とバトルポイントの設定

まずはじめに、バトルポイント表を作ります。この表はさまざまな敵との戦闘で使用します。記録紙のＡ～Ｊの空欄に１～10までの数字を記入します。数字の順序はバラバラでも続き番号でもかまいません。ただし、各数字は１回ずつしか書き込めません。

次に戦闘方法ですが、本文中にはリンクは♥＋Ｅ／ギーニは４＋Ｈ、という形で指示されています。もし、Ｅが６、Ｈが５、♥が５ならば、リンクが５＋６で11点、ギーニが４＋５で９点となりリンクの勝ちとなるわけです。（♥はLIFEエネルギーのことで、その時満たされているハートの数をさします。空の器は含みません）

同点の場合は、次のアルファベットの数字を使って再び同じ作業をします。（最初の指示で自分がＡならばＢ、ＢならばＣ……。Ｊの場合はＡの数字を使います）

また、このゲームでは途中でバトルポイントを書き換えることができる項目があります。その項目では、項目番号のワクの色を白く抜いてありますので、利用してください。

（バトルポイントの数字を途中で変更したくなった時などに、この項目を通るとバトルポイント表を新しく作り直すことができます。変更するかどうかは読者の判断にまかせます）

●アイテムチェック

入手した小道具（アイテム）はその都度（つど）、チェックシートに書き込んでいきます。逆に失ったり、使いきってしまった時にはチェックシートから消してください。

このゲームでは、武器等を見つけたりする他に商人から買うことが出来ます。**お金があればひとりの商人から同時に何種類買ってもかまいませんが、同じ種類の品物は一度に各ひとつずつしか買えません。ただし、その場所でしか買えない物もあります。**また、そのアイテムがなければゲーム上、進行出来なくなることもあるので、カンを働かせて買い物をしてください。

●ルピーチェック

買い物をする時に必要になるのが、この国の通貨（つうか）ルピーです。**はじめに、リンクは50ルピー持っています。**買い物をするたびに、その品物の値段分だけマイナスします。また、敵を倒すと増える場合があります。その時は増えた分だけプラスしてください。

●LIFEエネルギー♥チェック

リンクの体力を示すのが、LIFEエネルギーです。これは、満たされたハート（♥）の数で表されます。敵との戦いで勝てば増え、負ければ減っていきます。戦わずに逃げた場合にも減ることがあります。ただし、必ずしも戦えばいいというものでもありません。状況をよく考えて判断してください。

ハートが0になると、そこでゲームはENDになります。

しかし、0になる前に妖精の泉にうまくたどりつければ体力を回復し、ハートを満杯にしてくれます。

持てるハートの数には上限があります。はじめは3個です。途中、2か所で命の器を得ることができます。ひとつの器で2個、計4個持てるハートの数が増えます。（ただし、2度目以降に同じ項目に来た時は命の器は取れません）

また、ファイアソードを取るとレベルアップして、持てるハートの数が5個増えます。そして、ミラクルソードを取るとさらにレベルアップして、持てるハートの数がもう5個増えます。つまりファイアソードとミラクルソードを取ると、

計10個、持てるハートの数が増えることになります。

（ただし、ハートの器を取っただけでは満杯にはなりませんので、空のハートを早く満杯にする必要があります）ハートは最高17個まで持てます。

ゲーム中、使用する満杯の条件はそのときの器の数で決まります。次に例をあげておきます。

最初のハートが３個で、命の器をひとつ取った場合

→　♥３　＋　空のハート２　＝　満杯の条件５

最初のハートが３個で、ファイアソードを取った場合

→　♥３　＋　空のハート５　＝　満杯の条件８

(空のハートがひとつでもあれば満杯にはなりません)

●ステップメモ

何かの拍子で本が閉じてしまったり、途中でゲームを中断した時など自分がたどって来たルートがわからなくなってしまわないように１から順に通った項目をメモしておきましょう。

●マップの見方

さて、このゲームの中でリンクはさまざまな場所で敵と出会いますが、その場所を示したのがこのマップです。12のブロックに分かれていますが、**これは古い“言い伝え”に基づいて作られたものです。**文章を読んで、バラバラになっているマップを上手に組み合わせて完成させてください。**(ただし、この中にひとつだけ間違ったマップがあり、それが〈死の谷〉のマップと入れ換わってしまいました。それも、見つけ出してください）208ページから213ページにあるマップを使用します。**

以上でルールの説明は終わりです。項目の中には、状況に応じて細かい注意書きがありますので、その指示に従ってください。

それから、ハートやルピー、アイテムなどはゲームの途中で足りなくなったりした時など、集め直すことが出来ます。その時には、再び同じ項目を通らなければならないこともありますが、そのままゲームを進めてください。

また、アイテムのバクダンは持てる数に上限はありません。いくつでも持てます。ソードとシールドは本文中に失なうという指示がない限り別のソードやシールドを取ってもなくなることはありません。

さあ、準備は整いました。“勇気”のトライフォースをめざして旅立ってください！　あなたの健闘を祈ります。

1

ゼルダ姫は純白の衣装に身を包み寝台に横たわっていた。

ぼくはそんな彼女の姿を見、そしてそばにいる王様や重臣たちを見た。深刻な視線と視線がからみあった。

「リンク、今度のそなたの旅はつらいものになるだろう。それでも引き受けてくれるかね？」

「はい」ぼくは返事をした。「王様のたっての願いとあれば」

ビロードのカーテンがさっと揺れ、家来のひとりが入ってきた。その手には剣と盾がある。どんな怪物でも倒せると言われたマジカルソードとマジカルシールドだった。

「この魔法の剣と盾を使いこなせる者は、国じゅうを捜してもそなたしかおらん。だが油断するな。“勇気”のトライフォースを得んとしておるのは、そなただけではない。聞くところによれば、あの魔王ガルゴア配下の魔物もねらっておるらしい」

ぼくはうなずいた。うわさには聞いている。魔獣デオーのことだ。ガルゴアの腹心だったおそるべき怪物だという。

マジカルソードとマジカルシールドを持ち、ぼくは王様に向きなおった。

「では、行ってまいります」

「うむ」王は寂しげにうなずいた。「気をつけてゆかれよ」

城を離れ、ぼくは旅を始めた。

強力な剣と盾があるのは頼もしいけれど、他の小道具がないのは寂しい。**今のぼくが身につけているものといったら、通貨・50ルピーと LIFE エネルギー♥3個、そしてクリスタルが3本のみだ。**

でも、今のぼくには心強い相棒がいるじゃないか。

誰かって？　わかるだろう。つまり、この本を読んでくれている冒険好きの読者——きみのことさ。

さて、ハイラル地方を旅してみると、その荒れはてた光景に驚いた。荒廃は日増しに悪化していく一方のようだ。これもガルゴアの呪いのせいか。

今、ぼくの目の前にあるのは、草木１本生えていない原野だった。うえ～っ。旅は始まったばかりだというのに、何てことだ。　→181

2

突如、ヤツは口を開けた。その洞窟のような喉の奥から、超音波が放たれる。あたりの空気が激しく振動し、その衝撃はものすごいエネルギーとなってぼくをふっ飛ばした。

おかげでぼくにのしかかっていた石壁の破片が砕け散る。

とはいえ、ぼくの受けたダメージは尋常じゃない。意識を失う余裕すらなかったのだ。超音波はぼくの体の細胞を破壊しようとしていた。(LIFEエネルギー♥マイナス10)

さあ、LIFEエネルギー♥はまだある？

●YES　→190

●NO　→350

3

大グモがまた糸を吐き出した。必死に盾でかわすが、ままならない。糸は放物線を描き、肩や腕に落ちる。その酸は革の服すら溶かし、皮膚に火傷を負わせた。

「うわーっ！」

ぼくはのけぞって叫んだ。(LIFEエネルギー♥マイナス1)もう逃げ出すしかない。ぼくはよろめきつつ走り出した。

LIFEエネルギー♥はまだある？

●YES　→348

●NO　→36

4

その場で待って、怪物の動きをうかがった。

ふいに背後から、影がさした。思わずぼくは振り返った。おっと、危ない。ぼくはあわてて視線をそらした。すぐにミラクルミラーで相手を見る。

ヤバイ！　怪物が迫ってきた。

どうする、このまま戦うか。

●戦う　→329

●すぐに隠れる　→113

5

剣を抜き、迫る触手を斬り払った。

だが、2、3本斬っただけでは、とても間に合わない。ヌルヌルと気色の悪いヤツが、次々と伸びてくる。

このままでは、らちがあかない。いったいどうすればいいんだ？　うわーっ！　足に1本巻きついた。

●このまま剣で攻撃　→134

●逃げる　→296

6

こんなヤツにかまっているヒマはない。

ぼくはすぐさま神殿に駆け込んだ。デオーは唸り声を上げる。なあに、先にあそこへ入ったほうの勝ちさ。→123

7

おっと、あの中に何が待ちかまえているかわからない。うかつに入らないほうがいい。

向きなおったとたん、ぼくはグリオークの巨大な顔と鉢合わせすることになった。かっと口が開かれ、炎がほとばしる。間一髪、ジャンプしてそれを逃れる。だが、着地したとたん、足場が崩壊した。

バランスを失って、ぼくは崖の上でのけぞった。

「わっ！」

一瞬後、ぼくは何とか岩にしがみついていた。下は煮えたぎる溶岩の海。落ちればもちろん、ひとたまりもない。

7

足をばたばたとさせながら、ぼくは ――。

おおい。どうすればいいんだよう。

ファイアソードを持っているか？

● **持っている　→179**

● **持っていない　→294**

8

あいにくとぼくはローソクを持っていなかった。

このまま下に降りると、おそらくワナにかかって命を落とすことになろう。

ぼくは後悔(こうかい)の念(ねん)にかられつつ、神殿を去った。 **→344**

9

神殿の最深部。そこに地下へ行く階段があった。

そこを降りると、すぐ目の前に神像がある。ぼくは３本のクリスタルを出し、像の下の石板に持って行った、その板に３つ穴がある。クリスタルをそこにひとつずつ入れると――。

神像の目が光り、壁に映像が映った。**そこに光るのはねこに似た形の絵と〈ＣＡＴ〉という文字。**

そう、これが〈死の谷の大神殿〉に至(いた)るヒントなのだ。

ぼくはこの文字を記憶した。

そして、クリスタルを手にぼくは、その神殿を出、再び霧深い森に入る。そこを抜け、さらに旅を続けた。

さて、ここはもう、ゴールに近い場所だ。きみの選ぶ方向が、ぼくの運命を決める。

どっちへ行くか選んでくれ。

● **北へ　→100**

● **西へ　→80**

10

やがて丘が見えてきた。

坂道を登りつめると、向こうの景色(けしき)が遠くに見渡せた。

そこに天を突くような高山があった。てっぺんは厚い黒雲

10

に呑み込まれている。山肌はすべてごつごつした岩でおおわれ、見るからに不気味にそびえている。

その中腹に、小さな洞窟が見えた。

さあ、あの中に入ってみるかい？

●洞窟に入る　→308

●入らずに山を越える　→196

11

体力はある。

ではヤツを倒す武器・マジカルブーメランはある？

●ある　→58

●ない　→102

12

剣と盾をかまえ、ぼくは身がまえた。じりっと退がった。とたん、足元の地面が消失した。

そう、気づかなかったが、すぐ後ろは崖――しかもその下にあるのは溶岩の海だ！

「わ!!」驚いたとたん、ぼくはバランスを失った。

LIFE エネルギー♥はまだある？

●YES　→230

●NO　→341

13

ミラクルミラーをかざし、その反射で相手を見つつ、ぼくは身をかわした。アルゴンはとっさに向きなおろうとした。ところが、ぼくはそのスキを与えない。右手に持った剣を怪物の背中に突き立ててやったのだ。

アルゴンは口を大きく開けてのけぞった。

13

やったか？

いや、まだだ。ヤツはすばやく柱の背後に行き、まわりこんだ。床に青い血の跡がついている。

ぼくは――　→319

14

こりゃ、とてもかなわない。

ぼくは死にものぐるいで、逃走を開始した。雪をかきわけ、わきめもふらず、走った。

そして――。

怪物の気まぐれか、はたまた幸運ゆえか。ともかくぼくは無事に逃げきったのだった。

ふう。努力はしてみるもんだな。

ぼくはまた雪の平原を歩きだした。（**LIFE エネルギー♥マイナス１**）　**→349**

15

ぼくはヤツの攻撃をかわし、スキをうかがった。鋼鉄の表皮を持つ怪物も、どこかに弱点があるはずだ。

来た。翼を大きく広げ、風のように迫ってくる。

よく見ろ。ヤツの弱点を。

それは――！

怪物が、ぼくに襲いかかる。とっさに剣を突き、その顔を斬りつける。飛び散る血しぶき。そして、怪鳥の絶叫。床に落ちたアルプにのしかかり、ぼくはトドメをさす。大きく振り上げた剣で、ヤツの頭を斬り落とした。人面をつけた頭は、石畳を転がっていく。

アルプは死んだ。（**LIFE エネルギー♥プラス２・20ルピー**

得る）
ぼくは怪物の死骸を乗り越え、神殿の最深部に向かい歩きだした。　→226

16

ぼくはヤツに勝てる武器を持っていなかった。
急いで引き返したほうがいいぞ。それとも戦う？　だが、この場合、勇気や体力にあふれていても何とかなるってもんじゃない。へたに戦わないほうがいいと思うよ。

●**やっぱり戦う　→257**
●**逃げる　→243**

17

黒騎士は南に向かい、歩いていく。
ぼくは黙ってその後を追った。静寂の中に、ふたつの足音のみが響く。沼の上を漂う妖霧が、ともすれば彼の姿を消そうとする。
その霧は、だんだんと濃くなってきた。
その時だ。足元のぬかるみに突っ込んだ足が、動かなくなった。見れば、泥の中から白骨の手が出、ぼくの足首をつかんでいる。
わっと叫び、逃げようとした。が、足はピクリとも動かない。そうしているうち、あたりの泥の水がざわめきだした。
しぶきを散らし、出現したのは、無数の白骨・妖怪スタルフォスだ。
霧の向こうで、あの黒騎士はこっちを振り返っている。ひょっとして、これはワナか？
ぼくは足をつかむ手を何とか振りほどき、剣を抜いた。

きみはどう判断する？

●**スタルフォスと戦う　→93**
●**黒騎士と戦う　→259**

18

とにかく、このまま上まで登ってみよう。
ぼくは岩壁をよじ登り始めた。途中何度も落ちそうになりながら、何とかてっぺんへたどり着く。疲労こんぱいといったありさまである。（LIFE エネルギー♥マイナス１）
だが、安心するのはまだ早い。目的は山の向こう側へ降りることなのだ。ぼくはまた崖にしがみつき、地表目指してはい降りだした。　→210

19

剣を抜き、親グリオークに向かっていった。

今持っている剣は？

●**マジカルソード　→252**
●**ファイアソードもしくはミラクルソード　→217**

20

やがて、岬の突端に出た。突風に身をさらしながら、海を見た。対岸が見える。どうやらそこは広い湾になっているらしい。
足元に目をやれば、岩肌を伝って海まで降りられるようになっている。そこは砂浜だ。波打ち際に、なかば埋もれているのはイカダのようだ。

ぼくはこの海の向こうへ行きたい。その方法を選んでくれ。

●**イカダで海を渡る　→266**
●**海岸線に沿って歩き、向こうまで行く　→151**

21

ぼくは黒騎士についていかなかった。

何者かわからないし、つまりはそっちの方向に行きたくなかったということもある。これでも縁起をかつぐ方なんだ。

したがって、ぼくは彼とは違う方に向かい、歩きだした。

→270

22

ぼくは必死にシールドで身を守った。

これがもしマジカルシールドだったら、ぼくの運命はどうなっていたかわからない。さいわい、こいつはどうにか炎からぼくを守ってくれた。

だが、安心するのはまだ早い。ヤツは恐ろしい羽音とともに地上に降りたったのだ。　→252

23

ぼくは剣をかまえ、テクタイトにかかっていくと見せかけ、ヒラリとヤツの上を飛び越えた。そのまま全力疾走。

だがテクタイトは追ってこない。ぼくは走った。——と、道の先に人影があった。遠くてよくわからない。が、黒い衣装を着ているようだ。右を見ると、脇道があった。ぼくは考えた。前の人影に向かい、歩くか。それとも脇道に入っていくか。**運命の分かれ道だ。どうするか、決めてくれ。**

- **人影に向かって歩く**　→293
- **脇道に向かう**　→282

24

剣を抜き、身がまえた。さあ、かかって来い。

ウィズローブは頭巾の下で赤い目を光らせた。そして両手をさっと上げるやいなや、呪文をとなえた。

24 ウィズローブは呪文をとなえた　全身の力が抜けていく……おそるべき威力だ！

24

「チチンプイプイノプイ。あーたらこーたら」
とたんに、全身の力が抜けた。その場にがくっと膝をつき、ぼくはうめいた。おそるべきウィズローブの呪文の威力！

（LIFE エネルギー♥マイナス１）

ファイアシールドを持っている？

●持っている　→317

●持っていない　→262

25

一度に３匹のゾーラがイカダに手をかけ、はい上がろうとした。逆手に持った剣で、ぼくは次々と斬りつける。その時後方からビームが飛来した。振り返ったとたん、それはぼくの足に当たった。激痛にうめき、がっくと膝をついた。

（LIFE エネルギー♥マイナス１）

これは逃げたほうが得策だな。そう思うやいなや、ぼくは必死にイカダをこぎ始めた。

LIFE エネルギー♥はまだある？

●YES　→97

●NO　→135

26

ぼくはミラクルミラーを持っている。
そう。ヤツににらまれると、一瞬にして石と化してしまう。が、この魔法の鏡があれば、命が助かるといわれている。
怪物トカゲはシッポをズルズルと引きずり、こっちに近づいてくる。まてよ、このミラー、どう使うんだ？　武器にはなりそうもないが。
考えているヒマはない。ヤツはすぐそこまで来たぞ。

●剣で戦う　→161

●とっさに柱の陰に隠れる　→319

●何とかミラーを使ってみる　→109

27

ファイアソードかミラクルソードを持っている？

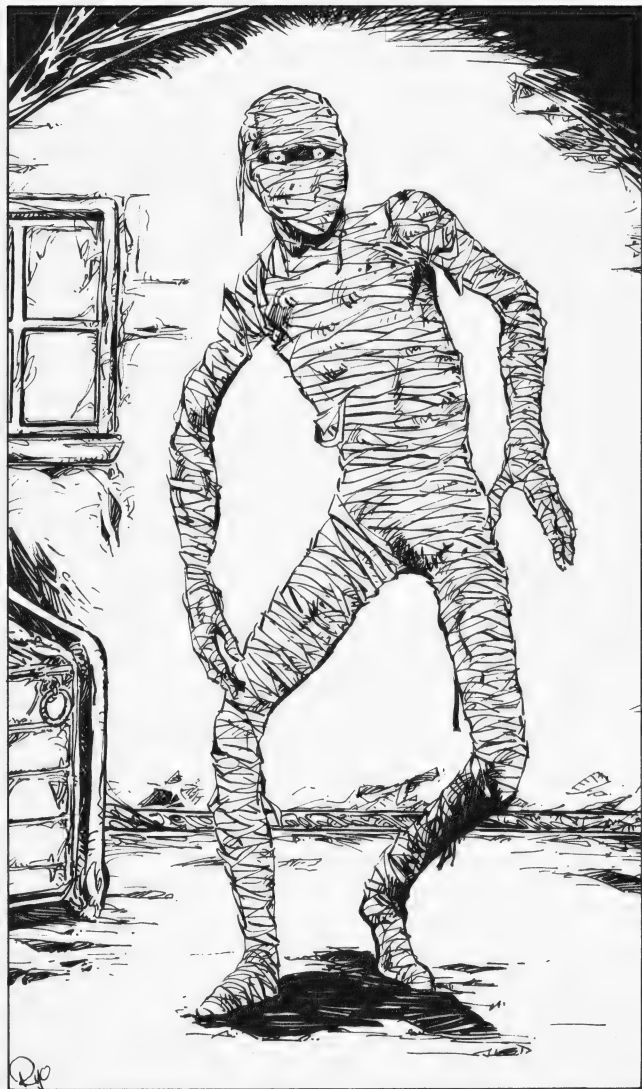
●持っている　→187

●持っていない　→284

28

目の前に大きな家があった。
ぼくは、その正面の戸を開け、入った。
「ちわッ……なんちゃって」

28 ぼくに向かってくる人影　妙にコミカルだが安心してはいれない　怪物ギブドだ

28

中は真っ暗、もちろん誰もいない。食べ物でもあればメッケものなんだが。まるで泥棒だね、これじゃ。

木造りのドアを開け、隣の部屋へ入った。そこには何と人影がある。包帯をグルグル巻きにし、ぼくに向かってゆっくりと歩いてくる。ヒョコヒョコ、その歩き方は妙にコミカルなんだけど、それどころじゃない。こいつは怪物ギブドだ。

★バトルポイント…リンクは♥＋H／ギブドは３＋Fで戦います。結果は？

●勝った　→64

●負けた　→221

29

岩穴のある場所から去った。

風の峠に別れを告げ、ぼくはまた遙かなる平原に向かって歩きだした。　**→168**

30

しばらく行くと、広大な岩の平原へ出た。

ゴツゴツとした岩盤。そこを四方八方に走る亀裂。そばに立ち、足元をのぞきこむと――。うわっ！　ものすごい熱気が噴き上げてきた。下は煮えたつ溶岩の海。そこから時折噴出するのは、巨大な炎の柱だ。

ぼくはおっかなびっくりで、そこを進みだした。火を噴く岩盤の亀裂に気をつけ、慎重に進んだ。

ところが、だ。ふいに何かが陽光をさえぎり、地表に影を落として飛んだ。仰ぎ見たぼくは、上空に１匹の竜を見つけた。

巨大な怪物・グリオーク。３つ首のドラゴンだ。デオーが

30

放った死の使いか。

グリオークはぼくを見つけると、突如急降下に移った。翼を思いっきり広げ、まっしぐらにやってくる。そして真ん中の首の口をカッと開くなり、そこから紅蓮の炎を吐き出した。

とっさにシールドで防いだ。火炎はそれに当たり、四方に散った。が、ものすごい圧力。押しよせる熱波に、さしもの盾もすっとばされそうになる。

●グリオークと戦う　→346

●逃げる　→198

31

銀の矢を出し、弓につがえて引き絞った。雪の中を迫りくるモルドアームにねらいをつけ、放った。

矢はねらいたがわず、怪物の先端——頭らしき場所に突きささった。激痛に身をよじらせ、のたうちまわるモルドアーム。

やがて、この巨大なミミズの化物は雪の海に沈んだ。

（LIFEエネルギー♥プラス１・20ルピー得る、銀の矢を失う）

ぼくはまた雪の中を歩きだした。　**→349**

32

そりゃ、体力はあるけど、このままじゃ絶体絶命だ。

デオーは勝ち誇ったように、こちらへにじり寄ってきた。

ぼくは何とか立ち上がった。ふらつく体を立てなおし、剣をかまえた。

「さあ、来い」ぼくは叫んだ。

「ぼくはまだ生きているぞ」

その時だ。入口から、風のように誰かが入ってきた。

黒い衣装にマント、剣を握ったたくましい腕。あの、黒騎士だ。その姿を見たとたん、デオーは狂ったように叫んだ。

「きさまぁ——っ！　何者だァ」

「ぼくの名は——リンク」

そう言って、黒騎士は仮面を取った。とたんに、デオーの顔がゆがんだ。カッと口を開け、超音波を発しようとした。だが、それは彼の持つ盾ではじかれた。

「ゼルダ。さあ、いっしょに戦おう」

彼はそう言って、こちらを向いた。

ぼくは——いや、私は久しぶりに本名を言われ、ドキンとした。ううん。そうじゃない、今、私の前に立っているこの人を見たからだ。

「リンク！」私は叫んだ。そして剣をかまえた。

彼と私は、デオーに突っ込んだ。剣を振りかざし、同時に飛んだ！

デオー——魔界の殺し屋は、絶望の悲鳴を発した。その首を彼の剣がはね、心臓を私の剣が突く。大コウモリの首はカッと牙をむき、そして胴は床に崩れた。

息をついて、私は振り返る。そこにあこがれの顔があった。

リンク。なんてことなのだろう。これまで陰になり、日なたになって私を守ってくれたあの黒騎士が——リンクだったなんて！

ちっとも気づかなかった。

そう。いままでリンクを名乗り、冒険をしてきたのは、この私——ゼルダ。

32

つまり、あれは仮病だったの。なぜって、その時本物のリンクはこの世界に来ていなかったため。

私は敵の目をあざむく必要があった。でも、いつの間にか、彼は時空を超えて来ていたのだ。

私は感無量の想いで、リンクの顔を見上げた。

「ゼルダ、つのる話もあるけど、そいつは後だ。早いとこ“勇気”のトライフォースを手に入れよう」

私はリンクの提案に従うことにした。

さあ、クリスタルと３本のミラクルシールドは、ちゃんとそろっている？

●そろっている　→91

●そろっていない　→255

33

必死に逃げた。泥や枯草をかきわけ、はうようにその場を去った。振り返ると、黒騎士はまだスタルフォスを相手に戦っていた。

ぼくは立ち止まり、視線を送る。すると、彼はこちらを見、行けというように首を振った。

ぼくはうなずき、その場を去った。**（LIFE エネルギー♥マイナス１）　→310**

34

思いきり体に力をくわえ、ぼくは金縛りから逃れた。

頭の中にかかった霞を追い払い、立ち上がる。

さあ、反撃だ。

●（持っていれば）マジカルロッドを使う　→163

●剣で戦う　→268

35

ローソクをともし、ゆっくりと石段を降りていく。

ずいぶん長いこと、石段を降りたような気がする。

ふいにすぐ目の前に石畳の床が現れた。そこへ足をつけた時、前方の闇から何かの唸り声がした。ローソクをかざして見た。

そこにいるのは、１匹の怪物。

そう、それは神殿の守り神、ガーゴイルだ。巨大なコウモリのような翼にヒヒのような体。全身をおおう金色の毛。耳まで裂けた口。**（リストからローソクを１本消す）**

ファイアソードとファイアシールドはそろっている？

●そろっている　→213

●そろっていない　→260

36

ところが、ぼくの体力はもはや尽きていた。

走ろうとしたとたん、その場にどうとばかりに倒れたのだ。

それは怪物にとって、待ちに待った瞬間だった。テクタイトは牙をむきだして襲いかかってきた。背中に牙をつきたてられ、ぼくは激痛に悲鳴をあげる。ヤツはぼくの血をすすり始めた。

この血はやがて、ガノンの復活に使われるのだ。

薄れていく意識の中で、ぼくはそのことをふと思った。

END

37

今、ぼくはバクダンを持っているか？

●持っている　→256

●持っていない　→122

38 雪の中を突進してくるモルドアームに、ぼくはあわてて逃げはじめた

38

再び雪原を進みだした。

しばらく行くと、突如目の前で、地表の雪が天に向かって噴き上がった。風に流されて、雪の粉が霧のように押しよせてきた。

ぼくは身がまえた。その中に、何か——とてつもなく巨大な物がいる。

そいつはこっちに向かって、猛烈な勢いで突進を始めた。

雪のジュウタンを断ち割るように、やってくるのは、ミミズの怪物・モルドアームだ。巨体を大きくのたうたせながら、ものすごいスピードで迫ってくる。

ぼくはくるりときびすを返すと、雪をかきわけて逃げはじめた。

今のぼくのLIFEエネルギー♥は？

● 3以上　→283

● 2以下　→336

39

怪物はゆっくりと迫ってきた。

シッポをズルズルと引きずる音が、すぐ間近でする。

ぼくはこのアルゴンという怪物について、その弱点をなんとか思い出そうとしていた。

それは確かにぼくの記憶の片隅にあった。

そうだ。ハイラルに伝わる伝説によれば、こいつは銀の矢に弱いはず。

今、銀の矢はある？

●ある　→61

●ない　→337

40

やがて歩いていくにつれ、風が冷たく感じられるようになった。重苦しくたれこめる灰色の雲。そこから音もなく粉雪が舞い始めた。あたりにはすでに降り積もった雪が、点々と見られるようになった。

それは進むにつれて、どんどんと目立つようになった。

野山はすっかり白いベールに覆い尽くされ、足を運ぶたびに深々と沈みだした。気がつけば、あたりはすっかり雪の平原となっている。

と、言葉にすれば簡単なのだが、もう異常なほどの寒さ。

うっかり防寒服を用意しなかったために、とんだことになってしまった。肩をすくめ、ガタガタと震えながら、ぼくは雪の中を進んで行く。

積雪は次第に深くなり、前に進むことさえ容易にできなくなった。

おまけに吹きすさぶ寒風のはげしいこと。その中に大粒の雪や氷塊がまじり、正面からぶつかってくる。もはや空も地も見分けがつかなかった。

ついにぼくは、雪の海に倒れた。もがいても、もがいても、どうにもならない。（LIFE エネルギー♥マイナス１）

その時だ。ふいに前方の空間に、幻が映像を結んだ。

青白い光に包まれ、かすかに揺れているように見える。それは、黒いマントを羽織り、腰に剣をさした男——黒騎士だった。

『どうした、しっかりと立て。そしてオーロラの見える方角へ進むのだ。おまえの助かる方法はそれしかない』

はっと気づいた時、幻はすでに消えていた。

ぼくは何とか立ち上がった。正面にオーロラがあった。不気味に美しく、極彩色に光り輝いている。それを目指して歩きだした。吹きすさぶ吹雪の中を、必死にあえぎながら……。

やがて、目の前に岩山を見つけた。その麓に、小さな洞窟があった。

●洞窟に入る　→343

●入らない　→116

41

ぼくは３匹のドドンゴを相手にした。

この怪物は、たしかバクダンを使って倒せるはず。

１匹につき１個として、全部で３個。

今ぼくは３個のバクダンを持っている？

●持っている　→218

●持っていない　→170

42

ドサリ。ぼくは落下した。雪のおかげで助かったが、かなりのダメージ。（LIFE エネルギー♥マイナス１）

さあ、大変だ。無理を承知でモルドアームと戦うか？

●戦う　→203

●逃げる　→186

43

ただひたすら海岸を歩き続けた。

やがて湾の反対側へ着いた。岩山を登り、高台へ出る。

そこでぼくが見つけたのは、小さな泉。ほとりには花が咲き乱れ、チョウが舞っている。そう、ここは妖精の泉だったのだ。

43

水際まで歩いていくと、水の中から小さな妖精がピョンと飛び出した。赤い服に透明な羽根の少女。

「こんにちは、旅の人。御機嫌はいかが？」

かわいい声であいさつをしてくる。ぼくはにっこりと微笑みをおくる。

彼女はぼくのまわりを飛び、その魔法で体力を回復してくれた。**（LIFEエネルギー♥が、今持っている器の分だけ満杯になります）**

しばらくして、泉の妖精に別れを告げ、ぼくはまた、はてしなき旅に出た。　→233

44

ぼくは生かしておくことにした。

こいつ、殺してもあきたらないヤツだが、聞きたいこともある。

「じゃあ、生かしておいてやる。二度とぼくに歯向かわないと誓うなら」

「誓います。誓います。わしはこれでも、約束だけは守る主義なんです」

ホントかいな。まあいい。ぼくはデオーにいろいろと聞いた。**〈死の谷〉**の場所。その他、いろいろ。**（クリスタルを失っている場合、全部が戻ります）**

「よし、ではこのままぼくを、**〈死の谷〉**まで連れてゆけ。何か変なことをたくらんだら、即、殺すぞ」

「へえへえ、ようがす」と、大コウモリは言った。「わしと組んだら、まあ大船にでも乗った気でいてくだせえ」

よく言うよ、まったく。まあ、とにかくこれで楽に**〈死の**

43 御機嫌いかが？ 小さな妖精は、その魔法でぼくの体力を回復してくれた

44

谷〉まで行けるってことだ。

ヤツはぼくを乗せ、一路北へと飛行を続けたのだった。

→300

45

マジカルロッドを出し、それを怪物に向ける。

ロッドの先端が、青白く光り輝いた。その光が、バイアに向かいまっすぐ飛んだ。この光の呪文には魔法の力がある。もろにくらった怪物は、ギエッと叫んだ。翼がまったく動かなくなってしまったのだ。

ヤツはそのまま、くるくるとまわりながら落下を始めた。

もちろん、それで生きていられるはずがない。

ぼくは、また崖を登りだした。（**LIFEエネルギー♥プラス1・20ルピー得る**）　→141

46

道なき道を行き、山の西側から裏手へまわりこんでみた。

眼下は断崖絶壁、落ちたらひとたまりもない。とはいえ、苦労して、てっぺんまで行くよりはましだろう。

難所を乗り越え、やっと向こうがわへたどり着いた。

ほっと一息つき、背後を振り返る。おや、誰かぼくの後をつけてくるじゃないか。あれだけ苦労して越えてきた崖を苦もなくヒョイヒョイとやってくる。黒い頭巾にボロぎれのような服。魔獣デオーの部下の魔物にちがいない。

おちおち休んでられないな。ぼくは先へ進んだ。　→210

47

これはワナに決まっている。ぼくはその声を無視して歩きだした。

47 目の前で何かが光る　それは、次々と地面から湧いてくる　これは一体、何だ!?

47

墓地の真ん中を抜け、足早に歩いた。するといきなり、目の前で何かが光った。まるで花火のようにフワッと浮かび、パッと音もなく消える。

それは地面の１か所から次々と湧いてくる。

魂の光か。いや、そうじゃなかった。次の瞬間、その光たちはいっせいにぼくめがけ、襲いかかってきたのだ。クルクルと渦を巻いてぼくを包み込み、光の洪水で惑わせようとする。ぼくは——。

●ファイアソードかミラクルソードを持っている　→216

●マジカルソードしか持っていない　→164

48

「冗談じゃない。そうまんまと敵の誘いにのってたまるか」

ぼくはヤツの取り引きをつっぱねた。

「そうかい。じゃあ、あの怪物と戦ってみるんだな。ルガルーはおまえなんかのかなう相手じゃないぞ。八つ裂きにされるがいい」

デオーはそう言い、不敵に笑った。

ぼくはルガルーに向きなおった。その狼男はぼくの戦意を感じたのか、ガウッと唸った。

この怪物に何の武器で戦いを挑む？

●（持っていれば）バクダン１個　→162

●（持っていれば）銀の矢　→272

●剣で戦う　→128

49

銀の矢があった。

ぼくはそれを弓につがえた。壁にかかるミラクルシールドにねらいをつけ、銀の矢を射た。それはまっすぐねらいどおりシールドに命中する。**（銀の矢を失う）**

その勢いで、ミラクルシールドは床に落ちた。

さあ、決断だ。チャンスを選べ！

●すぐに走る　→208

●ちょっと待て　→177

50

歩き続けると、空はどんよりと曇ってきた。

あたりは薄暗くなり、夜の気配となった。そこは陰々滅々とした沼地だった。足元はぬかるみ、歩くたびに足が沈む。

ところどころに立つ、枯木が不気味にシルエットと化している。沼の水は泡だち、毒気を吹き上げている。

一刻もはやく、ここを抜けよう。そう思った時、前方に人

50 黒騎士だ！　彼は、手招きしている。一刻も早く、ここを抜け出したいが……

50

影が見えた。誰だろう？　こんな場所に。

その人間はこっちへ歩いてくるようだ。立ち昇る毒気のゆらめきの中、ぼくは目をこらして見た。

黒い装束――。黒騎士だ。

彼は、こっちへ来いとばかりに手招きしている。ぼくはどうしようかと迷った。

●ついて行く　→17

●行かない　→310

51

その洞窟に入ってみた。ひんやりとした空気が、そこに満ちている。

ぼくははっと立ち止まった。突き当たりの岩壁の手前に何かがうごめいている。目をこらして見た。

それは生物だった。ぶよぶよと柔らかそうな体。気味悪く光る外皮。イソギンチャクの化物、リーバーだ。ヤツはぼくを見ると、無数の触手をうねらせつつ迫ってきた。

とっさに剣を抜き、身がまえた。

てっとりばやく倒し、ここを出たいが……。

LIFEエネルギー♥は満杯？

●YES　→326

●NO　→27

52

何考えてるんだ、こいつ。

ぼくは剣をヤツに突き出した。その攻撃をかわし、大コウモリはまた飛んだ。カッと開いた口から、超音波を発する。すかさず、ぼくはシールドでよける。

52

巨大な翼が風を切る音。それが迫った。ころあいを見はからって、ぼくは剣を突く。

強い手応え。切っ先がデオーの翼を斬り裂いた。怪物は悲鳴を上げ、崖に向かいすっ飛ぶ。そしてらせんを描きながら、谷底に向かい、落ちていった。

これじゃ、いかなデオーでも生きちゃいられまい。(LIFEエネルギー♥プラス3)

ぼくは剣を収め、神殿に向かい歩きだした。　→123

53

マジカルシールド。この強力なる盾ですら、グリオークの恐ろしい火炎には負けてしまった。

怪物はぼくのすぐ前——宙空に静止し、炎を吹きつけてきた。その熱で盾自体がカッと熱くなり、ぼくの手を火傷させてしまったのだ。そのため、スキが生じた。

はっと思った瞬間、シールドは枯葉のように舞い、同時にぼくも恐ろしい勢いでふっ飛ばされていた。

岩壁にたたきつけられつつも、ぼくは何とか意識を保っていた。命を救ったのはそれゆえだろう。身を起こすと、すぐに盾を拾った。　→198

54

グリオークは飛翔しつつ、炎を吐いた。猛火の嵐が吹きつけてくる。片手でシールドをかまえた。ところが、崖にぶらさがっての無理な姿勢。ものすごい熱風を防ぎきれるものではない。

ぼくは、盾といっしょにふっ飛ばされた。木の葉のように宙を舞い、岩地にたたきつけられる。あまりの衝撃に、気が遠くなりかけた。そこへ、ヤツの火炎が襲いかかる。さいわい、直撃はまぬがれたものの、ぼくの体は再びふっ飛ばされることとなった。(LIFEエネルギー♥マイナス3)

こりゃ、ちょっとヤバインでないの?

LIFEエネルギー♥はまだある?

- **YES　→328**
- **NO　→238**

55

今のぼくはLIFEエネルギー♥が満杯だ。あんな橋、楽勝さ。気合いを込め、剣をかまえる。その切っ先を橋のロープに向ける。と、剣の刃が7色に光った。そこから連続して光の矢が飛んだ。

ねらいどおりだ。ビームは一直線に空を切り裂き、2本の橋のロープを切断した。とたん、その木の橋はきしみながら降りてきた。

ばあーん。ものすごい音。舞い立つ土煙。そして橋は渡された。

そこを渡りながら、谷底を見る。すごい高さ。下から吹き上げる風も強い。

やがて渡り終え、神殿の前に来た。　→123

56

エネルギーは満杯。今なら剣のビームが使える。

よし。先手必勝だ。ぼくは剣を海面の怪物どもに向け、気合いをこめて光の矢を放った。それは次々と波の向こうに吸い込まれ、ゾーラの顔を貫く。すると、半魚人はあっという間に炎に包まれた。

56

数匹の怪物を射抜くのに、そう時間はかからなかった。
やがて静寂が訪れた。波間にいくつも浮かぶ死骸を後に、ぼくはイカダをこいで進んだ。**（10ルピー得る）**　→117

57

ぼくは10ルピーを出した。**（10ルピー失う）**
「さあ、その情報とやらを話してもらいましょうか」
老人のホンネを聞いたとたん、態度も変わってくる。ま、こりゃ仕方のないことか。
老人はこう言った。「おぬしのこれから行く場所で、雪の中に光るものを見ることがあるじゃろう。それを拾え」
「どういうことですか？」
「わからんのか」
「さっぱりです。意味を教えてください」
「実はわしにもさっぱりじゃ。何しろこれは、こっくりさんに聞いたのじゃから」
「いっぺん殴ってもいいですか？」
「やめてくれ、わしのせいじゃない。仕方ない、おわびにこれをやろう」老人がくれたのは、１本のローソクだった。
ぼくはあきれてしまった。損か得かわからないよ。**（ローソク１本得る）**　→231

58

とっさにマジカルブーメランを投げた。
飛翔してくる怪物。その眉間にブーメランは命中した。
ガーゴイルは悲鳴をあげ、空中で身をよじらせる。ぼくの頭上を越え、後ろの床に落ちた。間髪いれず、剣をかざして突っ込んだ。敵の脇腹に刃先を突き立てる。

56 ぼくが放ったビームは、怪物ゾーラを次々と射抜く　ビームの威力はさすがだ！

58

心臓を貫かれると、さしもの怪物もさすがに命尽きた。ぼくは剣を抜き、床にへたりこんだ。**(LIFE エネルギー♥プラス2・30ルピー得る。さらにバクダン５個得る）**　**→160**

59

このまま歩き続けることにした。

が、歩くにつれて体力はおとろえる一方。やがて、めまいがし始め、風景が反転した。ぼくは足をもつれさせ、ついにその場に倒れてしまう。**(LIFE エネルギー♥マイナス１)**

気がついた時、ぼくの頬に当たる風は涼しかった。顔を上げるとあたりは薄暗い。夜だ。

日はすでに西の地平線の彼方に沈み、かすかな残光が空を染めている。歩くなら今しかないって？　だけど、ぼくにはほとんど体力は残っていないんだよ。**どうすればいいんだ？**

●とにかく歩く　→149

●その場で休む　→227

60

しばらく進んでいくと、やがてもやの向こうに低い丘が見えてきた。その手前で、道が二手に分かれている。丘の上に登る道と丘をまわりこむ道。

その選択はきみにまかせよう。さあ、どっちに行く？

●丘に登る　→327

●丘をまわりこんでいく　→288

61

銀の矢はあった。そうだ。この武器は、アルゴンをこそ倒すためにあったのだ。

ぼくはそれを弓につがえ、思いきり引き絞った。はたしてヤツがこっちを見る前に、急所を射抜けるか。

影はさらに床を近づいてきた。足音。そしてシッポを引きずる音。アルゴン、大トカゲの体が、柱の陰から出た。

今だ。ぼくは矢を放った。それは怪物の心臓めがけ、まっしぐらに飛ぶ。断末魔の絶叫が、静寂を破った。

アルゴンは弓なりにのけぞって、床に倒れる。でかいシッポを二、三度振り、柱に打ちつける。が、やがて静かになった。**(まだミラクルシールドを得ていない場合、それを得る銀の矢を失う)**

ふう。ため息をつき、その場にしゃがみ込んだ。戦いは終わったのか。いや、そうは思えない。　**→200**

62

ぼくは剣を抜き、ヤツにかかっていった。

両手で握り、斜めに勢いよく斬りつけた。が、デオーの姿は、まるで幻のように消えた。

どうしたんだ、殺気を感じ頭上を見上げる。デオーはぼくの真上にいて、今まさに飛び降りようとしているところだった。

「わっ！」とっさに、ぼくは身を投げ出し、飛びすさった。

次は何で戦う？

●（持っていれば）銀の矢　→271

●（持っていれば）バクダン１個　→235

●逃げる　→112

63

ぼくは背後の敵——スタルフォスに向きなおった。

本当の敵は、こいつだ。黒騎士に背を向け、剣をかまえる。

63

黒騎士は一時その場を離れ、そこに残るのはぼくと怪物どもだけとなった。彼は近くの岩の上で、ぼくを見ている。

★バトルポイント……リンクは♥＋F／スタルフォスは４＋Aで戦います。結果は？

- **勝った　→121**
- **負けた　→83**

64

怪物が迫る前に、ぼくは電光石火の速さで剣を抜いた。ミイラ男・ギブドは怪力が怖いヤツだが、ぼくの剣の敵ではなかった。縦真一文字に斬りつけると、ギブドは包帯の上からまっぷたつになった。**（LIFEエネルギー♥プラス１・15ルピー得る）**

その家には結局何もなく、ぼくはそこを出ざるをえなかった。　**→274**

65

「あーたらこーたら、オンマイセイソワカ」

ウイズローブはあらたな呪文を放ってきた。ぼくは金縛りにあい、その場に倒れた。体力がどんどん抜けていく。このままではヤツにやられてしまう。脱出するしかない。

気力をふりしぼり、体を引きずるようにして、そこから逃げ出した。**（LIFEエネルギー♥マイナス１）**

ところが、ぼくは——こともあろうに大事なクリスタルを落としてしまった！　**（クリスタル１本失う）**

LIFEエネルギー♥はまだある？

- **YES　→184**
- **NO　→101**

66

たいまつの明かり。

中に入ってまず見えたのは、この安らぎの光だった。

その光に照らされて、緑の服を着た商人がいた。

「ダンナ、ダンナ。いい品ありまっせ」

商人はもみ手をしながら言った。見れば敷き物の上にいくつかの商品が並んでいる。

商品	値段
バクダン（５個）	**50ルピー**
ローソク	**30ルピー**
マジカルキー	**70ルピー**
マジカルロッド	**50ルピー**
銀の矢	**90ルピー**
バイブル	**90ルピー**

（どれかを買うならチェックシートに記入して、値段分のルピーをマイナスします）

というわけで、ぼくはその岩穴を出た。

さて——。**→251**

67

ぼくは剣をかまえ、アルプにかかっていった。

怪鳥は奇声をあげ飛翔した。天井に羽音がこだました。

あまりに速いため、まるで旋風が飛んでくるようだった。かろうじて、その攻撃をかわした。が、風圧をもろに受け、ふっ飛ぶ。

ううっ。ぼくは壁に背をぶつけ、うめいた。頭を振って、かろうじて意識を保つ。落ちている剣を拾い、立ち上がろう

67

としたとたん、アルプは頭上から襲来した。

鋭いカギツメがぼくの頭を押さえる。最後にぼくが見たもの。それは怪鳥の——不気味に笑う、女の顔。その口から伸びる太い牙だった。

END

68

剣に頼ろう。サヤから抜き、ぼくはかまえた。刀身が陽光にきらめく。

イカダから身を乗り出し、海面に群れる半魚人どもを斬り払う。手応えがあるたびに、青い血潮が宙に飛んだ。だが、ヤツには武器があった。口から吐き出すビームだ。

五匹目をやっつけた時、それが飛んできた。左肩に食らい、ぼくはうめいた。あやうく海に落ちそうになる。(LIFEエネルギー♥マイナス1)なんとか身を起こした。 →265

69

ヤツは強かった。

ぼくの剣をヒョイとかわすと、鋭いツメを伸ばしてきた。

ぼくは肩をザックリとえぐられ、血潮を飛ばしてうめく。ギーニは迫りつつケタケタ笑った。

逃げるしかないが、体力は大丈夫だろうか。

LIFEエネルギー♥はまだある?

- YES →241
- NO →82

黒と灰色のまじりあった雲。空いっぱいに広がるその下をぼくは歩いていた。荒野を貫く一本道。その先には、岩山

70 その槍の先端に似た岩山には何かありそうだが、ここを登るのは至難のワザだ

70

がそびえたっている。

まるで槍の先端に似て、鋭くとがり、雲をバックにシルエットと化している。ぼくはその山に向かい、歩いていく。

しばらく行くと、その岩山がよりはっきりと見えてきた。

山の中腹まで道は登り、裏側に降りている。ぼくは切りたつ山を見上げた。この山は……。

山に登ってみれば、何かありそうだ。しかし、この険しい崖を登るのは骨が折れるどころの騒ぎじゃすまない。どうしようか。

●山に登ってみる　→129

●登らず向こうへ行く　→225

71

ぼくはついに無数の触手によって、ぐるぐる巻きにされてしまった。恐ろしい力でしめつけられ、呼吸すらできない。

ついに化物ダコのエサになってしまうのか。

いや、そうじゃなかった。一陣の風がさっと吹いたかと思うと、砂浜にひとつの影が出現した。長身の男——人間か。いや。殺気を帯びたその不気味な風貌からすると、人間とは思えない。そう。この男こそ、あの魔王ガルゴアの手下・魔獣デオーなのだ。

「ほう——」と、ヤツは意外という顔をした。「伝説の勇者、無双の剣士だというので、期待したが。いともあっさりと捕まってしまったじゃないか。まあいい。わしの用は、おまえの持っているそのクリスタルだ。すなおに渡すなら、命だけは助けてやろう」

ヤツは取り引きをもちかけてきた。いや、取り引きにもなっていないな。何しろ、断れば即、あの世行きだ。

大変なことになった。きみならどうする？

●クリスタルを持っているだけ全部出す　→201

●申し出を断る（あるいはクリスタルを１個も持っていない）　→99

72

薄れてゆく意識。ぼくは頭を振り、何とか正気を保った。

神殿の奥に行くデオーの後ろ姿。必死にその後を追おうとする。ヤツは神殿のある地下室に入り、やがて出てきた。

どうやら**〈死の谷の大神殿〉**のヒントを得たらしい。何とかあいつをとっつかまえて、聞きださねば。

神殿を去っていくデオー。ぼくはその後を追い、必死に歩き出した。　**→150**

73

東に向かってひたすら歩いた。だが、行けども行けども砂の海ばかり。陽光はあいかわらず強く、体じゅうの水分が全部蒸発してしまいそうに思える。

持っていた水はついになくなってしまった。この調子だと桶いっぱいに水を持ち歩いても、足りないにちがいない。

よろめきながら進める足も、ついに力尽きた。ふいにめまいがし、視界が反転した。

ぼくはその場に倒れ、あえいだ。（**LIFE エネルギー♥マイナス１**）

何とかしたいが、どうしよう？

●そのまま体力の回復を待つ　→146

●立ち上がる　→304

74

「えい！」

ぼくは剣を持つ手をふるい、胴に巻きついた触手を斬った。とたんに宙に投げ出され、岩壁に激しく体をぶつけた。

うめきながら、必死で立ち上がる。シュルシュルと不気味な音をたてつつ、また触手が伸びてきた。（**LIFE エネルギー♥マイナス１**）こいつはまずい。逃げないと大変だ。

LIFE エネルギー♥はまだある？

●YES　→197

●NO　→321

75

ぼくは退散することにした。

無理に戦うような相手じゃない。ムダな体力の消費はなるべくさけ、今後にそなえるべきだ。――なんて、ただの負け惜しみだったりしてね。

怪物に背を向けると、ぼくは一目散に逃げ出した。（**LIFE エネルギー♥マイナス１**）　→43

76

怪物とすれ違いざま、ぼくは剣を振ろうとした。

が、ねらいははずれ、それはむなしく空を切った。いや、それだけではすまなかった。空中でたくみに身をひるがえしたルガルーは、ぼくの腕に鋭い牙をたてたのだ。

だが、うめくヒマもない。ヤツはまた、身がまえている。

★バトルポイント……リンクは♥＋G／ルガルーは７＋Hで戦います。結果は？

●**勝った**　→158

●**負けた**　→258

76

77

銀の矢を出した。貴重な武器だ。もったいない気がするが、この際命には代えられない。

弓につがえ、思いっきり引き絞る。

迫りくるテスチタートにねらいをつけ、射た。それはまっすぐ怪物の体に飛ぶ。

かん高い悲鳴を上げ、テスチタートは身を振わせた。４つのハサミをパタパタと開閉させ、煙を吹きだす。そしてじきに動かなくなった。（**LIFE エネルギー♥プラス１・20ルピー得る、銀の矢を失う**）

ぼくはまた歩きだした。　→276

78

グリオークは飛翔しつつ、炎を吐いた。猛火の嵐が吹きつけてくる。片手でシールドをかまえ、それを防ぐ。だが、熱風の衝撃で、ぼくの体は激しく揺れる。

それでも何とか助かったのは、強力な盾のおかげだった。

竜が上空を過ぎた時を見はからって、ぼくはどうにか崖の

78 グリオークの吐く炎が、嵐のように吹きつけてくる。ぼくは必死に防戦した

78

上に体を引き上げた。

　見るとグリオークは低空に舞い降り、そして地に足をつけている。

　また来る気だ。なぶり殺しはごめんだぜ。

　状況を、よく考えて選択してくれ。

●グリオークと戦う　→252

●逃げる　→328

79

　ぼくはマジカルブーメランを投げた。

　それは鋭い曲線を描き、アルゴンの体をかすめた。

「がう!!」

　怪物は宙を舞うブーメランに対し、怒りの声をあげた。

　ぼくは走った。ヤツがブーメランに気を取られているうちに、何とかしよう。怪物がマヌケであることを祈ろう。

　今、ぼくのLIFEエネルギー♥は？

●12以上　→298

●11以下　→155

80

　歩いていくと、草原に出た。

　視界の前方、右から左までいっぱいに、草の海が広がっている。

　はたしてこのまま、あの草原に入っていいものか。

　ぼくは迷った。

　その時だ。ガサリ。草むらの一角が揺れたかと思うと、そこから何かが飛び出した。ズングリムックリとした体形。

　頑丈そうな体。サイの怪物・ドドンゴだ。

80

ヤツはぼくを見つけ、低く唸った。突進してくる気か。

さあ、このおそろしい状況に、きみならどう対処する？

●その場で剣を抜き、怪物を迎え撃つ　→313

●とっさに草原へ飛び込む　→167

81

ぼくはヤツに体当たりを食らわせた。

アルゴンは床にどうと倒れた。

さあ、どうする。ヤツは意外に素早く起き上がってきたぞ。

●戦う　→159

●ミラクルシールドをあきらめ、神殿の奥へ　→200

82

逃げようとしたそのせつな。ぼくは何かに足を取られ、その場にひっくり返った。地面に木ぎれが落ちていたのだ。あわてて立ち上がった時、ギーニは襲いかかってきた。

カッとひらいたその口。ズラリと並んだ牙が、ぼくの首筋にくる。次の瞬間、ぼくは鮮血にまみれ、どうと地に倒れていた。

END

83

スタルフォスはたいした敵じゃない。

が、油断するとえらいことになる。ヤツらと剣を交え、さっと飛びすさったとたん、それは起こった。沼地のぬかるみに足をとられ、ぼくは無残にもひっくり返ったのだ。

そこへ１匹のスタルフォスが飛びかかってきた。

「うっ！」ぼくは傷つけられた左肩を押さえ、うめく。

(LIFEエネルギー♥マイナス１)

ぼくは地面に手足をつけたまま、じりじりと後退った。

黒騎士が助けに入ったのは、その時だ。彼は風のように走ってきた。たちまちスタルフォスの２、３匹が体を寸断され、地に崩れた。ものすごい剣の腕だ。

「ここはまかせろ」彼はそう言って、ガイコツどものまっただ中に飛び込む。ぼくはうなずいた。

LIFEエネルギー♥はまだある？

●YES　→33

●NO　→287

84

谷へやってきた。

あたりには様々な動物の白骨が散らばり、それが遙か彼方まで遠々と続いている。

〈死の谷〉だ。ぼくはハッと気づいた。ここが目指すゴールなんだ。と、その時。頭上で異音がした。仰ぎ見ると――。

巨大な岩が、数個。ぼくに向かって落ちてきた。大変だ。

はたして逃げられるか。

今、ぼくのLIFEエネルギー♥は？

●10以上　→140

●９以下　→172

85

とにかく、逃げる方法を見つけよう。

逃げるなんてヒキョウだって？　とんでもないよ。今ぼくが置かれた状況を見てくれよ。重量級の怪物が６匹。ぼくを取り囲んで、じりじりと迫ってくるんだよ。しかもぼくには、バクダンが足りない。逃げも戦いの一手さ。

85

今、ぼくのLIFEエネルギー♥は？

● 7以上　→264

● 6以下　→318

86

宙を舞いながら、ガーゴイルはかっと口を開けた。その中には鋭い牙が無数に並んでいる。しかしぼくはひるまなかった。むしろ、それは絶好のチャンスだった。

持っていたミラクルソードを、その口の中に突き入れたのだ。勢いあまって、その剣先は怪物の後頭部から突き出した。

ヤツはそのまま、ぼくの頭上を越え、背後の壁に激突する。

鈍い音とともに、そこにクモの巣状のヒビが入った。

ガーゴイルは――息絶えていた。ぼくはその死骸から、剣を抜き取った。（LIFEエネルギー♥プラス3・50ルピー得る）　→160

87

とっさに持っていたシールドで防いだ。だが、雨のように糸は降り注ぐ。盾の１枚ではとても防ぎきれるものではない。

糸はシールドや腕にからみついてきた。突然の苦痛。

見れば、糸のからんだ腕が、赤く筋状にただれている。そうか、この糸は酸を含んでいるのだ。（LIFEエネルギー♥マイナス１）何とか剣を使って、糸を断ち切った。

ちくしょう、体力がもっとあれば、こんなヤツ……。

★バトルポイント……リンクは♥＋B／テクタイトは4＋Fで戦います。結果は？

●勝った　→133

●負けた　→3

86 ガーゴイルの鋭い牙が並ぶ口めがけて、ぼくは持っていた剣を突き出した

88

うっ。だめだ。

逃げようにも、そのエネルギーがない。ギブドの手にかかる力はますます強くなっていく。

そして、ぼくの意識は暗黒に飲み込まれていく。

END

89

投げつけた３個のバクダン。その爆発は、さすがにドドンゴどもを全滅させた。ふくれあがる巨大な火球。それは怪物どもをあっという間に飲み込み、焼き尽くしてしまう。だが、その衝撃はぼくをも巻き込んだ。

強烈な衝撃波が、ぼくを正面から襲ったのだ。

ぼくは木の葉のように宙に舞った。意識を失いかけていたのだが、大地にたたきつけられた時に我に返った。地面を転がりつつ、何とか止まろうとする。

ゴツン。でかい岩にぶつかり、ぼくはやっと止まった。頭に大きなコブができてしまう。イテーッ！　**（LIFE エネルギー♥プラス６・60ルピー得る、バクダン３個失う）**

ふう。ため息をつき、立ち上がる。　**→166**

90

ぼくは荒れはてた荒野をひたすら歩き続けた。

しばらく行くと、地平線にそって、なだらかにカーブを描きつつ延びる霧峰があった。よく見ると、それは深い森をすっぽりと覆っているのだった。

霧の森と呼ばれる場所だ。この森に入って、出てきた者はいない。だが、この旅を一刻も早く終わらせるために、あえて行かねばならないのだ。

89 投げつけたバクダンの衝撃は、ぼくをも巻き込んだ。これで怪物も全滅だ！

90

ぼくは霧の中に入った。水のように濃い霧。その中を泳ぐように進んでいく。あたりはいつの間にか、深い森になっていた。陽光が木立ちの隙間から差し込んでいる。それは白い世界に鋭い直線模様を作りだしている。

あたりは墓場のような静けさにみちていた。が、それだけにかえって不気味だ。

ふいにぼくは、立ち止まった。木々の間、濃霧を切り裂いて地表に落ちる光の中。ひとりの老婆が立っている。黒い頭巾をかぶり、杖を突いている。

●老婆に道を聞く　→261

●無視して先に進む　→214

91

私は、それを出した。

まっ黒い顔の像、その下の石板にある刻み。その中に３本のクリスタルとミラクルシールドを入れた。すると、石像の目が、まぶしく輝いた。

石板の文字の部分と透明な水晶の板が、ゆっくりとせり上がってくる。いよいよだ。３つの神殿で得た文字のそれぞれの頭の一字を打ち込むのだ。

私は緊張した。もし押しかたを間違えたら、トライフォースは悪のエネルギーを放ち、世界は一瞬にして滅んでしまうのだ。

さあ、慎重に——。

●ＲＡＯ　→111

●ＯＣＴ　→309

●ＯＲＣ　→144

92

だが、デオーは信じられないヤツだ。人を裏切るなど朝飯前ってヤツだ。ぼくは決心した。

「ダメだ。やはりおまえを殺す」

そう言うや、ぼくは一気にヤツの首を刺し貫いた。コウモリは絶叫を上げ、錐もみになって落下していく。

——と、まてよ。よく考えると、いっしょに落ちるぼくも、命はないってことか？

「わーっ!!」

ぼくは叫びながら、落ちていく。そして、暗黒の中に意識が飲みこまれていった。

水の冷たさ。その中で、ぼくは目覚めた。

はっとして、あたりを見回す。ぼくは今、湖の岸辺にいるのだった。

そうか。どうやら、水に落ちたので助かったらしい。

じゃあデオーは？　あたりを捜したが、ヤツ、あるいはヤツの死体らしきものは見えない。

まあ、いい。あれで生きているはずはない。**（LIFEエネルギー♥プラス３、またクリスタルを失っている場合、全部が戻ります）**

やがて、ぼくは立ち上がり、歩きだした。　→250

93

ぼくは剣をかまえ、むらがる骨の怪物にかかっていった。

見れば、スタルフォスの1匹は輝く盾を持っている。あれは噂にきくファイアシールドじゃないか。

ヤツらは手に手に剣を持って、ぼくを襲う。鋭い金属音が静寂を破る。その間、黒騎士はぼくをじっと見ている。

→121

94

デオーの音波攻撃。

それを、からくもシールドで防いだ。かなりのダメージを受けたが、さすがに強力な盾だ。デオーはぼくが無事なのを見ると、怒りの声を上げた。ぼくのすぐ上を滑空し、後ろのガレキに止まった。

そして再び翼を広げ、舞い上がった。牙をむき出し、こっちに向かい一直線に——。→156

95

どれくらい歩いただろうか。

およそ体力の限界と思えるぐらい、ぶっ通しで歩き続けた後、ぼくは砂につっぷして倒れ込んだ。両手を突き、かろうじて上体を起こしたが、視界はぼやけている。

だが、それでも前方に広がる海は見えた……。

海——!?

ぼくはそのとたん、跳ね起きた。

そう。ぼくの目の前に今、海があるのだ。　→20

96

ぼくはミラクルソードを得ていた。

その剣をかまえた時、アルプは飛んだ。すさまじい羽ばたきの音とともに。風をきり、迫る怪物。その体に思いきり剣を突きさす。

恐ろしいばかりの手応え。怪物の体はよほど硬かったにちがいない。だが、ミラクルソードの力はその鋼鉄の表皮をもしのいでいた。

血しぶきが飛び、アルプの絶叫が、神殿の中にこだました。

石畳に落ち、怪物はあがく。そして、息絶えた。(**LIFEエネルギー♥プラス3・50ルピー得る**)

やがてぼくは怪物の死骸を乗り越え、神殿の最深部に向かって歩きだした。　→226

97

後ろも振り返らず、ぼくはこぎ続けた。

ヤツらの爪が何度もイカダにかかったが、気にする余裕もなかった。

そして、どれくらいたっただろう。疲れきった体でどっと倒れ込んだぼくは、今度こそ死を覚悟した。ところが、ヤツらは襲ってこない。海を見れば、そこにあるのは静かな波ばかり。ゾーラの姿はどこにもない。

助かった。怪物どもはあきらめたのだ。ぼくは逃げきれたことを神に感謝した。(**LIFEエネルギー♥マイナス1**)

しばらくそのまま横になり、体力の回復を待ってから旅を続けた。　→117

98

何とか触手を斬り落とした。そして思いっきり飛んだ。

オクタロックは下顎を膨らませ、突如岩を吹き出した。

98

さいわい、それは肩をかすめただけだ。が、出端をくじかれ、攻撃は失敗に終わった。

さあ、次にどうする？

- **再び攻撃　→331**
- **逃げ出す　→75**

99

ぼくはその申し出を断った。

とたんに、魔獣デオーの形相が変わった。目がつりあがり、口が耳まで裂け、牙が突出する。

「よかろう。それほど死にたいというのなら、おまえの望みをかなえてやろう」

そのとたん、ぼくに巻きついているオクタロックの触手が、恐ろしい力でしめつけてきた。もはや悲鳴すら出なかった。

あっという間にそれは起こった。触手の怪力で、ぼくの上半身と下半身はまっぷたつ！

そう。このゲームはおしまいってわけさ。きみは天国でふたりの男に出会う。両方とも、ぼくだ。(これはある映画のセリフの引用です)

END

100

丘をひとつ越えると、谷間にひっそりと横たわる町があった。ぼくは、こんな場所に町があったなんて、思ってもみなかった。

だが、そこに入ってがっかりした。ガランとした廃墟。人っ子ひとりいないゴーストタウンだったのだ。

石造りの家。その壁にはヒビが走り、軒先や窓にはクモが巣を張りほうだい。これじゃ、人が住んでいるほうが不思議だ。

どうする？　それでも家に入ってみる？

- **入ってみる　→28**
- **入らず先へいく　→274**

101

今のぼくには体力が残っていなかった。

それを知ってか、ウィズローブめ、余裕しゃくしゃくといった風体で近づいてくる。

ぼくはついに、力尽きた。

そこへ魔物は、最後の呪文をとなえた。

「てくまくまーこん、てくまくまーこん、べっかんこー」

まったく、こんなおかしな呪文で死ぬなんて……。

END

102

とっさに盾を使った。ガーゴイルの体当たりをそれで受ける——なんて思ったのがそもそもの間違い。ヤツのパワーは予想以上だった。

強烈な衝撃。直後、ぼくの体は後方へすっとんでいた。

そして、石壁に激突。ぶざまに床へ転がってしまう。

かろうじて起き上がると、目の前に外へ通じる石段がある。

このまま、脱出するしかない。

ぼくははうようにして、その場を逃げだした。(**LIFE エネルギー♥マイナス1**)

やがて神殿を抜け出した。　**→344**

103

あのドドンゴの草原を遠く離れ、ぼくは旅を続けた。

これからまた、進む方向を決めなければならない。

じゃあ、きみにまかせよう。次のうちから選んでくれ。ただし、よく考えて選ばないと、ヘンな場所に行っちゃうぞ。

●北　→70

●東　→90

●西　→50

104

蜃気楼のあった方角に向かって歩いた。

そしてどれだけ歩いただろう。ぼくは熱砂の海のど真ん中で立ち止まった。

砂丘の彼方に、何かの影が浮かび上がっている。目をこらして見た。オアシスだ……（！）

そう。間違いない。蜃気楼でもない。本物のオアシスだ。

とたんに元気百倍、ぼくは飛ぶように走った。いや、実際はよろめきながら歩いていたのだろうけれど、はやる心ゆえだ。

やがて、そのオアシスにたどりついた。それは小さな岩山を真ん中にした林だった。岩の隙間から湧き出す清水を、手ですくって飲んだ。冷たいものが喉を通るたびに、ぼくは生き返るような心地よさを感じている。**（LIFEエネルギー♥プラス1）**

生き返ったとたん、その場にすわりこんだ。目の前に岩山がそびえている。その中腹に——洞窟があるじゃないか。

どう思う？

中にいいものがあるかもしれない。それとも、恐ろしい化

104 オアシスだ！　ぼくは、はやる心をおさえきれず、砂丘に向かって歩き出した

104

物がすんでいるのか。

●**入る　→51**

●**入らない　→197**

105

剣をかまえ、ヤツらの突進にそなえた。

恐ろしい地響きをたて、ドドンゴの群れは走ってくる。その先頭の１匹にねらいをつけ、ぼくは剣を突く。

次の瞬間、ぼくの剣は、はかなくも怪物の硬い表皮に跳ね返された。剣は根元からまっぷたつ。驚く間もなく、ぼくはヤツらの体当たりを食らっていた。

宙にはじかれ、飛んだ時、すでにぼくの命は尽きていた。

END

106

けんめいに剣をふるっているうち、それは怪物の翼をえぐった。バイアはギャッと悲鳴を上げ、ぼくから飛びすさった。今度は怒りの声を上げ、急降下しながらの猛攻だ。

だが、ぼくは冷静にそのスキをうかがっていた。

「えい！」気合いをこめ、剣を突くと、それはバイアの腹にもろにささった。

怪物は絶叫とともに、地表めがけて落下していった。

（LIFEエネルギー♥プラス１・10ルピー得る）

ぼくはまた崖の上に向け、よじ登りだした。　**→141**

107

ぼくはその穴を去った。

そしてまた歩きだした。

→322

108

ぼくは助けてやることにした。

するとギーニは――

「つまらねえモノですが、これを」と何かを差し出した。

つまらないものなら、くれるなっての。

なんていいながら、それをもらうぼく。見ればなんと、命の器じゃないか。**（命の器得る。持てるハートの数が２個増えます）**

ギーニはペコペコと頭を下げながら、墓石の向こうに消えていった。　**→237**

109

ぼくはマジカルミラーを持ち、もう一方の手に剣を持って怪物にかかっていった。アルゴンは、ぼくに向きなおった。とっさにミラーをかざす。そしてすかさず柱の陰に隠れる。

ぼくがヤツの金色の目を見たのは――幸運にも――鏡を通してだった。命が助かったのはそのおかげだ。

だが、安心しているヒマはない。アルゴンは唸り声を上げ、こっちに突進してきたのだ。

★バトルポイント……リンクは♥＋Ｅ／アルゴンは８＋Ｄで戦います。結果は？

●**勝った　→13**

●**負けた　→220**

110

ぼくは東へ東へと歩き続けた。

やがて、行く手に高い峰が見えてきた。頂上は雪をかぶっている。その手前に深い谷がある。そこへ行ってみよう。

→84

111

私は〈RAO〉と打った。

すると――。

像はクルリと後ろを向く。そして床を割って沈みだした。

「だめだっ」リンクが叫んだ。とたんに、私たちのまわりの空気が、にわかに変調をきたした。

トライフォースは青白く光りながら、ものすごい勢いで毒ガスを吐き出した。私とリンクはあっという間に息絶えていた。

そして、この黒いガスは、3日間ハイラルやそのまわりの国々を覆ったのだった。

UNHAPPY END

112

ええい。こうなっては逃げるしかない。

ぼくはくるりと背を向け、逃げだした。

「ほう。逃げるのか」背後からデオーの声。「だらしないぞ。それでも勇者リンクか」

むっかあーっ。ぼくは立ち止まり、ヤツに向きなおる。我ながら単純な性格。だが、どう戦う？

待てよ。もしマジカルロッドとバイブルがあれば……。

このふたつを持っている？

●**持っている　→206**
●**持っていない　→248**

113

とっさに、近くの柱の陰に隠れた。

その陰からわずかに鏡を突き出し、怪物の様子をうかがう。ヤツは黒い影となって、ジリジリとこちらに近づいてくる。

すぐ近くにきたため、ぼくは鏡を引っ込めた。足元の床を影が伸びてくる。剣を抜き、かまえる。

柱の向こうにアルゴンは現れた。すかさず、ぼくは剣を突き出した。

その切っ先はヤツの脇腹に深くめりこむ。アルゴンは怒りの声を上げ、振り向く。

危ないぞ！　すぐに剣を抜いたが……。

LIFEエネルギー♥はまだある？

●**YES　→81**
●**NO　→159**

114

ぼくは入ることにした。

しかし――

のぞいてみると、中は真っ暗。これは入っていくのにローソクがいるな。

今、ぼくはローソクを持っているか？

●**持っている　→211**
●**持っていない　→316**

115

ローソクをともし、ぼくは石段を降りて行く。

やがて、地下の狭い部屋へ出た。その突き当たりの壁に立つ1体の神像。

像の下にある四角い石板。その中央部にあるのは3つの穴。ぼくはそこに3本のクリスタルを入れた。

とたんに、神像の目が光った。光の流れが宙を走る。と、北側の壁に映像が投影された。

115

それは〈死の谷の大神殿〉のヒントだった。

その壁に映っているのはふくろうに似た形の絵、そして〈OWL〉という文字だ。

こ、これが？

ぼくはその文字をよく記憶し、クリスタルを手にその地下室を出た。**（リストからローソクを1本消す）→192**

116

ぼくは入らないことにした。どんなワナが待っているかもしれないのだ。オーロラの方角をとにかく探してみよう。

そんなわけで、ぼくは雪の中をあちこちと探しまわった。だが、行けども行けども雪ばかり。ひょっとして、さっきの洞窟が……と思って引き返した。が、元の木阿弥とはこのこと。洞窟はどこにも見当たらない。

結局、ぼくは損したワケだ。**（LIFE エネルギー♥マイナス1）　→38**

117

潮の流れにイカダを乗せ、進んでいく。

やがて湾の向こう——対岸にたどり着いた。浜辺に乗り上げ、陸に上がる。そしてぼくは歩き出した。　**→233**

118

ゾーラは口からビームを吐く怪物だ。気をつけて戦わねばならない。

武器は何にする？

- **（持っていれば）マジカルブーメラン　→209**
- **（持っていれば）銀の矢　→183**
- **剣で戦う　→68**

115 石板に持っていたクリスタルをはめ込む　光が流れ、壁に映しだされたのは——

119

デオーはものすごいスピードで、高い空に昇っていく。

すさまじい風圧。それにふっとばされないよう、必死に敵の体にしがみつく。そして剣を抜いた。それを大コウモリの首につきつける。

このまま一気に刺せば、ヤツは死ぬ。が、ぼくの命もそれで尽きるだろう。こんな高いところから落ちて、生きていられるはずがない。

だが、デオーを倒せば、他にトライフォースをねらう者はいない。後は誰かに頼めばいい。

ぼくはヤツの喉(のど)を貫(つらぬ)いた。デオーはすさまじい悲鳴(ひめい)を上げ、のけぞった。そして錐(きり)もみに落下を始める。

やがて、ぼくは意識を失っていった。

激しいショック。

水の冷たさ。その中で、ぼくは気づいた。

水底をけって水面に浮かび上がる。

顔を上げると、そこは湖の真ん中。

——と、いうことは。

そうか、ぼくは水に落ち、命拾いしたのだ。あわててデオーを捜した。ヤツもこの湖に落ちたに違いない。だが、どこにも見えない。

ま、いいか。どうせヤツは死んだはず。**(LIFE エネルギー♥プラス3、またクリスタルを失っている場合は、クリスタルが3本そろいます)**

岸辺に泳ぎつき、体をひきずり上げる。

そして、ぼくはまた歩きだした。 →250

120

岩山を降りだした。崖(がけ)の岩肌を伝い、じりじりと下に向かった。今度は怪物に邪魔(じゃま)されることなく、無事に下にたどり着くことができた。 →225

121

ぼくはスタルフォスめがけ、剣を打ち振った。

ガイコツどもはたくみにヒラリとかわしつつ、ぼくを攻撃(こうげき)してくる。が、そうはいってもスタルフォスごとき、ハイラル一の剣士であるはずのぼくにかなうワケはない。

敵は大勢だが、ぼくは1匹ずつ、確実にヤツらを倒していった。

戦いが終わり、沼地には、スタルフォスの死骸(しがい)が無数に横たわっていた。その中で、ぼくはファイアシールドを見つけた。**(LIFE エネルギー♥1・30ルピー得る、ファイアシールドを得る。またクリスタルを失っている場合、そのうちの1本が戻ります)**

それから黒騎士を振り返った。

彼は満足げにうなずき、ぼくに背を向けた。まるで、よくやったとでも言うように、だ。いったい彼は何者なのだ。

ぼくはまた、沼地を歩きだした。 →310

122

ぼくは剣を抜き、モルドアームに立ち向かった。

この巨大ミミズはいったん雪の海に潜(もぐ)り、すぐ目の前で再び出現した。

激しく雪を舞い上げながら、長い体を空中に突き出す。このチャンスを逃す手はない。ぼくは剣をかまえ、ヤツに走り寄った。怪物の体に思いきり剣を突き立ててやった。それは

122

柄までめりこんだ。

ところが、怪物はいっこうに止まらない。ぼくは剣を握ったまま、雪の上をズルズルと引きずられていく。

振り落とされると、この巨体の下敷きになってしまいそうだ。ぼくは必死に剣を握り、離さなかった。

その時だ。怪物の体に振りまわされるぼくの視界を、何かがかすめて行った。地表の雪中にキラリと光るもの。いったい、あれは何だ？

●剣をひき抜き怪物から跳ぶ　→303

●そのままつかまっている　→219

123

石の円柱を組み合わせ、築かれた大神殿。

大理石の石段を登ると、そこにさびついた鉄の扉があった。そこは押せども引けども開かない。そうか、ここにはカギが必要なんだ。そのカギ穴からのぞくと、中は真っ暗。こりゃローソクもいるぞ。

はて、マジカルキーとローソクは両方ともある？

●両方とも持っている　→323

●どちらか、あるいは両方持っていない　→243

124

デオーが合図すると、まわりにいた怪物どもがサッと退散した。どうしたんだ？　そう思ったとたん、デオーはぼくに歩み寄ってきた。ぼくは本能的に二、三歩後退った。

「久しぶりに、実のあるヤツと戦えるな。ガノンを倒したというその腕、とくと見せてもらおうぞ」

デオーは両手を振り上げ、カッと口を開いた。目が白光を

124 おまえの腕前を見せてもらうぞ　そういうなり、デオーは攻撃を仕掛けてきた

124

放ち、あたりの風景がその目に吸い込まれるかのように見えた。直後、ヤツの口が、目に見えない何かを飛ばした。

ぼくの命を救ったのは、本能かもしれない。とっさにかざしたシールドで防がなければ、どうなっていたことか。

ぼくの背後、広場を囲む石塀が、一瞬にしてバラバラに崩れたのだ。

そして、ぼくのシールドもあちこちにヒビが入っている。

人間の耳に聞こえない、特殊な音波。それをさらに増幅させたものを、デオーは放ったのだ。それは空気をすさまじい勢いで振動させ、あたりのものを一瞬にして崩壊させる。恐ろしい技だ。**（LIFEエネルギー♥マイナス1）**

こころしてヤツと戦わねば、ぼくの命はあっという間に尽きてしまう。**武器は何を選ぶ？**

●（持っていれば）バクダン1個　→235

●（持っていれば）銀の矢　→271

●（持っていれば）バイブルとマジカルロッド　→206

●剣で戦う　→62

125

剣でハサミに斬りつけた。カッキーン！　硬い音。剣ははじかれてしまった。ぼくはそのまま、ズルズルと引きずられていく。その時だ。霧の向こうに、黒い影が出現した。

テスチタートの本体だ。ふいにヤツはぼくを放した。

助かったと思いきや、怪物はぼくめがけて襲いかかってきた。

4つのハサミが、ぼくの体を引き裂こうと迫ってくる。

→204

126

もはや剣1本に頼るしかない。

ぼくは死を決意し、迫りくるドドンゴどもにかかっていった。

先頭の1匹をねらう。ヤツと接触する直前、ぼくは地を蹴って飛んだ。大きく放物線を描きつつ、怪物の上に降りる。

背中にまたがり、ヤツの首めがけて、剣を突く。ドドンゴはのけぞって、ぼくを振り落とそうとした。が、素早く隣の1匹の背に飛んだ。そいつにも剣の一撃をお見舞いする。

そして最後のドドンゴ。ぼくは3匹、次々と飛び移っては、その急所を刺していったのだった。

やがて。大地に静寂が戻ると、ぼくは怪物どもの死骸の前に立った。

幸運ゆえの勝利だ、と思った。ふえー。**（LIFEエネルギー♥プラス2・20ルピー得る）　→166**

127

大きなハサミ。その猛攻さえ気をつければ、怖くはない。

ぼくは冷静に敵のスキを見はからい、剣をかまえる。一度に2本、ハサミが来た。その間を抜け、突進。敵の本体の中心に剣を突き刺す。粘液が飛び散った。

「たあーっ!!」

真上に飛び、そのまま剣をかざしてテスチタートにトドメを刺す。さすがの怪物も、この電光石火の攻撃にはまいったようだ。

悲鳴を上げ、ヤツは動かなくなった。**（LIFEエネルギー♥プラス1・30ルピー得る）**

そして、ぼくはまた歩きだした。　**→276**

128

ぼくは剣を抜き、ルガルーに向かった。

怪物は風のように、突進してきた。立っていた時は２本足だが、走るとよつんばいだ。ものすごいスピード。

この速さで飛びかかられては、たまったものではない。

ぼくも剣をかまえたまま、ジグザグに走る。ルガルーが宙に飛んだ。一瞬遅れ、ぼくも床を蹴る。

今のぼくのLIFEエネルギー♥は？

- 12以上　→207
- 11以下　→76

129

崖は垂直に近く、登るのは困難に見えた。だが、足場にする岩のでっぱりは多く、なんとか登れそうだった。

ぼくは岩肌に手をかけ、崖をよじ登りだした。

風は強く、ともすれば岩から吹き飛ばされそうになってしまう。登れば登るほど、その激しさは増すばかり。上まではまだかなりある。

その時、何かが羽ばたく音がした。振り返ったぼくの目に映ったのは……。

デオーの配下の怪物・バイアだ。しかも普通のバイアと少し違うところがある。高空に舞い上がることができるように、巨大な翼を持っているのだ。

その翼を広げ、ヤツはぼくに向かってまっしぐらにやってきた。

今のぼくにLIFEエネルギー♥はある？

- YES　→306
- NO　→193

130

ぼくは逃げることにした。

クルリと背をむけるや、ものすごい勢いで階段を登りだす。

(LIFEエネルギー♥マイナス１)

背後に聞こえるのは、怪鳥アルプの不気味な笑い声だ。ヤツはまた羽ばたいて宙に舞った。ぼくが振り返った時、アルプは天井すれすれのところを、こっちに向かって飛んでいた。

ぐずぐずしていると、追いつかれてしまうぞ。

LIFEエネルギー♥はまだある？

- YES　→192
- NO　→333

131

ぼくは逃げた。モルドアームはその巨大な体で、雪を蹴散らしながら追ってくる。その音がものすごく、ぼくは何度も「もうだめだ」と思った。

気がついた時、怪物の姿はなく、唸りを上げて吹きすさぶ吹雪がそこにあるのみ。ぼくはその場にどっと倒れ込んだ。

おっと、このまま寝てしまえば凍死間違いなしだ。何とか起き上がり、歩きだした。　→349

132

背後に迫る脅威を考えると、迷っているヒマはない。

ぼくはとっさにそこへ飛び込んだ。ところが、そこはやけに広い。これではグリオークのヤツが入ってこられるじゃないか。が、もはや引き返すことはできない。

ぼくは慎重に暗がりを進みだした。ところどころに溶岩の池がある。熱気がものすごい。だがそのおかげで、洞窟自体がぼんやりと明るくなっている。

132

ふいに道がとだえた。行き止まりだ。

そして、そこにいたのは——!!

かん高い声で鳴く小さなドラゴン。小さいといってもゆうに人の背丈を越えている。グリオークの子供だということが、すぐにわかった。そいつはぼくに向かって威嚇の声をあげる。

その時、背後でものすごい地響きがする。入口から差し込む光を巨大な影がさえぎる。グリオーク。そうだ、親のドラゴンがやってきたのだ。

2匹の怪物にはさまれ、絶体絶命。きみならどうする？

●子供のグリオークと戦う →205

●親のグリオークと戦う →19

133

酸性の糸が大量にからんだシールド。ぼくはそれをあきらめ、剣をかざしてテクタイトにかかっていった。

怪物は糸を吐くのをやめ、4本の足をぐいと曲げた。次の瞬間、ヤツは飛翔していた。ぼくは身を低くし、待つ。

飛びかかってくるテクタイトの下から、剣を突き上げてやった。鋭い悲鳴。下腹から体液を流しつつ、怪物はひっくり返った。そしてヤツは死のケイレンに包まれていた。

（5ルピー得る）

ぼくはシールドを手に歩き出した。 **→348**

134

剣を振りまわし、触手を斬り続けた。さすがに敵にスキができた。ぼくは、それを見逃さなかった。

ぼくはダッシュする。腰だめに剣をかまえ、姿勢を低くして怪物を攻撃した。

132 行く手をはばむのはグリオーク。だが、背後からも脅威が迫っているのだ!!

134

グサリ!!　剣の先はヤツの柔らかい体に深々とめりこんだ。

一気にそれを引き抜き、持ちかえる。粘膜の奥にうごめく小さな目。それをねらって突いた。オクタロックは急所を貫かれ、死んだ。**（LIFE エネルギー♥プラス１・10ルピー得る）**

剣を収め、また歩きだした。　→43

135

ところがもはや、ぼくにはイカダを全力でこげるほどの体力は残っていなかった。

視界が回転し、全身がしびれてくる。そしてぼくはイカダの上にどっと倒れた。ここぞとばかりに襲ってくるゾーラの群れ。やつらはぼくを取りかこみ、鋭いツメで肉体を引き裂きだした。

うえーっ。ゾッとしない終わり方！

END

136

ぼくはあくまでも冷静を保っていた。

空中に投げ出されつつも、体勢を立て直し、剣をかまえた。

そして落下。

ちょうど真下では、地表の雪を割り、モルドアームが今まさに出現しようとしていた。ぼくはその先端に小さな目を見つけた。

そこだァ！

見事、剣は怪物の目玉を貫いていた。

再び宙にほうり投げられたが、ぼくは確実にヤツの最期を見た。大きくのたうち、モルドアームの巨体は雪に沈んだのだ。**（LIFE エネルギー♥プラス１・50ルピー得る。また、クリスタルを失っている場合はそのうちの１本が戻ります）**

ぼくはまた雪の中を歩きだした。　→349

137

ぼくはちゃんと３本のクリスタルを持っていた。

石台の穴にそれを差し込んだ。

ごとり……。中で何かが動いた。と、突如神像の両目が光った。その輝きは空中を走り石壁に当たった。光の投影。そこに浮かび上がったのは――！

ねずみに似た形の絵と〈ＲＡＴ〉という文字。これが〈死の谷の神殿〉のヒントというわけだ。よく覚えておこう。

それからクリスタルを再び持って、ぼくは神殿を出た。

→344

138

バクダンは３個あった。押しよせるドドンゴどもめがけ、それらを投げつける。**（バクダン３個失う）**

だが――。

ヤツらはあまりに近くに来すぎていた。

今のLIFE エネルギー♥は？

- **５以上　→89**
- **４以下　→297**

139

剣を抜き、バイアをにらむ。

最初、空中の黒い一点だったその怪物は、あっという間にぼくにうちかかってきた。

その武器は鋭い牙だ。ぼくはそれにやられないよう、必死

139

に剣をふるう。

★バトルポイント……リンクは♥＋C／バイアは６＋Eで戦います。結果は？

●勝った　→106

●負けた　→223

140

ぼくは突っ走った。頭上から降り注ぐ岩の群れをさけて。

前後左右で岩の落ちる激しい音がする。そして地響き。

最後のひとつをヒョイとかわしたとたん、岩の雨はやんだ。どうやらぼくは助かったらしい。谷には静けさが甦り、あたりには岩のかけらが散乱しているばかり。

妙だな。これもワナの一種か？　とにかく、先へ急ごう。

ぼくは谷を歩きだした。　→330

141

岩肌をじりじりとはい登った。そしてどうにか山のてっぺんにたどり着くことができた。

そこは切りたった山の突端というにふさわしく、やけに狭い場所だった。そして、ぼくはそこで見つけたのだ。

目の前の岩に、１本の剣がささっていた。それはミラクルソードだった。喜びいさんで、その柄に手をかけた。だが、それはピクリとも動かない。押しても引いても全然だめだ。

剣を抜くには何かのアイテムが必要なのか。ぼくは今、手にしている道具をいろいろと使ってみた。どれもだめだ。ひょっとして――！

●バイブルを持っている　→314

●持っていない　→245

142

子供のグリオークに飛びかかろうとした。そのとたん、ヤツはカッと口を開いた。そこから炎が吐き出された。

かろうじてそれをかわし、体勢をととのえる。手強いぞ。

★バトルポイント……リンクは♥＋B／子供のグリオークは３＋Eで戦います。結果は？

●勝った　→315

●負けた　→171

143

剣をかまえ、ヤツを待った。

デオーはまっしぐらにこっちに向かってくる。その口が大きく開かれた。すぐさま盾を向ける。左手に伝わるものすごい振動が、超音波の発射を告げる。ぼくはそのまま走った。

ころあいを見はからって、地を蹴って飛ぶ。

ジャスト・タイミング。ぼくはもろにデオーの背中にしがみついていた。こうなれば、こっちのもんだ。鋭い剣先をヤツの首に突きつける。

143

「さあ、化物。覚悟しろ」

「ごかんべんを」と、デオーは言った。「——命を救ってくれるのなら、何でもします」

往生際の悪いヤツ。どうしよう、こいつが何かをたくらんでいることは間違いないのだが……。

●助けてやる　→44

●殺す　→92

144

私は〈ORC〉と打った。

すると——。

残りの文字——〈T　IF　R　E〉が水晶板に浮かび上がった。それに私が打った文字が、合わさってひとつの言葉になった！

〈TRIFORCE〉——トライフォース

次の瞬間、像はカッと緑の光を放ち、そしてすぐにそれを消した。それっきり何も起こらない。

「どうしたのかしら」私は言った。「間違えたの？」

「いや、そうなら今ごろぼくらは死んでいるよ。大丈夫、もうあのトライフォースは取れるよ」

私はその言葉に従い、像のトライフォースに手をかけた。

と——。

“勇気”のトライフォースは、苦もなく取れたじゃない。まるで最初から何もなかったかのように。

「よかった！」私はそれをしっかりと抱きしめ、リンクの顔を見た。彼は優しく微笑んだ。

「さあ、帰ろう。城へ——」

143　ジャスト・タイミング　ぼくはデオーの背中に飛びのり、ヤツに剣を向けた

144

こうして、私たちは冒険を終えた。神殿の外に出ると、陽光がまぶしく目を射た。

HAPPY　END　エピローグへ

145

ぼくはその墓石をどけてみた。

すると、突然その下の穴から、白い煙がたちのぼった。

煙は見る見る何かの形をとる。それは白い布をかぶったような妖怪。墓場の番人・ギーニだ！

ヤツはぼくが身がまえるよりも早く、呪文をかけてきた。

「すぺいんのあめはおもにひろのにふる」

ううっ。ぼくは突然動けなくなり、その場に転倒した。そこへギーニが迫ってきた。ピンチだ。なんとか脱出しなければ、ゲームオーバーになってしまうぞ。

●（持っていれば）マジカルロッドを使う　→325

●自力で脱出する　→249

146

砂地に仰向けになり、照りつける陽光を見上げる。

日はやや傾いている。だが、夜まで命がもつかどうか。

やがて意識が薄れてきた。視野がぼやけだし、そして暗転してゆく。

ぼくは炎の海の中で、体を焼かれる夢を見た。

その炎をかきわけて、ひとりの男が現れた。黒いヨロイを着た騎士だ。その黒騎士は身をかがめて、ぼくの頭に手をかけた。唇に冷たい瓶の口がおしあてられ、焼けついた喉を冷たい水が通っていく。

その間、ぼくが見ていたのは、ヨロイの面の間から見える、騎士の優しさにみちた瞳だった。

はっと目が覚めた。上半身を起こすと、気力がすっかりよみがえっているのに気づいた。砂地についた手が何かに触れた。見れば、陶器でできた水筒。そうだ、これはあの夢に現れた黒騎士が持っていた物。

すると、あれは夢ではなかったのか。

ぼくは立ち上がった。（LIFE エネルギー♥プラス 1）

これからどうする？

●歩きだす　→180

●夜までここで待つ　→345

147

こうしつこいんじゃ、この先どれだけのドドンゴが出るかわからない。ここは逃げるにかぎるな。

ぼくは走ったが――。

今、ぼくのLIFE エネルギー♥は？

● 5 以上　→264

● 4 以下　→318

148

逃げることにした。この怪物は強敵だ。戦うとまず勝ち目はない。というわけで、ぼくはくるりときびすを返し、今来た方向に逃げ出した。（LIFE エネルギー♥マイナス 1）

すると、だ。ぼくの目の前に今度は違う怪物が現れた。

１つ目の大グモ・テクタイトだ。この怪物はライネルよりは弱いが、どうする？　戦うか、逃げるか。よく考えてくれ。

●戦う　→302

●逃げる　→23

149

歩きだした。まさにボロきれのようになった体を引きずりながら、ぼくはひたすら砂漠を歩き続けた。

やがて前方に何かの影が見えてきた。かすみがちの目をこらして見る。岩山だ。緑もあるぞ。

ぼくは急に元気づき、はうようにそこへ向かった。

小さな岩山だったが、ありがたいことに、水が湧き出しているじゃないか。その清水で喉をうるおし、ほっとひと安心した。まったく生き返った心地だ。（LIFE エネルギー♥プラス1）

まだここにいたいが、そうもしてられない。 →348

150

ちくしょう、デオーめ。絶対逃がさないぞ。

ヤツを追ってぼくがたどり着いたのは、谷間にひっそりと横たわる小さな町。人っ子ひとりいない、廃墟の町。

石造りの家。その壁にはヒビが入り、軒先の窓にはクモが巣を張りほうだい。ひょっとしてここは、デオーの隠れ家がある場所かもしれないぞ。

町に入り、しばらく行くが、やはり人の姿はない。 →28

151

波打ち際まで降り、そのまま海岸づたいに進んだ。

湾に沿って行けば、遠回りではあるが、確実に向こうまで行ける。と、まあ楽観的に考えて歩きだしたのだが……。

しばらく行くうち、甘かったことに気づいた。砂を蹴散らして、怪物が出現した。タコの化物・オクタロックだ。

ヤツはぼくの姿を見るやいなや、無数の触手を伸ばしてきた。

151 砂を蹴散らし、オクタロックはぼくに向かって触手を伸ばし、向かってきた！

151

どう戦おう？

●（持っていれば）バクダン１個　→347

●剣で戦う　→5

152

神殿の中に、どんなワナが待ち受けているかわからない。ぼくはすぐに入らず、少し様子をうかがうことにした。

ところが、ぼくのすぐ後ろにある脅威が迫っていた。そいつは一陣の風とともに出現した。黒い頭巾の魔術師・ウィズローブだ。ちくしょう、すぐに神殿に入ればよかったのだ。

マジカルロッドを持っている？

●持っている　→334

●持っていない　→24

153

正攻法じゃヤツにかなわない。そう悟ったぼくは、地を蹴った。一瞬ぼくを見失ったヤツは驚いたにちがいない。そのスキを逃さず、剣を投げつける。

それはねらいたがわず、魔物の胸に吸い込まれていった。悲鳴が静けさを破った。心臓を剣で貫かれたヤツは、ドサリと地に落ちた。即死だった。**（LIFE エネルギー♥プラス１・10ルピー得る）**

そしてぼくは神殿を目指し、歩いていった。　**→184**

154

ヤツらに何とか対抗すべく、剣を握った。だが、こっちに向かって走ってくるドドンゴのド迫力。こりゃ、とてもかないそうにない。ぼくは逃げることにした。

だが、はたしてドドンゴよりも速く走れるのだろうか。

LIFE エネルギー♥はまだある？

●YES　→264

●NO　→318

155

だが、ぼくが半分も走らないうちに、アルゴンはこっちを向いた。とっさにぼくは、近くの柱に隠れる。

そこにブーメランが戻ってきた。どこにいても確実に戻るのがマジカルブーメランたるゆえんだ。さて、あそこまで走れないとなると、どうやってシールドを取る？

●（持っていれば）銀の矢　→49

●このまま待って、様子をうかがう　→4

156

「たあーっ」

ぼくは飛んだ。シールドでヤツの超音波をかわしながら、その体にしがみつく。大コウモリは足のツメでぼくを引っかこうとする。ぼくとデオーは、そのまま空を目指した。

★バトルポイント……リンクは♥＋C／デオーは７＋Jで戦います。結果は？

●勝った　→119

●負けた　→281

157

バクダンで戦うことにした。

が、敵は３匹。

バクダンは３個以上ある？

●ある　→138

●ない　→286

158

気力をふりしぼり、ぼくはもう一度飛んだ。同時にヤツも飛んだ。ちくしょう、同じ手にかかってたまるか。ぼくは体をひねった。そこへルガルーが来た。喉(のど)をねらっている！

だが、今度はそうはいかない。とっさにヤツの腹に剣を打ち込んだ。噴(ふ)き出す血潮が、天井に散った。

ドサリ。ヤツは床に落ちた。が、まだ生きていた。

唸(うな)り声を上げ、立ち上がろうとしている。とっさにその首を斬り落とした。鈍い音とともに胴体が倒れる。**（LIFEエネルギー♥プラス１・20ルピー得る）**

ぼくはどうだ、とばかりに背後のデオーに向きなおった。が、ヤツの姿がいつの間にか消えている。気まずくなって逃げやがったか。

ともかく道は開かれた。ぼくは神殿の最深部に向かい、歩きだした。 →9

159

「やあーっ！」

ぼくは剣を上に振りかざし、斬りつけようとした。

が、それは、果たせなかった。怪物はこっちへ目を向けるかわりに、長大なシッポを振った。その先端(せんたん)がぼくの首を捉(とら)えた！

ぼくはすっ飛ばされ、近くの壁にたたきつけられた。

グッ。うめいて、頭を振った。何とか意識はあったが――ダメだ。もう、立てない。

アルゴンはゆっくりとぼくに振り向いた。その目が金色に光る。一瞬のうちにぼくの体は石になっていた。

END

158 ぼくは気力をふりしぼり、ルガルーに剣を突き出した。あたりに血が飛び散る！

160

そこを離れ、ぼくはさらに神殿の奥深くに分けいった。

歩き続けると、いきなり視界が開ける。そこは石のブロックでできた広い部屋。

あった！　今ぼくの目の前に、神像が立っている。

いかつい兵士の体の上にライオンの頭が乗っている。半人(はんじん)半獣(はんじゅう)の像だ。その足元——四角い石の台に、六角形の穴が3つ。クリスタルを入れる場所だ。

クリスタルは3本そろっている？

●3本ともある　→137

●足りない　→222

161

「たあーっ!!」

ぼくは剣を振り上げ、がむしゃらに突っ込んでいった。

アルゴンはそんなぼくを、ひややかに見た。トカゲの目が金色に光る。それが、ぼくが生前に見た最後の光景だった。

カチン！　足元からぼくは固まっていった。そして、この地下室の石像がひとつ増えた。

END

162

バクダン1個を出した。

ルガルーはぼくに向かって突進してきた。立っていた時は2本足だったが、走る時はよつんばいだ。ものすごいスピードだった。

ねらいすまし、バクダンを投げた。すさまじい音がし、火柱が天井まで上がる。爆風がぼくをもきりきり舞いさせる。

この爆発では、さすがの狼男も生きてはいられないだろう。と思いきや——。

爆煙の中から、唸(うな)り声がした。空耳かと思った。が、そうじゃない。怪物は突如(とつじょ)煙の中から、襲いかかってきた。ぼくはその手のひと振りで壁にたたきつけられた。（**LIFE エネルギー♥マイナス1**）

ぼくは何とか起き上がり、立った。ルガルーは再び元の位置に戻り、身がまえている。　**→258**

163

ぼくは立ち直り、マジカルロッドをかまえた。それを振ったとたん、その魔法の杖(つえ)は光り輝いた。

ギーニは目を押さえ、苦しげにうめき始めた。

ロッドの威力(いりょく)は絶大(ぜつだい)だ。たいがいの魔物はかなわない。

「ヒヤーッ、お願いだ。命ばかりは助けて下さい」

ギーニは地面に手をつき、命乞いをする。

「——もし助けてくれたら、いいものを差しあげましょう」

どうする？　この妖怪の言うことを信じるか。

●助けてやる　→108

●トドメを刺す　→268

164

ぼくはマジカルソードを振った。

宙を飛ぶ光めがけ、真一文字(まいちもんじ)に斬りつける。光は一瞬にして四方に散った。

だが、それはぼくの注意をそらすためのオトリだった。

気配(けはい)を感じ振り返ったとたん、ぼくはそいつともろに顔を合わせてしまった。ギーニだ。墓場の妖怪。

白い布をスッポリとかぶったような姿。それは妙にコミカ

164

ルなヤツだったが、強敵なのだ。ぼくは剣を抜き挑んだ。

★バトルポイント……リンクは♥＋D／ギーニは６＋１で戦います。結果は？

●勝った　→229

●負けた　→69

165

再びテクタイトが、糸を吐いた。思いきって、ぼくは剣をかざして飛んだ。

怪物は予想外の攻撃に驚いたにちがいない。宙を舞うぼくの眼下に、無防備のテクタイトの背中があった。そこへ剣先を向けた。そして、落下。

グサリ！　鈍い感触と同時に剣は怪物の背にささった。

大グモは断末魔の悲鳴をあげ、息絶えた。**（LIFEエネルギー♥プラス１・10ルピー得る）**

シールドを拾い、ぼくは歩き出した。　**→348**

166

ドドンゴとの戦いは終わった。

ぼくは疲れきった体にムチ打って、ゆっくりと歩きだす。

その時——。

背後の草むらが、ガサゴソと揺れた。ぼくはギクリとする。まさか——（！）

いや、ドドンゴは全滅したし、気のせいさ。

「ははははは……は？」

草むらを突き破って、何かが飛び出した。数10匹の——ドドンゴの群れだっ！

うわあ、もうイヤだあっ。何だかハチャメチャ状況にな

164 白い布をかぶったような妙にコミカルな姿…… こいつはギーニだ！ 強敵だぞ

166

ってきたぞ。ど、どうすればいい？　早くきめてくれェ！

●戦う　→244

●逃げる　→291

167

ぼくは草むらに飛び込んだ。この中なら、視界がきかない。背の低いドドンゴは戦いにくいにちがいない。

背丈のある草の中、ぼくは剣を握りしめ待ちかまえた。前方からドドンゴの足音が聞こえる。ものすごい地響きだ。と、いきなりぼくの横の草が、ガサリと揺(ゆ)れた。そこから別のドドンゴが出現した。

うわっ。ちょっと待った。ぼくは走り、さらに深い草むらに飛び込んだ。

●そこで戦う　→295

●他へ逃げる　→215

168

荒りょうたる原野。

ぼくはその真ん中に立ち、これから行く方向を考えた。

行けるルートは四方にあるが、たった今ぼくが歩いてきた方向は除くことになる。したがって、選ぶ道は３つだ。

楽な道もあれば、危険な道もある。どんなことが待ちかまえているか、それはきみの選び方次第だ。

よく考えて決めてほしい。

●北へ　→60

●南へ　→80

●東へ　→100

●西へ　→40

169

それから、ぼくはこの場を後にした。

次はどの方角に行く？　よく考えて選んでくれ。

●東へ　→60

●西へ　→10

●南へ　→40

170

残念ながら、バクダン３個は持っていない。

さあ、困ったぞ。戦うかどうか、よく考えて決めてくれ。

おっと、そんなヒマはなさそうだ。

●戦う　→105

●逃げる　→299

171

「えい！」

再び攻撃した。ヤツの炎をよけざま、剣を突き出す。そして体当たり。鈍い音がして、敵の首に剣先がささる。

ところが、ちょっと勢いが強すぎた。ぼくの体は止まりきらず、敵を飛び越える。

あっと思ったとたん、回転する視界に、この旅の終点が見えてきた。

それは煮えたつ溶岩の海だった。宙を舞うぼくは、その灼熱(しゃくねつ)の地獄にもろに突入することになったのだった。

END

172

雨のように降りそそぐ岩。ぼくはその間をぬって必死に走った。ところが、前後左右に落ちる岩。それはますます激しくなる。すぐ横に落ちたヤツが砕けた瞬間(しゅんかん)、破片(はへん)がぼくを

172

打った。(LIFEエネルギー♥マイナス１)

岩はそれっきりピタリと降らなくなった。どうやら助かったらしいぞ。岩の当たった左肩を押さえ、ぼくは立ち上がる。

そしてまた歩きだした。 →330

173

教会を離れ、町の真ん中の広場に行った。

そこでぼくを待っていたのは、デオーだった。そう。あの魔王ガルゴアの部下、魔獣と恐れられた怪物だ。だがヤツは黒服の人の姿でいた。広場の中央で数匹の化物をひきつれて。

さあ。とうとうにっくき強敵と出会ったぞ。

「ようこそ、我が町へ——」と、デオーは言った。

何だって？ いったいどういうことだ。

「ここまでたどり着いたことは、ほめてやろう。さすがに、伝説の勇者だけのことはある。だが、ひとつわからないことがある。今までの戦いの中、我々は傷ついたおまえの血をこっそりと持ち去り、ある儀式(ぎしき)を行った。我らの王・ガルゴアさまに灰にその血を振りかけたのだ。

言い伝えによればガルゴアさまはそれで甦(よみがえ)るはずだった。だが、それは、果たせなかった。なぜだ？ リンク、きさまはいったい何者だ」

「見た通りのものさ。はかない夢は捨てて、魔界へ帰れ」

「きさま……」デオーの表情が豹変(ひょうへん)した。目が吊(つ)り上がり、口が耳まで裂けた。その端から牙(きば)が突出する。

うはあ。ちょっとおちょくりすぎかな。

●戦う →124

●逃げる →285

174

南へ向かってしばらく歩いた。

沼地はまだまだ続いたが、足元のぬかるみはやや渇(かわ)いてきた。やがて、遠くに小高い丘が見えた。そのてっぺんに石造

174

りの建物がある。

神殿だ。ぼくは、はやる気持ちを抑えつつ、その丘に向かって急いだ。

神殿へ来ると、石柱に囲まれた入口があった。そこから入ると、中は意外に明るい。地下への石段を見つけ、そこを降りだした。

地下の床に足をつけたとたん、ものすごい羽ばたきの音がした。ワシの翼を持ち、人間の――女の顔をした怪鳥。アルプだ。この神殿で像を守っているのは、こいつなんだ。

ヤツと戦いたいが、今、ぼくのLIFE エネルギー♥は？

●10以上　→338

●9以下　→292

175

剣をかまえ、ヤツの本体にかかっていった。だが、4本のハサミはやっかいだ。ぼくは回転しながら襲いくるそれらに、剣で対抗しつつ、地を蹴った。

はたしてテスチタートに一撃見舞えるか。

今、ぼくのLIFE エネルギー♥は？

●7以上　→254

●6以下　→204

176

デオーの恐るべき超音波。ぼくはシールドで防いだが、いかんせんヤツのそれは強力だった。

ぼくは盾といっしょに、ふっ飛ばされた。背後の石塀に激しくたたきつけられる。気絶しかけたぼくの上を、コウモリの影がかすめて飛んだ。（LIFE エネルギー♥マイナス1）

デオーはぼくを通りすぎた場所に着地した。ガレキの上に立ち、翼を折りたたみ、向きなおった。

逃げるしかないが、LIFE エネルギー♥はまだある？

●YES　→285

●NO　→273

177

ぼくはじっと様子をうかがった。ヤツが今どこにいるかわからないのは危険だ。

その姿は、すぐに見つかった。（もちろん鏡を通してだ）

アルゴンはなんとシールドのすぐ近くにいた。あれじゃ、もしぼくがすぐに飛び出していたら、アウトだったな。

だが、ホッと胸をなでおろしているなんて余裕はない。怪物はぼくの位置をつかんだらしく、こっちにまっしぐらにやってくる。ヤツが来る前に何とかミラクルシールドがほしい。

マジカルブーメランはある？

●ある　→312

●ない　→39

178

石柱の門を抜け、建物の中に入った。

中は意外に明るく、奥まで見渡せた。その突き当たりに、ひとつの影がうごめいている。

神殿を守る怪物・ルガルーだ。全身金色の剛毛におおわれ、とがった耳。その耳まで裂けた口。その口の両端からのぞく大きな牙。そう。ルガルーは狼男だ。こいつは強敵だぞ。

そう思った時、背後に誰かの気配がした。はさみ打ちか!?

振り返った。そこに立っているのは、黒い衣装を着た男。

178

「きさま、デオー！」

ぼくは思わず、そう叫んだ。ガルゴアの配下・デオーだ。ヤツはこっちにツカツカと近寄ってきた。

「リンク、おれの提案を受けないか？」デオーは言った。

「なにっ？」

「この神殿には、解き明かすべき秘密がある。どうだ。おれと組んで、あのルガルーを倒し、秘密を共有しないか？」

うーむ。この男、大胆な申し出をしてきたぞ。はたしてこの取り引きに応じてよいものか。よく考えなければ……

●取り引きに応じる　→228

●断る　→48

179

ぼくの手にはファイアソードがあった。崖の上にはい上がり、剣をかまえた。グリオークはぼくを見、唸り声を上げる。

背後は溶岩の海。一歩も引くことはできない。

グリオークに向け、突進した。矢つぎばやに飛んでくる火炎をかいくぐり、怪物の下腹めがけて剣を突く。一撃二撃と刺すうち、怪物の腹は血まみれになる。さしものグリオークもこうなってはひとたまりもない。やがて、グリオークは地響きをたてて倒れ込んだ。（**LIFE エネルギー♥プラス 2・50 ルピー得る**）　**→169**

180

東と思われる方角に向かい、再び歩きだした。

あの騎士のものらしい足跡が、砂地にあった。それはちょうどぼくが向かうほうへ続いている。

日はだんだんと地平線へ傾いているが、照りつける陽光はあいかわらずだ。水筒の水もじきに尽き、ぼくはまた喉の渇きを感じだした。歩みもしだいにおとろえ始め、熱気の中で物が二重に見えてくる。（**LIFE エネルギー♥マイナス 2**）

ぼくはまた、その場に倒れた。

必死に身を起こし、何とか立ち上がった。　**→263**

181

ぼくは砂漠にやってきた。

乾ききった広大な砂の海。その上に情け容赦なく陽光が降り注いでいる。熱気の中にたち昇るのは陽炎だ。

どっちを向いても砂ばかり。それでも方角がわかるのは、天にかかった太陽のおかげだ。ただし、この暑さじゃ、感謝もしていられないがね。

さあ、きみ。どっちへ行こう？

●東へ　→73

●北へ　→247

●南へ　→342

182

ええい。先手必勝！

剣をかまえ、ぼくは怪物に突進した。たちまち怪物は火炎を吐き出した。身を低くし、盾で防御しながら、突っ込んだ。グリオークの手前で、思いきりジャンプ。

宙を舞いつつ、反転。剣を持つ手を突き出した。

無我夢中だった。ぼくが炎の帯に触れず、ヤツに剣を突き刺せたのは、まさに奇跡に近い。

ヤツは首の付け根のあたりを貫かれ、激しく吠えた。

ぼくは剣を持つ手を放さなかった。柄を握り締めたまま、

182

ぶらさがっているのだ。怪物が身をよじらせるたびに、ぼくは激しく振り回される。そのうち剣がひっこ抜けた。

どさりと地に落ち、ぼくはうめく。あわてて体勢を立て直したが、その必要はなかった。

グリオークは最期の絶叫をあげると、どうとばかりに倒れた。**(LIFEエネルギー♥プラス2・50ルピー得る)**

まったく手強いヤツだったぜ。ぼくは勝利の満足感に酔いしれながら、また歩き出した。　**→169**

183

ぼくは銀の矢をかまえる。グイと引いて、先頭の1匹をねらった。矢は目標めがけてまっしぐらに飛ぶ。そいつは悲鳴をあげ、波間に沈んだ。だがそのスキに他の半魚人どもが迫っていた。イカダの後ろからはい上がろうとする。振り向きざま、そいつを蹴り落とす。**(銀の矢を失う)**　**→265**

184

〈第一の神殿〉へ入った。

幾重にも曲がりくねった細い路地。そこを進んだ。

待ちうけていようワナを用心して、慎重に、ゆっくりと歩いていく。やがて、下へ降りる石段を発見した。地下は真っ暗、何も見えない。

- **ローソクを持っている　→35**
- **持っていない　→8**

185

その場にばったりと倒れ込み、仰向けになった。

陽光は情け容赦なく、顔や手足に降り注いでいる。が、幸い日はずいぶんと西に傾き、しばらく待てば夜になりそうだ。

185 倒れ込んだぼくに向かってテクタイトは容赦なく攻撃してくる　どうかわす？

185

ぼくはこのまま、じっと待つことにした。

だが、現実はそうあまくない。

すぐそばの砂地が、まるで噴水のように吹き上がった。と、その砂塵の中から、黒い影が出現した！　それは巨大なクモの化物・テクタイトだった。

ヤツは不気味な一つ目でぼくを見つけた。同時に4本の長い足で宙に飛んだ。

気力を振りしぼって起き、ぼくは身をかわした。が、安心するヒマはない。テクタイトは振り向きざま、こっちに向けて糸を吐き出してきたのだ。

●**糸をかわす　→339**

●**シールドでよける　→87**

186

ぼくは、逃げようと思った。

LIFEエネルギー♥はまだある？

●**YES　→14**

●**NO　→203**

187

リーバーは触手を伸ばしてきた。それをかわしざま、ぼくは突進した。

「たあーっ!!」

気合いとともに、敵の体を貫く。刃先は柔らかい肉にめりこんだ。怪物は悲鳴を上げ、ぐにゃりとつぶれた。傷口から青い血をほとばしらせ、たちまちしぼんでしまう。（**5ルピー得る**）結局その洞窟には何もなかった。しかたなく、ぼくは外へ出た。　**→197**

188

ぼくは必死に逃げだした。

ところが霧のため、思うように走れない。背後からは、テスチタートがものすごいスピードで追ってくる。何度もつまづいて転び、その都度立ち上がっては再び走った。

しかし何度めかに倒れた時、ぼくは立ち上がれなかった。もうだめだ。そう思ったせつな、霧の中から、誰かの手が伸びてきた。それはぼくの肩をつかみ、立ち上がらせた。

「しっかりしろ」と、声がした。

ぼくは薄れつつある意識の中、かろうじてその男の顔を見た。黒い仮面に隠されてはいたが、その中から優しげな目がぼくを見下ろしている。

なかば気を失いながらも、ぼくは男の肩に負われているのがわかった。彼はぼくを背負ったまま、森を走っていた。

やがて、テスチタートをふりきったのだろう。ぼくは大木の根元に降ろされた。

はっと気づいた時、黒騎士の姿はなく、木々の間を音もなく流れる霧が見えるばかり。ゆっくりと立ち上がり、ぼくはあたりを見わました。

あっと気づいた。持っていたクリスタルを1本落としている！（**LIFEエネルギー♥マイナス1、クリスタル1本失う**）

ぼくは肩を落として、霧の中を歩きだした。　**→276**

189

霧に引っ張り込まれないよう、ぼくは必死にとどまった。

すると、ハサミはぼくの足を放し、スッと消えた。あきらめたのか？　いや、そうじゃなかった。白いもやの中、ヌッと黒い影が現れた。

189

テスチタートの本体だ。円盤状の体の四方についた大きなハサミ。それらが気味悪くくねっている。もとはただの食肉植物だったらしいが、魔王の呪いにより変身したのだという。

ヤツはかん高い唸り声を上げ、ぼくに迫ってきた。

★バトルポイント——リンクは♥＋A／テスチタートは4＋Hで戦います。結果は？

●勝った　→127

●負けた　→236

190

ぼくはまだ生きていた。

奇跡といってもいい。が、もはや一歩も動けない。このままデオーに殺されるのを待つばかりか。

ヤツは笑いながら、ゆっくりと近づいてきた。これからの血みどろの殺戮ショウを楽しむ気か。

その時、入口から誰かが風のように入ってきた。

それは一瞬、黒い旋風のように見えた。黒い衣装を着た剣士、黒騎士だった。

「き、きさま。誰だァ！」デオーのあせった声。黒騎士はぼくと、ヤツの間に立ちはだかった。彼の目が仮面の下で、不敵に笑った。そして、ゆっくりとマスクに手をかけた。

「おっ、おまえはァ——っ!!」

デオーは死にものぐるいで飛びかかった。男は動じることなく、デオーを一刀のもとに斬り捨てた。

剣をしまい、彼はこっちを向く。優しさにみちた、その瞳、笑顔。

「遅れて悪かったね。——ゼルダ！」

ぼくは——いや、私はドキンとした。やっぱり、この人は……本物のリンク。そうなんだ。今まで戦ってきたリンクは、私——つまりゼルダがその名をかたって、なりすましていたのだ。きみにウソをついていたのは悪かったけど、これも敵をあざむく手段だったの。私の病気も、もちろんウソ。

なぜかって？　つまり、あの時本物のリンクは、この世界に来ていなかったから。後でくわしく話すけど、黒騎士が本物のリンクだったなんて。私、ちっとも知らなかった。

いつの間にか、時空を超えてこの世界に来ていたのだ。そして、陰になり日なたになって、私を守ってくれていたのだ。

「よかった。どうなることかと思ったわ」

「話は後だ。とにかく、“勇気”のトライフォースを取ろう」

リンクの提案に、私は賛成した。

さあ、クリスタル3本とミラクルシールドはある？

●ある　→91

●ない　→255

191

バクダン1個を怪物に投げた。地面に伏せたとたん、轟音。舞い上がる炎。テスチタートは見事ふっ飛んだ。

ところがその爆発は、ぼくも巻き込んでいた。そう、あまりにも近すぎたのだ。さいわい、命は取りとめたが、そばの立ち木にたたきつけられてしまう。

しばらく気絶していたらしい。気がつくと、すぐそばに怪物の死骸がある。**（LIFEエネルギー♥マイナス1・10ルピー得る、バクダン1個失う）**

やがてぼくは立ち上がり、また歩きだした。　→276

192

ぼくは石段を登り、神殿の外へ出た。

陽光が目にまぶしい。

→290

193

しまった。そう思った時はすでに遅かった。

体力のないまま、こんな崖を登ろうとしたぼくが間違っていた。とっさに剣を抜こうと身をよじった。が、それはかなわず、ぼくは怪物の襲撃を食らった。

鋭い牙で背をえぐられ、ぼくはのけぞった。何とか岩をつかんだままだったが、もはや上へは行けなかった。ましてや下へ降りることは不可能に近い。ぼうとしてなすすべもなく崖にぶらさがっているぼく。

そこへまたバイアが襲ってくる。運命はもはや決まっていた。鮮血にまみれながら、ぼくは地表めざして落下していった。

END

194

ぼくは少しずつ体を動かしながら、崖をはい降りだした。

怪物は風のように襲いかかる。体をかばいながら、ぼくは剣を振るった。

うまくぼくに傷を負わせられないので、バイアは不満の声を上げる。思いきり剣を突くと、ヤツは高空に飛び去った。

そのスキにぼくは、岩肌を地表に向かって降りた。（**LIFEエネルギー♥マイナス１**）怪物は上空で不満の声を上げている。崖下の道に戻ったぼくは、そこを登りだした。このまま山の向こうに行くしかない。　→225

195

ぼくは剣を抜き、ライネルにかかっていった。

怪物はカッと口を開け、威嚇の唸り声を上げる。そして、

195

青銅の剣を振りかざし、ぼくに向かって突進してきた。金属と金属がぶつかりあい、激しく火花を散らす。だが、ぼくはすぐに身をひるがえし、ヤツの背後に襲いかかった。

横殴りに剣を払うと、ライオンの頭がすっとんだ。そしてほどなく、その胴体もどっと倒れこむ。ライネルは死んでいた。（LIFE エネルギー♥プラス１・10ルピー得る）

ぼくはその死骸をまたぎ、坂道の向こう側に向かった。

→289

196

向こうへ行きたいが、それにはこの険しい山を越えなければならない。

しかたなく、ぼくは急な坂道を登りだした。

上へ行くにつれ、道はしだいに険しくなってくる。地上ははるか下方にあるが、頂上はまだまだ先だ。

と、その時コウモリの群れが襲ってきた。ただのコウモリじゃない。キースと呼ばれる、魔物の一種だ。が、もっとも下等な種族。

ヤツらはいたずらにギャアギャア騒ぎたてぼくのスキをうかがっていた。

ぼくは剣を振りまわし、ヤツらをなんなく撃退した。

一息つき、また山の頂上を見上げる。

これ以上登っても、無意味だって気がしてきたぞ。

きみならどうする？

●さらに登り続ける　→18

●あきらめて下へ　→344

●中腹をまわりこみ進んでみる　→46

197

ぼくはその場から去った。

洞窟を離れ、すぐにそのオアシスを後にした。灼熱の砂漠に舞い戻り、そして一路南を目指し、ひたすら進んでいく。　→95

198

ここはいったん引きさがったほうがいいぞ。

必死に盾をかまえつつも、ぼくはそう考えた。そして炎がとだえた。竜は息をつくため、首を曲げ、ゆっくりと天を仰ぐ。閉じた口の両端から、煙が噴き出した。

ヤツが再びこっちを向く前に、ぼくは脱兎のごとく逃げ出した。背後でグリオークが怒りの声を上げた。

ひるまず、ぼくはとっとこ駆ける。やがて前方に岩穴を見つけた。（LIFE エネルギー♥マイナス１）

●岩穴に入る　→132

●入らない　→７

199

何度斬りつけても、触手はいっこうに切れない。そのうちヤツの血で体がヌルヌルしてきた。それを利用し、ぼくは脱出できた。

逃げたほうがよさそうだ。くるりときびすを返すと、ぼくは走った。

ところが、ぼくはその時、気づかなかった。触手に巻きつかれていた時、大事なクリスタルが１本吸盤に吸い付いていたのだ。それに気がついたのは、ずいぶんと逃げてからのことだった。（LIFE エネルギー♥マイナス１、クリスタル１本失う）　→43

200

神殿の奥に向かった。

はたしてそこに何が待っているのか。

ぼくは、はやる気持ちを抑え、ひたすら歩く。いちばん奥の壁に、鉄の扉を見つけた。そこを押し開け、ついに大神殿の心臓部に入る。石のブロックで囲まれた小さな部屋。

その真ん中に、男の首を形取った像がある。そして、驚くなかれ、“勇気”のトライフォースはその顔にはめこまれていたのだ。像の下には、これまた四角い石板がある。それには無数に並んだ文字が刻んである。そのひとつひとつがスイッチになっているらしい。

そして、３本のクリスタルとミラクルシールドをはめこむ刻みがある。いよいよ、“勇気”のトライフォースを得る時がきたのだ。

「これが……」そう、ひとりごちた時――。

轟音がし、ぼくのそばの壁が崩れた。それは大きな破片となって、ぼくの上に落ちてきたのだ。

あまりに突然のことなので、ぼくは自分の体をかばうことすらできなかった。

うわーっ。もろに下敷きだ。意識こそ失っていなかったが、そのショックは大きかった。その壁を壊したのは、誰あろう魔獣デオーだったのだ。

ヤツはコウモリの姿で、塵芥をついて現れた。

「ここまで案内してくれて、ありがとう」

しゃがれた声で、デオーは言った。「おかげで何の障害もなく、“勇気”のトライフォースを手に入れられるよ」

ち、ちくしょう。なんてしぶといヤツなんだ。生きていたとは……。ぼくはあがきつつ、ヤツを見上げた。

「ところで、教えてはくれないか。おまえの正体を」

「な、何のことだ？」

「とぼけるんじゃない。おまえの戦いを今まで見てきたが、どうもリンクじゃなさそうだ。誰だ？　おまえは」

「旅の商人カイロスだ」

「それはわしが殺した男の名だ。本当のことを言え。」

「修業者ゼイトン」

「それもわしが手がけたヤツだ。おまえは誰なんだ？」

ヤツはぼくに近づいてきた。

今、ぼくのLIFEエネルギー♥は？

●17以上　→32

●16以下　→２

201

仕方なく、クリスタルを出した。

魔獣デオーはぼくの手から、それを奪い取った。**（クリスタル全部失う）**そこですぐに解放されると思ったのが、そもそものまちがい。ぼくにまきついていたオクタロックの触手はますます、力強くぼくをしめつけてきた。そして次第に意識が遠のいていく……。

やがて、気がつくと、ぼくは砂地をズルズルと引きずられてゆくところだった。足に巻きついているのはオクタロックの触手だ。

さては、デオーのヤツ。このぼくを魔王ガルゴア復活に使おうってハラだな。屈辱感が次第につのってくる。クリス

201

タルを取られ、おまけに生き血まで抜かれてたまるか。

ぼくはとっさに、足を振りほどいた。オクタロックめ、安心していたのだろう。ぼくはその触手をあっさりと抜け、駆けだした。やがて、誰も追ってこないのを確認すると、ぼくは砂地に倒れた。デオーめ、この仕返しは必ずしてやるからな。（**LIFE エネルギー♥マイナス１**）　**→43**

202

黒騎士はぼくの前を、足ばやに歩いていく。

なぜか、彼は決してぼくの接近を許さなかった。急いで近づこうとすると、彼もさっさと早足になる。そうしているうち、道はまた急な登り坂になり、ほどなく下りになった。

そこを降りたところに、美しい泉がある。ぼくは久しく見なかったその景観に、思わず見とれてしまった。そこにはやすらぎがあった。美しい花。木々の緑。

見ているうちに、泉の水から飛び出したものがある。

妖精だ。赤い服に透明な羽。その小さな生き物が手にしたスティックを振ると、奇跡が起こる。ぼくの体に見る見る活力が湧いてきたのだ。妖精の魔法の力だった。（**LIFE エネルギー♥が、持っている器のぶんだけ満杯になります**）

はっと気がつくと、黒騎士の姿はどこにもいない。そうだ。彼はぼくをこの泉に導いてくれたのだ。

しかしいったい何者なのだろう？　**→270**

203

とても逃げられる状態じゃなかった。

ぼくは剣をかまえ、振り返った。モルドアームはまっしぐらに突き進んでくる。カッと開いた巨大な口。それはあまりに大きすぎた。

剣を振るうこともできず、ぼくはその中に呑み込まれていった。

END

204

逃げたいが、今のぼくに逃げられるだけの体力はある？

LIFE エネルギー♥はまだある？

- **YES　→188**
- **NO　→224**

205

子供のグリオークと戦うことにした。小さいからといってけっしてあなどることはできない。ぼくは汗ばむ手で剣を握りしめた。

今のぼくの LIFE エネルギー♥は？

- **３以上　→315**
- **２以下　→142**

206

ぼくはマジカルロッドとバイブルを出した。

とたんに、デオーの顔色が変わった。さすがにこれにはかなわないというワケか。

「むははは。デオー、うろたえているな。きさまの超音波なぞ、この武器にくらべれば――!?」

うはあーっ。しゃべっているうちに、いきなりデオーの超音波がきた。とっさにシールドの後ろに隠れつつ――ちょいとぼくはしゃべりすぎ、かな？――マジカルロッドとバイブルを合わせた。

206

すさまじい音の壁の中、ぼくは合わせたふたつのアイテムをデオーに向けた。ロッドの先端から、炎が噴き出した。

それは、ぼくとデオーの間、かなりの距離を一瞬にして結ぶ。その超音波野郎は火の塊に変わった。

やったか。ぼくは立ち上がった。その人型の炎は、ますます勢いよく燃え上がった。そして——ボロボロと何かが崩れ落ちだした。何だ？　ギョッとして見る。デオーは炎の中、何かに姿を変えつつあるのだ。

炎といっしょに、ヤツは人間の皮を脱ぎ捨てた。そこから出たのは……。

巨大な翼を振り、風を切る音。瞳のない金色の目。全身を覆う剛毛。それはコウモリの怪物だった。そうだ。デオーの正体はお化けコウモリだったのだ。

ヤツは今まさに襲いかかろうと、激しく羽ばたいた。

どひゃーっ。これは手強そう。**この怪物に勝つには、そう、ミラクルソードがよさそうだが。持っている？**

●持っている　→267

●持っていない　→242

207

狼が真上に来た。このチャンスをぼくは逃さなかった。

空中でぼくと怪物が交差した瞬間、ぼくの剣は怪物の下腹に食い込む。絶叫が神殿の中にこだました。

ドサリ。床に落下した時、ルガルーの命は尽きていた。

（LIFEエネルギー♥プラス２・30ルピー得る）

ぼくはどうだ、とばかりに背後を振り返った。が、デオーの姿がない。気まずくなってトンズラしてしまったのかな。

まあいいサ。ぼくは神殿の奥に向かって、再び歩きだした。

→9

208

今しかない。ぼくは走った。

シールドはすぐ前だ。あと少し。すぐだァ——(!?)

ぼくは立ち止まった。

ばん。大きな音をたて、怪物の足がシールドを踏む。

アウトだ。ぼくは絶望の思いとともに、その場に立ちすくむ。今、ぼくの目の前に、アルゴンがいた。その金色の目が、ぼくを見すえている。

一瞬後、ぼくは足元から石に変わっていった。

END

209

ぼくは持っていたマジカルブーメランを投げた。それは波の上をカーブをきりながら飛び、ゾーラの１匹に命中した。

半魚人は青い血しぶきをあげながら海中に沈んでいく。

ブーメランはぼくの手元に戻った。すかさず第二投。２匹目のゾーラが沈む。そして三投、四投。恐れおののいたゾーラが逃げ去るまで、ぼくはひたすら投げ続けた。**（LIFEエネルギー♥プラス１・５ルピー得る）**

ぼくはまたイカダをこぎ、旅を続けた。　**→117**

210

山の向こうは、荒りょうとした岩地だった。

そして、今ぼくの目の前にあるのは——くち果てたひとつの神殿。正面入口に竜の石像が置いてある。

そう、これが探し求めていた〈**第一の神殿**〉なのだ。崩れ

210

かけた巨大な円柱。ツタのからみついた石の壁。うむ、ここからの選択は、また、さらに重要だぞ。

●**すぐに入る　→184**

●**この場で様子を見る　→152**

211

ぼくはローソクをともし、その岩穴に入った。

だが、その穴にいるのは無数の蛇。まったく、ヤブヘビってのはこのことだ。蛇は蛇でもこいつは魔物の一種・ロープだ。猛毒を持ち、危険この上ないヤツだが、火をかざすとザワザワと逃げていく。そのスキに岩穴の奥にかけこんだ。

(リストからローソクを１本消す)

が、そこには何もない。入ったざけムダだったのだ。

仕方なく、ぼくは岩穴を出た。　**→29**

212

首にかける、その手を何とか振りほどいた。ダメだ。今のぼくの力じゃ、とても勝ちそうにない。逃げるしかない。

というわけで、ぼくはその家から逃げ出した。ギブドのヤツ、意外と消極的で、外まで追ってこない。(**LIFE エネルギー♥マイナス１**)　**→274**

213

ガーゴイルの目がギラリと光った。

とたんにヤツは飛んだ。そして風を切って、まっすぐこっちに向かい迫ってくるではないか。

今、ぼくの LIFE エネルギー♥は？

●**７以上　→86**

●**６以下　→305**

211 ローソクをともしてあたりを見ると、なんとそこには無数の蛇が……

214

老婆のいるところから、さらに森の奥に進んだ。

奥にゆくほど、霧は濃くなってくる。視界はほとんど白い闇。木の影すら見えない。ぼくは手さぐりで進んで行く。

これでは、何があってもわかったものじゃない。

いきなり、霧の向こうで異様な音がした。と、だしぬけにぼくの足を何かがつかんだ。見れば、大きなハサミ。

カニか？　いや、ちがう。人食い植物・テスチタートだ。

本体は見えないが、怪物はぼくの足を霧の中に引きずりこもうとする。ものすごい力。

●何とかとどまる　→189

●攻撃する　→125

215

草むらから走って出た。２匹はまだ、あの草の海にいる。ぼくを見失い、怒っているはずだ。ざまを見ろ。

その場を去ろうとした。くるりと後ろを向く。

「何だ!?」

ギョッとして、ぼくは立ち止まる。草原の反対側。岩だらけの原野に、またしてもドドンゴがいる。都合、３匹目。そして、草むらから残りの２匹が出てきた。ハサミ打ちだ。

→41

216

とっさに剣を抜き、光の渦めがけ、斬りつけた。

とたんに、それはパッと四散した。すかさず、剣を持ちかえ地面を刺し貫く。

地中から、ギャッと声がした。まるで血が湧きだすように、地面から光が噴出した。と、思ったとたん、その光が何かの形をとる。白い布をスッポリかぶったようなその姿。

ギーニだった。墓場の妖怪。ヤツはその胸に剣を受けた傷を持ち、その場へばったりと倒れた。ギーニは死んでいた。

（LIFEエネルギー♥プラス１・20ルピー得る）　**→322**

217

３本の首が、同時に火を吐いた。

「やあっ！」

かけ声を発し、ぼくはそれを飛び越える。そのまま勢いにまかせ、グリオークに向かった。右の首を斬った。そして真ん中の首にしがみつく。怪物はぼくは振り落とそうとするが、果たせなかった。

左の首が弧のように曲がり、ぼくを向いた。火を吐こうと口を開けた時、チャンスがやってきた。再びジャンプ。剣をかまえたまま、口の中に突入した。

確かな手応え。剣のめりこんだ傷口から、鮮血がほとばしる。怪物は唸り声を上げ、のけぞった。ぼくはヤツといっしょに地面にどっと倒れた。それが、グリオークの最期だった。

（LIFEエネルギー♥プラス３・50ルピー得る）　**→169**

218

素早く走りながら、ぼくはバクダンを投げつけた。

それらはいずれもドドンゴの前に落ちる。怪物どもはいっせいにそれをパックリと食ってしまった。

それを確認し、ぼくはその場に伏せる。

轟音。そして、３つの火柱が上がる。ドドンゴどもはバラバラにちぎれ、煙といっしょに空中に舞い上がった。**（LIFEエネルギー♥プラス３・40ルピー得る、バクダン３個失う）**

218

ふうとため息。ぼくは立ち上がる。そして去ろうとした。

くるりと後ろを向く。

(あら——!?) そこにまた、ヤツらがいた。そうなんだ。またもや、3匹のドドンゴ。

ちょっと待てよ。そりゃないよ。

●バクダンで戦う →157

●剣で戦う →105

●逃げる →147

219

だが、ぼくは剣を握りしめ、怪物の体にしがみついたままでいた。すると、モルドアームは突然大きくうねり、雪の中に突入した。もちろんぼくもいっしょにだ。

こうなると話は別だ。雪の抵抗で、ぼくはもみくちゃにされ、そしてふっ飛んだ。それでも剣を離さなかったのは、我ながら偉いと思う。気絶(きぜつ)したことは仕方ないとしても、だ。

(LIFEエネルギー♥マイナス1)

意識を取り戻した時、怪物の姿はすでになく、そこには静けさがみちていた。どうやら助かったようだ。が、クリスタルが1本なくなっている。必死に雪をかきまわし、探した。ところが見つからない。敵の手に渡ったのだろうか。**(クリスタル1本失う)** ぼくはあきらめ、歩きだした。 **→349**

220

とっさにミラーをかざして防ごうとした。

ところが、うかつにもそれを落としてしまった。あわてて拾おうとした。が、すべては遅かったのだ。

ミラクルミラーに手をかけ、顔を上げた時、怪物の冷たい、凶悪な、金色の目がぼくの視界に飛び込んできた。そのとたん、体が動かなくなった。足の先から氷のような冷たさがはい登ってきた。

ぼくは全身が石と化すのがわかった。まわりの石像と同じように。

END

221

怪物の動きは、ぼくの予想をはるかに上回っていた。

ギブドは、ぼくが剣を抜くより早く飛びかかってきた。よける間もなかった。ミイラ男の怪力を秘めた両手が、ぼくの首に迫ってくる。

ぐっ。万力のように締めつけてくる。ぼくの首は今にもねじ切られそう。脱出したいが……。

LIFEエネルギー♥はまだある?

●YES →212

●NO →88

222

ひえっ! クリスタルが全部そろっていない。

ぼくは愕然(がくぜん)としてその場に立ちすくむ。

何のためにここまで来たんだ。この神像は3本のクリスタルがそろっていないと、ヒントを教えてくれないのだ。

そこを何とか——なんて言っても、ダメなものはダメ。おとなしくあきらめて、敵からクリスタルを奪い返そう。それからまた、ここへくるしかない。

というわけで、ぼくは神殿を出た。そうとなりゃ、一刻も早く敵を捜さなきゃならないぞ。 **→344**

223

必死に剣をふるうが、それはバイアの体をかすりもしない。

かえってスキをみせたぼくに、敵の牙が襲いかかる。

血しぶきを飛ばし、ぼくはのけぞった。肩を押さえながら、振り返った。怪物はいったん高空に舞い戻り、旋回をしているところだった。ぼくに傷を負わせたためか、自信満々といった様子。

もはやこれ以上登ることはできない。逃げるしかないか。

今ぼくのLIFEエネルギー♥は？

● 5以上　→194

● 4以下　→280

224

逃げようとしたとたん、ぼくは霧の中に倒れた。

だめだ。もう、力がない。今のぼくは起き上がることもできない。絶望の感覚にとらわれた時、テスチタートのハサミが伸びてきた。4つのそれは、ぼくを捕らえ、あっという間にバラバラにしてしまった。

END

225

ここは風の峠という場所だ。昔、ある人に聞いたのを思い出した。怪物が多くいるということだ。ぼくは慎重に身がまえて、峠の坂道を登りだした。

登りきったところに、怪物がいた。あたかもぼくを待っていたかのようだった。ライネル——ライオンの頭、人間の上半身に馬の胴体を持つヤツだ。しかもこいつは、ビームを発射できる剣を持っている。

今の体力やその他から、戦うかどうかを判断してくれ。

●ライネルと戦う　→195

●逃げる　→148

226

さらに地下へ降りる階段がある。そこは真っ暗。何も見えない。

今ぼくにはローソク、そしてさらにクリスタルが3本そろっているか？

●全部そろっている　→115

●そろっていない　→332

227

まてよ。すぐに出発しても、また体力がなくなるだけだ。

しばらくここで休み、もう少し体調をととのえてから行くことにしよう。というわけで、ぼくはその場に横になった。

はっと気がついた。頬に当たるのは、じりじりと焼けつくような陽光。ぼくははね起きた。

何とあたりはすでに明るく、太陽は宙空に昇っているじゃないか。そう。ぼくは夜の間、ずっと眠ってしまったのだ。

砂地に横たわるまっ黒いぼくの影。それを絶望のまなざしで見下ろす。そして、ぼくはまた灼熱の砂漠を歩き出した。

（LIFEエネルギー♥マイナス1）　→348

228

デオーの申し出を受けることにした。

ここはいったんヤツと組み、あの狼男を倒してから考えればいい。

というわけで、ぼくはそのことをデオーに告げた。すると、黒服の男はニヤリと笑い、ぼくのそばに歩み寄った。

228

「よし、では行こうぜ相棒」

デオーは腰から剣を抜いた。ぼくといっしょに並んで、ルガルーにかかっていく。怪物は唸り、牙をむく。まず、打ちかかったのはデオーのほうだった。

片手で剣を低くかまえ突如、地を蹴った。

おそるべき腕だ。ルガルーの脇腹は彼の剣でスパッと斬られた。が、ルガルーも強かった。一度は床に倒れたが、素早く立ち上がるや、ぼくめがけてかかってきたのだ。

だが、ぼくは冷静に対処した。その突進をシールドではじき、ぼくはトドメの一撃をくわえた。横にないだ剣で、ヤツの首をはね落としてやった。

（LIFE エネルギー♥プラス２・20ルピー得る）

やった。横にいるデオーを振り返った。その時だ。ぼくは首の後ろに強烈な衝撃を受け、たまらず床に崩れた。うめきながら目を開いた。デオーだ。剣の柄で殴られたらしい。

やはりこいつは……。

「あまいな、坊や」

そう言うなり、ヤツはぼくのふところに手を入れ、クリスタルを全部取った。**（クリスタル全部失う）**

「この素晴らしいプレゼントのお礼として、おまえの命だけは助けてやろう。しばらくの間、そこでいい夢でも見ていろ」

足音が遠ざかっていく。

今、ぼくの LIFE エネルギー♥は？

●12以上　→72

●11以下　→239

229

このモンスターは手強い相手だ。まともに戦っては負けるに違いない。ぼくは剣で牽制をし、墓石をさっと飛び越えてから、ヤツの背後をとった。剣を打ち振る。強い手応え。

悲鳴が飛び、ギーニは地面に倒れる。が、まだ死んだわけじゃない。ぼくはトドメをさすため、敵の上に飛ぶ。逆手にかまえる剣を、ギーニの心臓に打ち込む。

妖怪はひとたまりもなく、死んだ。**（LIFE エネルギー♥プラス１・10ルピー得る）**

ぼくはその墓場を後にした　**→322**

230

あわてて崖にしがみついた。眼下は目もくらむような光景。

ぐつぐつと煮えたつ溶岩。必死に体を引き上げ、はい登った。こりゃ、逃げたほうがいいな。

思い立ったが吉日……。（!?）

グリオークに背を向けるや、ぼくはトットコ逃げ出した。

（LIFE エネルギー♥マイナス１）　→169

231

もうこの老人に聞くことはない。

そう思ったぼくは、洞窟を出て、先へ進むことにした。

→38

232

ぼくは冷静さを失ってはいなかった。

おそらくそれが命を救ったに違いない。それに、幸運なことに剣を持つ右手も自由だったのだ。

ヤツの口に飛び込む前に、ぼくは触手を切って脱出できた。転がるぼくを追って、２本目３本目の触手が追ってき

232

たが、それらをことごとく切り捨てリーバーに突っ込んだ。
「たあーっ!!」
怪物の間近で横殴り(よこなぐ)りに払った剣。その切っ先はヤツの皮膚(ひふ)をザックリと斬り裂いた。悲鳴(ひめい)が洞窟にこだました。リーバーはその傷口から体液をあふれ出し、ぐにゃりとつぶれてしまう。**(5ルピー得る)**
結局その洞窟には何もなかった。ぼくは仕方なく、洞窟を去った。　**→197**

233

海を離れ、歩き続ける。
さて、またきみに選んでもらおう。行き先はふたつある。
東と北。ぼくらはそのうちどちらかから来たはずだよね。
つまり残る一方を選べばいいわけだ。どちらへ行く？
●東へ　→50
●北へ　→181

234

夜まで待った。
日はすぐに地平線の向こうに消え、残光が暗い空を染めるばかりとなった。
ぼくはやおら立ち上がり、そして歩き出した。体力は依然(いぜん)おとろえたままだったが、それでも太陽の直射がなく、気温が低いだけ助かった。　**→95**

235

ぼくはバクダンを出し、大きくふりかぶってモーション。力いっぱい投げつけると、それはデオーの体にもろに当たって爆発した。炎と煙があたりに散った。我ながらみごとなコントロール。これじゃ、いかなデオーといえども生きちゃいられまい。**(バクダン1個失う)**
煙の中から、笑い声がしたのはその時だった。
「わはははは。ムダなことよ。あきらめてあの世へ行け」
デオーはゆっくりとこちらに歩いてきた。
どう戦う？
●（持っていれば）銀の矢　→271
●剣で戦う　→62
●逃げる　→112

236

剣をかざし、ヤツに襲(おそ)いかかった。とたんに、敵のハサミで足を払われた。地に倒れつつ、ぼくは反撃の手を考える。
この怪物・テスチタートには何が有効(ゆうこう)だろうか？　判断はきみにゆだねよう。ぼくを生かすも殺すも、きみの選択しだいだ。
●（持っていれば）バクダン1個　→191
●（持っていれば）銀の矢　→77
●剣で戦う　→175

237

ところでさっき声がした墓石だけど……。
ぼくはそれを思い出し、戻ってみた。石をどけた場所。そこにある穴から下をのぞく。
暗くてよく見えないが、どうする？　もし入ってまた怪物でもいたらえらいことだし……。
●穴に入ってみる　→320
●入らない　→107

238

とっさに逃げようとした。

う、体が動かない。そう、すでにぼくの体力は尽きていたのだ。どうにか体を起こし、岩陰へ身を隠そうとした。だが、しょせんそれはムダな努力にすぎなかったのだ。

ドサリと転倒したぼくの耳に、背後から迫る怪物の羽ばたきの音が聞こえた。時を同じくして、岩をも溶かす高熱の炎が、ぼくの全身を包みこんでいた。

END

239

ぼくはそのまま、意識を失った。

やがて気がついた時、神殿には誰もいなかった。ガランとした広い空間に、怪物の死骸があるのみ。

ちくしょう。デオーめ。ぼくをまんまとだましたのだ。

ヤツめ、今ごろ〈**死の谷の大神殿**〉のヒントを得て、部下と共に捜索に出ているに違いない。ぼくはなんてバカなんだ。

まだ痛む首をさすり、ぼくはゆっくりと立ち上がった。

そしてその建物を出た。まだ霧のただよう森を抜け、またあてどもない旅に出た。

→80

240

アルプは突然床の石畳を蹴り、飛んだ。ものすごい羽ばたきの音をたて、こっちへまっしぐらにやってくる。

ぼくは剣をかまえ、ヤツを突いた。が、何という硬い皮膚。

ぼくの剣ははじき返された。すぐに起き上がり、ヤツに向きなおった。アルプは旋回を終え、再び攻撃をしてくる。

★バトルポイント…リンクは♥＋J／アルプは７＋Bで戦います。結果は？

●勝った　→15

●負けた　→130

241

ぼくは地をはうようにして、逃げ出した。

何度もつまずき、そのたびにうめきながら、夢中で走った。ギーニは追ってこなかった。あまりのだらしなさに、あきれているのかもしれない。ちくしょう。覚えていろ。

(LIFEエネルギー♥マイナス１)　→322

242

ミラクルソード？　そんなもの、あるわけない。

どうすりゃいいんだ。

コウモリと化したデオー。ヤツは何の前ぶれもなく、突然飛翔した。ものすごい風を巻き起こし、こっちに滑空してくる。カッと開けた口から、また超音波が放たれた。

ぼくはシールドで防いだが……。**今持っているシールドは？**

●ファイアシールドかミラクルシールド　→94

●マジカルシールド　→176

243

引き返すことにした。

これ以上行けないと判断した。ぼくは早々に神殿から引き返し、新たなる目的に向かって旅を続けた。後ろ髪をひかれる思いだが仕方ない。

なあに、またいずれ来るさ。

●南へ　→100

●西へ　→60

244

これまで、何とか勝ち進んできたんだ。逃げる手はないさ。ふふふっ。

——なんていってるけど、数10匹のドドンゴ相手にどうやって戦えというの。ぼくに死ねっていうのか。

ええーい。もうやけだ。ぼくは剣をかまえ、ヤツらに向かって突進していった。

そして結果はいうまでもなかった。ドドンゴの強烈な体当たりをもろに食らったぼくは、瞬時にしてあの世行き。

死体はクルクルと回転しながら、お日様に向かって飛んでいったのさ。

END

245

ぼくは持てる道具をすべて使った。だが、剣はピクリとも動かない。何てことなのだ。ここまで来て、肝心のミラクルソードが得られないなんて！

ガクゼンとして、ぼくは剣の柄を見ている　→120

246

ここまで来てなんてことだ。ぼくはクリスタルを失ったままだったのだ。これでは神殿の中に入っても、得られるものはない。

仕方なく、立ち去った。まったく泣きたい気持ちだよ。ぼくは再び霧の森をさまよい、やがて外に出た。　→80

247

ぼくは歩きつづけた。

が、行けども行けどもそこは、はてしなく続く砂の海。

水はすでに尽き、ぼくは猛烈な喉の渇きに襲われていた。

247 行けども行けども砂の海　喉がかわく　このままでは命も尽きてしまうぞ——

247

その場に倒れては、また気づいて起き上がる。その繰り返しが何度も続いた。（LIFE エネルギー♥マイナス１）

このままでは、命も尽きてしまうぞ。

●その場で休み、体力の回復を待つ　→185

●とにかく歩き続ける　→59

248

わーい。あいにくと持っていないよ。

こりゃ、逃げるっきゃない。ヤツが何を言おうと意に介することはないさ。だが、逃げきれるほどの体力はあるか。

LIFE エネルギー♥はまだある？

●YES　→285

●NO　→273

249

ぼくは必死に体を動かそうとした。だが、敵の呪文の力は強く容易に動かない。あせっちゃダメだ。が、ギーニはもうそこへ来ている。

今、ぼくの LIFE エネルギー♥は？

●５以上　→34

●４以下　→324

250

ぼくは北へ北へと歩き続けた。

やがて、行く手に高い峰が見えてきた。その頂上は雪をかぶっている。また山越えか。うんざりしながら進んでいくと、峰と峰の間、深い谷があるのを見つけた。

どうやらそこを通って、向こうへ抜けられそうだ。

→84

251

峠の向こうに下る道を歩きつづける。

やがて、前方に再び平原が見えてきた。ぼくは、その平原を目指してなおも歩いていった。　**→168**

252

グリオークは天に向かって、大きく吠えた。

巨大な３つの頭をめぐらせ、ぼくを見る。また来る気だ。

★バトルポイント…リンクは♥＋１／グリオークは６＋Ａで戦います。結果は？

●勝った　→182

●負けた　→12

253

おっかなびっくりで、その建物に向かった。礼拝堂の上には天に向かってそびえる尖塔があった。それを見上げながら、ぼくは建物に入った。

無数のローソクがともり、礼拝堂は不思議な雰囲気に満たされている。そこに、ひとりの商人がいた。

「あのー」ぼくは声をかけた。すると——

「待て」商人は片手を上げ、ぼくのセリフを止めた。

「おまえが誰か、わしにはちゃんとわかる。おまえは——」

商人はじっと考え、そして言った。「——おまえは、サカナ屋だ。わしの所に魚を売りつけにきた。そうじゃろう？」

「だあーっ！　もういいかげんにしてくれ。ぼくはこの手のくだらん冗談にはあきたんだ。あんた商人だろ、だったら何か売ってくれよ」

するとその商人、ほうという顔をした。「うむ。たしかにサカナ屋には見えぬ。では、おまえは何者じゃ」

253

「えへん」ぼくは言った。「ぼくの名はリンク。これでも、ちょっとした有名人」ぼくは胸をはった。
「リンク……？　全然知らん」
　ぼくはこけそうになった。なんだか、張り合いがないなあ。もう少しは有名人だと思ったんだけどなあ。
「とにかく、ぼくはあんたから何かを買いたい。メニューを見せてくれよ」
　すると商人は、敷き物の上にいくつかの物を並べた。

品名	値段
バクダン（５個）	50ルピー
ローソク	40ルピー
マジカルロッド	60ルピー
マジカルキー	60ルピー
銀の矢	100ルピー

（どれかを買うならチェックシートに記入して、値段分のルピーをマイナスします）
「ただし――」商人はこう言った。「100ルピー以上の買い物をすれば、おまけに“命の水”をつけてやろう。これは、いついかなる時でも、飲めばLIFEエネルギー♥が持っている器の分だけ、満杯になるというものじゃ」
（100ルピー以上の買い物をした場合、命の水を得る。その使用方法は上の説明の通り。ただし、１回しか使えません）
「まったく、商売上手なんだから」
　ぼくはうれしいやら、ハラがたつやら分からないまま、その教会を出た。　→173

254

　うまい具合にヤツの死角を突いた。
　重力に身をまかせ、怪物の上に剣とともに落下。背中を思いきり貫いた。
　テスチタートは悲鳴を上げ、ハサミでぼくをつかもうとした。が、背中まで届かない。ただ、いたずらにもがくばかり。
　やがて、ヤツは息絶えた。ぐったりとし、動かなくなったその死骸から離れる。**（10ルピー得る）**
　ぼくはその場を去り、霧の中を歩きだした。　→276

255

　たいへんだ。そろっていない！
　私は愕然としてリンクと顔を見合わせた。
　最初は驚いていたリンク。だけど、その顔にゆっくりと笑みが戻ってきた。
「いいさ、ゼルダ」と、彼は言った。「デオーは死んだ。もはやトライフォースをねらうものはいない。いずれまた、ここに来るさ」
「そうね。今度はふたりで来ましょう」
　私たちは微笑みあい、その“勇気”のトライフォースのある部屋を後にした。
　神殿の外に出ると、陽光がやけにまぶしかった。

HAPPY END エピローグへ

256

　ぼくはバクダンをモルドアームに投げつけた。火柱が立ち、雪煙が舞い上がった。
　再び静けさが戻った時、ぼくはそこにバラバラになった怪物の死骸を見た。妙にあっけないな。

256

と、その時だ。ぼくの背後で、おかしな音がした。振り返ったとたん、驚くべき光景が目に入った。岩壁の上、降り積もった雪の表面に亀裂が入った。それは見る見るうちに雪煙を巻き上げつつ、崩壊を始めたのだ。

雪崩だ!! 逃げようとしたところへ、それは襲いかかってきた。ぶ厚い雪のジュウタンの流れに巻きこまれ、ぼくはきりきり舞いをした。口にも鼻にも雪が入ってくる……。

意識を取り戻したのは、雪の上。どうやら奇跡的に助かったらしい。怪物をやっつけたとはいえ、とんだとばっちりだ。

（LIFE エネルギー♥マイナス１・15ルピー得る）

ぼくはまた歩きだした。 **→349**

257

ところが、ここまで来て逃げるわけにはいかないのだ。

ぼくは剣をかざし、怪物アルゴンにかかっていった。

「てや――――――」と、ちょうどその時怪物がこっち を向いた。「や――――――、ん!?」

ぼくは剣を持ったまま、立ち止まった。足が動かない。いや、足だけじゃない。体全体が……だんだんと石になって……

END

258

その時、背後から声がした。

「どうした、やはりおまえには無理なのではないか。これが最後のチャンスだ。おれと組むか？ それとも死ぬか」

喜色満面といった、デオーの声。ちくしょう、どうすればいい？ 死を覚悟して、もう一度ルガルーに立ち向かうか、それとも屈辱を覚悟でヤツの申し出を受け入れるか。

●ひとりで戦う →275

●デオーと組む →228

259

ぼくは剣をかまえ、前方の黒騎士めがけ、かかっていった。

「待て！」黒騎士は叫んだ。

ぼくはかまわず、かかっていった。剣と剣がぶつかりあい、火花を散らす。その間、背後ではスタルフォスがじりじりと迫りつつあった。

ぼくは黒騎士と剣を交えたまま睨み合った。妙だ。こいつ、本気で戦っていない。よく考えて判断してくれ。

●なおも黒騎士と戦う →335

●スタルフォスと戦う →63

260

ぼくが持っているこの剣で、はたしてヤツに勝てるだろうか？ 不安が脳裏をかすめるが、心配するヒマもない。ガーゴイルは突如翼を広げ、飛んだ。風を裂き、こっちへ向かってまっしぐらに飛んでくる。さあ、ここが勝負どころだ。

今のぼくのLIFE エネルギー♥は？

● 3以上 →11

● 2以下 →102

261

「おばあさん、おばあさん」ぼくは声をかけた。「この森について聞きたいんですけど」

すると老婆は顔を上げる。「ここは常人の来るところではない。早々に立ち去ったほうがよいぞ」

261

「それはわかっているのです。しかしぼくは行かねばならぬのです」

「森の奥の神殿に行くと言うのか」

「神殿が、あるのですか？」

老婆はうなずいた。「じゃが、あそこへ立ち入って、出てきた者はおらぬぞ。恐ろしい化物がおるそうじゃ。いいや、こうして話しておるうちにも、化物がこっそりと忍び寄っておるかもしれぬ。ほおーれ、そこにィ」

「ギャッ!!」ぼくは思わず悲鳴を上げ、振り返った。

ガサリ。葉群れを揺らし、テナガアカマントヒヒが逃げて行った。何だ、ただの動物じゃないか。

「おばあさん。悪質な冗談はやめてください」

「意外と気が弱いの。それでも勇者リンクか」

「何だ、知ってたんですか」

「おまえにいいものをやろうと思っての」そう言うと、老婆は命の器を差し出した。

「えっ？　これ、もらっちゃったりなんかしていいんですか？」

「いらんのか？」

「いります、いります」ぼくは命の器をもらった。（**命の器を得る。持てるハートの数が２個増えます**）そして、老婆に礼を言い、別れを告げて歩きだした。　**→214**

262

どう立ち向かおうかと迷っているうち、ヤツの次の攻撃が来た。ウィズローブは音もなく飛翔した。上空から呪文をかけてくる気か。

★バトルポイント…リンクは♥＋A／ウィズローブは５＋Hで戦います。結果は？

●勝った　→153

●負けた　→65

263

ぼくははっとした。

目の前に山が見える。それも何と頂上に白い雪をかぶった高い連峰だ。

あそこまで行けば、この灼熱の地獄から解放されるのだ。

ぼくはやる気持ちを抑さえ、砂漠を歩きだした。　**→40**

264

ぼくはドドンゴのいない方向に向かって、必死に逃げた。

背後から聞こえるのは、落雷の音に似た、怪物どもの足音。後ろを振り返る余裕もない。ぼくはつまずいて倒れないよう、無我無中で走り続けた。やがて、ぼくは地面に倒れ込んだ。

思わず振り返った。が、そこにはもう、ドドンゴの姿はなかった。地平線が視界を占め、原野を吹き渡る風の音ばかり。

（LIFEエネルギー♥マイナス１）　→103

265

見れば、海面をゾーラの群れがぞろぞろとこっちへやってくる。

意を決し、ぼくは向きなおった。剣をかまえる。

★バトルポイント…リンクは♥＋G／ゾーラは３＋Fで戦います。結果は？

●勝った　→311

●負けた　→25

266

イカダで海を渡ることにした。

そのほうが湾をぐるりとまわりこむよりも早い、と判断したのだ。波は荒く、イカダも容易に走ってくれなかった。

しかも海には恐ろしい敵がいた。行く手の海面に浮かび上がった無数の影。それは半魚人ゾーラだ。

LIFE エネルギー♥は満杯？

●YES　→56

●NO　→118

267

デオーは飛翔した。風のように滑空し、こっちに向かってくる。ぼくはミラクルソードをかまえ、ヤツの接近を待つ。

今、ぼくの LIFE エネルギー♥は？

●10以上　→143

● 9 以下　→156

268

ぼくは剣をかまえ、ギーニにかかっていった。

突然の攻撃に驚いたためだろう。ギーニはぼくの剣を受け、なすすべもなく、地に倒れた。まっぷたつになったその体から、緑の体液が流れ出す。**（LIFE エネルギー♥プラス1・20ルピー得る。またクリスタルを失っている場合はそのうちの１本が戻ります）　→237**

269

こんなワケわかんない怪物と正攻法で戦うなんて、まさに愚の骨頂。ぼくは雪の上であがきつつ、必死に逃げ出した。

（LIFE エネルギー♥マイナス１）

LIFE エネルギー♥はまだある？

269

●YES　→131

●NO　→340

270

荒野をひたすら旅し続けた。

さて、どこへ行こう。もちろん、おそらくどの方角に向かっても、危難が待ち受けているにちがいない。が、あえてそれに従って行かねば、旅の終わりは来ないのだ。

選択はきみにお願いしよう。旅の方角を決めてくれ。

●西　→30

●東　→110

●南　→70

271

銀の矢。この強力な武器を弓につがえ、思いきり引き絞った。デオーは腰に手を当て、ムフフと笑っている。何たる自信。だが、そのバカ笑いもこれまでだっ!!

ひょうと矢を射た。それはまっすぐデオーの額に……（？）

いきなり矢は、何かにはじかれたように、あさっての方向に飛んだ。

ぼくはあ然として、矢の消えた虚空を見すえた。あの、魔王ガノンをも倒した銀の矢が……！　**（銀の矢を失う）**

「むふふ。そんな子供だましの武器で、このわしが倒せると思うのか。噂にきく勇者も、たいしたことはないな」

ちくしょう。あったまにくるウ。次はどうするか。

●（持っていれば）バクダン１個　→235

●剣で戦う　→62

●逃げる　→112

272

銀の矢を弓につがえ、力いっぱい引き絞った。

ルガルーはこの武器を見て、さすがにあせったのだろう。ぼくに向かってまっしぐらに走ってくる。立っている時は2本足だったのが、走る時はよつんばいになる。ものすごいスピードだ。

だが、ぼくは落ち着いて敵の眉間（みけん）をねらった。息を止め、矢を射る。それはねらいたがわず、急所（きゅうしょ）に突きささった。その瞬間（しゅんかん）、怪物はもんどり打ってひっくり返った。

床の上でじたばたとあえぎ、やがて動かなくなる。さすがに銀の矢だけのことはある。**（LIFEエネルギー♥プラス2・30ルピー得る、銀の矢を失う）**

さあ、どうした、とばかりに背後のデオーを振り返る。だがヤツの姿はいつの間にか消えている。ははあ、さてはぼくがあっさりと敵を倒したので、おそれいったというわけか。

ぼくはかまわず、神殿の奥目指（めざ）して歩きだした。　→9

273

とっさに逃げようとした。が、かなわなかった。

そのぼくの背に向かい、デオーの必殺技（ひっさつわざ）が放たれたのだ。

一瞬にして、あたりの空気が津波（つなみ）と化した。耳には聞こえない超音波（ちょうおんぱ）が、石畳（いしだたみ）と石塀（いしべい）と、そしてぼくをこなごなに砕（くだ）いてしまった。後には何も残らなかった。

END

274

その家を離れ、またしばらく歩いた。

町の真ん中に大きな広場がある。そのそばに、教会が立っていた。

おや。この建物には明かりがついているぞ。人が住んでいるのかな。それとも――!?

さあ、よく考え、入るかどうかを決めよう。

●教会に入る　→253

●入らない　→173

275

冗談（じょうだん）を言え。ぼくは勇者リンクだぞ。これまで幾千（いくせん）もの怪物と戦い、ことごとく打ち倒してきた剣士なのだ。こんな屈辱的（くつじょくてき）な申し出なんか、くそくらえだ。

もう一度ルガルーに向きなおった。「さあ来い化物」

狼男はながく尾を引く声を上げ、走ってきた。その突進をシールドで受けようとした。が、かなわなかった。ヤツはぼくの予想を裏切り、床すれすれに来たのだった。

そのことに気づいた時、すでにぼくの運命は決まっていた。ルガルーはシールドを越えるやいなや、ぼくの胸の上めがけ、飛び上がった。その瞬間（しゅんかん）、ぼくの頭と体はセパレート!!

END

276

しばらく行くと、ふいに森がとぎれた。外へ出たのか？

いや、そうじゃない。森の中にポッカリと大きな空間があるのだ。その中央、霧が激しく渦巻（うずま）く中、巨大な建物の影がある。こちらにのしかかってくるかのように、そびえている。

神殿だ！　ぼくはそこに駆け寄った。

クリスタルは3本そろっている？

●そろっている　→178

●そろっていない　→246

277

ブーメランをかまえ、それを投げた。最初あさっての方向に向かい飛んだそれは、すぐに軌道を修正し、橋のロープを切った。橋が奇怪なうめき声を上げて降りてくる。

ブーメランがぼくの手に戻った時、橋はぼくのすぐ前に落下した。ものすごい音。そして土煙。向こう岸に渡る道ができた。ぼくは下から吹きあげる風の中、橋を渡りだした。

やがて神殿の前へ……。 →123

278

ぼくは今持っているバクダンをすべて投げた。が、うろたえたためか、１匹も倒せない。（**バクダン全部失う**）逃げるヒマはなかった。怒とうのごとく襲ってくる無数のドドンゴ。

★バトルポイント…リンクは♥＋Ｊ／ドドンゴは７＋Ａで戦います。結果は？

●勝った →126

●負けた →154

279

その場でひと休みすることにした。

だが、いかんせん喉の渇きはいっこうにおさまらない。砂地にしゃがみこんだ。が、疲労は増すばかりだ。方向ももはやわからない。蜃気楼も消えてしまっている。このままでは、ここでのたれ死にだぞ。（**LIFE エネルギー♥マイナス１**）

●ひたすら歩く →104

●夜まで待つ →234

280

ぼくは足をずらしつつ、少しずつ降りようとした。

そこへ、一直線に突っ込んできた怪物。その猛攻に必死に

280 バイアの猛攻に、ぼくは必死に防戦する。だが、ヤツは執拗に仕掛けてくる

280

防戦した。バイアは激しく翼を打ちふるいながら、小刻みに攻撃をしかけてくる。

思いきり突いたとたん、怪物は剣をくわえ、ほうり出した。

あ然とするぼくに向かって、バイアは最後の攻撃をくわえてきた。鮮血を飛ばし、ぼくはゆっくりと落下していったのだった。

END

281

よし。こいつにトドメをさすのは今だ。

ぼくは剣を抜こうとした。その瞬間にスキができた。デオーが体を揺すった。そのため、ぼくはヤツの体から振り落とされそうになった。

「うあっ」

のけぞったとたん、ぼくはものすごい風圧を受けた。そして次の瞬間、ぼくの体は空中に投げ出されていた。

このまま地面に落ち、墜落死か。いや、そうじゃなかった。旋回し、戻ってきたデオーが、ぼくにトドメを刺したのだ。

ぼくの体はヤツの超音波で、微塵と化していた。

END

282

その脇道に入った。

なぜって？　いやな予感がしたからさ。

ぼくの予感ってのは、大抵当たっているんだ。でないと、この闇の世界、とても生きては行けないってわけ。

切りたった崖にはさまれた狭い道。そこをぼくは歩いていく。すると、先に岩穴が見えてきた。

怪物がいたら大変だけど、それでも入る？

●入る　→114

●入らない　→29

283

ぼくは怪物と戦うことにした。

雪の上に立ちどまり、背後から迫るモルドアームに向きなおった。すぐそばは崖。それは遙か上まで続いている。その上方は雪山の背だ。

では、今持っている武器を選んでくれ。

●（持っていれば）銀の矢　→31

●（持っていれば）バクダン１個　→256

●剣で戦う　→122

284

リーバーは触手を伸ばしてきた。とっさにかわそうとしたが、一瞬遅かった。ヌルヌルとしたいやな感触が、ぼくの胴にからみつく。

そのとたん、怪物は裂け目のような口を開いた。したたる粘液が岩の床で煙を上げる。あの口に飛び込んだら、ひとたまりもないぞ。

★バトルポイント…リンクは♥＋Ｂ／リーバーは５＋Ｅで戦います結果は？

●勝った　→232

●負けた　→74

285

ぼくは逃げ出した。

ヤツに追いつかれないよう、死にものぐるいで走った。

285

「だはははははは」背中に浴びせられた、デオーの笑い。

うぐぐ。この屈辱感。今に見ていろ。必ず帰ってきて仕返しをしてやるからな。

（LIFEエネルギー♥マイナス１）

このお礼はいずれ返すとして、とりあえずどっちへ行く？

強力な武器をなるべく得たほうがいい。そのため、方角をよく選び、進んでいこう。

●北へ　→250

●南へ　→90

●西へ　→70

286

よくみればバクダンの数が足りない。これでは、たとえ何匹か倒しても逆襲を食らってしまうじゃないか。だが、考えているヒマはない。ドドンゴは突進を始めている。

●あるだけのバクダンを使う　→278

●剣で戦う　→301

287

ところが、逃げようとしても、今のぼくにそんな体力は残っていなかった。立ち上がりかけたとたん、再び沼の泥につっぷしてしまう。そう。黒騎士がどんなに心強い味方でも、肝心のぼくがこのざまじゃ、どうしようもない。

何とか顔を上げようとすると、泥水の中から、またも白骨が——

その妖怪の骨に、はがいじめにされ、ぼくはなすすべもなく、沼にひきこまれたのだった。

END

288

丘に登らず、ぼくは外をまわりこむことにした。

細い道を行くと、左手は切りたつ崖となった。その岩壁にそって行くと、前方に人影がある。黒いマントを羽織った男。

黒騎士だ。彼はぼくを見、来いとばかりに手を振っている。どうしよう。黒騎士について行くべきか、それとも……。

ぼくは迷った。**この決定はきみにまかせよう。どうする？**

●ついて行く　→202

●ついて行かない　→21

289

峠の向こうがわに降りていくと、崖の下に開いた岩穴を見つけた。あの中に何かがある。

入ってみる？　それとも気にせず先に行く？

●岩穴に入る　→66

●入らない　→251

290

ぼくは、また歩きだした。

さてこれから行く方向を決めなければ。きみにまたきこう。**どの方向に行く？**

●北へ　→40

●東へ　→80

●西へ　→20

291

こんな連中、相手にしてちゃ、命がいくつあっても足りるものじゃない。ぼくはとっさに、逃げ出した。

だが、疲れきっていたぼくは、思うように走れない。フラフラと左右に揺れ、何度も倒れそうになる。背後に聞こえる

291

ドドンゴの足音はどんどんと大きくなっていく。ダメかっ。

と、その時だ。ぼくの前に巻き起こった黒い竜巻。

それがさっとやんだと思うと、ひとりの男が立っていた。

黒いマントに黒い衣装。黒騎士だ。彼はその手に１本の笛を持っている。

ぼくを見つめ、早くこっちへ来いと合図をしているようだ。

ぼくは黒騎士に駆け寄った。そのマントでぼくを包み込む。そして、笛を吹いた。

それが魔法の笛だと気づいたのは、その時だ。美しい音色とともに、ぼくらのまわりを風が取り囲んだ。

再び巻き起こった黒い竜巻。それは、ぼくらといっしょに空に舞った。

怒りの声を上げ、見上げるドドンゴの群れ。それを眼下に見下ろしながら、ぼくは意識を失っていった。

次に気づいたのは、ある小さな泉のほとり。

あたりを見まわせど、あの黒騎士の姿はない。そこには花が咲き、チョウなどの虫たちが飛びまわっている。そこは妖精の泉だった。

ほとりにすわって見ていると、水面に波がたった。小さな妖精が飛び出したのだ。赤い服に透明な羽。その愛らしいチビッコは手にしたスティックを振った。すると、ぼくの体にみるみる力が湧き起こってきた。

妖精の魔法の力だった。**（LIFEエネルギー♥が、今持っている器の分だけ満杯になります）**

ぼくはこの小さな恩人に礼を言い、泉を去った。

でも本当の恩人は、あの黒騎士なんだけどね。　→103

291 うわっ、ドドンゴの群れだ！　これじゃあ、命がいくつあっても足りないよ

292

体力の点で、いまいち危ない。

しっかり判断しないと、死んじゃうぞ。

●アルプと戦う　→67

●早々に去る　→130

293

人影に向かい、歩いていった。

黒い衣装の男は、ぼくを見、不敵な笑いを浮かべている。

切れ長の目が、凶悪げに光っている。

「よく来たな、リンク」

ぼくはハッとした。こいつは――!!

魔獣デオーだ。こいつはヤバイ。ぼくはとっさに後ろを向きなおり逃げようとした。そこに、さっきの怪物がいた。しかも、２匹。ライネルとテクタイトだ。

デオーと２匹の怪物にはさまれ、ぼくはもはや逃れることはできなかった。

じりじりと迫ってくるヤツらの姿を、ぼくはかわるがわる、茫然と眺めていた。

END

294

必死に崖をよじ登ろうとするが、手足がしびれ、体がちっとも動かない。ちくしょう、もう少し体力があれば。

その時グリオークが飛んだ。また攻撃してくるつもりだ。

今、ぼくはファイアシールドかミラクルシールドを持っている？

●持っている　→78

●持っていない　→54

295

この深い草むらの中なら、ドドンゴの２匹くらい相手にできるだろう。イチかバチかだ。ぼくは待った。

前方の草むらから、２匹の足音が猛烈に響く。さあ、来い。

すると――。

ガサリ！　背後で草が揺れる音。いやな予感に、ぼくは思わず振り返った。そこに、またもや１匹のドドンゴ。

うわーい。都合３匹だっ。しかも完全なハサミ打ち！

→41

296

とっさに逃げようとした。

ところが、ぼくに巻きついているヤツが、どうしても離れようとしない。必死に体を曲げ、剣を振った。二度三度と斬りつけるたびに、飛び散る青い血が顔にかかる。

★バトルポイント…リンクは♥＋F／オクタロックは４＋Dで戦います。結果は？

●勝った　→98

●負けた　→199

297

すぐ目の前に迫っていたドドンゴ。この怪物どもは、投げつけたバクダンでふっとんだ。が、その衝撃はあまりにも強すぎた。

爆風はぼくをも襲い、このちっぽけな体を木の葉のように宙に舞い上げた。

そして、大地にたたきつけられるころには、ぼくの命はすでに燃え尽きていた。

END

298

ぼくは走った。もちろん全力疾走だ。

ブーメランがヤツをかく乱する間しか、チャンスはない。

柱と柱の間を抜け、ひた走った。

そして――。

ぼくは壁際でジャンプした。右手を思いきり伸ばし、そこにあるシールドを―――――取った!!

うわっと。怪物が振り向く寸前に、ぼくはまた柱に隠れた。

(ミラクルシールド得る) そこにブーメランが戻ってきた。

さあ、いつでも来い。　**→39**

299

これは戦うどころじゃない。逃げるにかぎるな。

そういうわけで、ぼくはスキをついて逃げにかかった。だが、現実はそうあまくない。

ドドンゴ１匹いたら、20匹はいると思え――じゃないけれど、ぼくはまた、新手に遭遇してしまったのだ。

ぼくの逃げる先に、さらに３匹のドドンゴがいたのだ。

うわーっ!!　ホントに冗談じゃすまなくなってきた。合わせて６匹の怪物。ぼくはどうすればいいんだ。ヤツらはグルリとぼくを取り囲んだ。鼻息荒く、こちらに迫ってくる。

→85

300

素晴らしい速さで、雲が流れていく。

デオーはぼくを乗せたまま、風を切っている。いくつもの山や谷を、あっという間に越えた。まったく早いものだ。最初からこうすりゃよかったんだ。なんちゃってね。

だが、いっときの油断もならない。デオーめ、何をたくらんでいるかわからないのだ。いきなり宙返りでもされた日にゃ、命がいくつあっても足りないよ。

やがて前方に巨大な峰が見えてきた。そこを越えると――

あった！　あれが**〈大神殿〉**だ。クレバスのように切りたった崖。その下にある大きな石の建物。

ぼくはその景観に思わず目を奪われた。神殿は絶壁の中腹にあった。そこへ行くには、木でできたはね橋を渡るしかない。が、その橋は今、天に向かっていて、対岸にはかかっていない。

だが、心配はない。ぼくは今、空を飛んでいるのだ。

「デオー、あの神殿の門の前に降りろ」ぼくはそう命じた。

「へえへえ、承知しやした」

デオーは崖の上から上昇気流を利用して降りていく。

神殿の前に着くと、ぼくはデオーから離れた。

「ごくろうさま」そう言った時、

「グルル……」突然デオーが唸る。

いっけね。油断したぜ。とっさに剣をかまえた。その瞬間、デオーは襲いかかってきた。いきなり何だこいつ！

- **無視してすぐ神殿に駆け込む　→6**
- **デオーと戦う　→52**

301

まっしぐらに突っ込んでくる怪物ども。ぼくはその正面に立ち、剣をかまえた。ドドンゴの群れの先頭――その１匹めがけ、ぼくはかかっていった。

その１匹は、ぼくに向かって威嚇の唸りを上げた。カッと開いた巨大な口。そこに向け、剣を突き出す。たしかな手応

301

えがし、血しぶきが散る。

だが、とっさに抜こうとした剣は、その怪物から容易に離れない。ぼくはそのため、怪物とともに大地に倒れた。

そこへ怪物どもは殺到した。ぼくはひとたまりもなかった。

END

302

ぼくはテクタイトに剣を向け、かかっていった。ここで逃げては、男子の本懐にかかわる。なんてことは考えなかったけど、行きも帰りも怪物じゃかなわない。どっちかをやっつけざるを得ない、ということになってしまったのだ。

「てやーっ!!」

ぼくは飛びかかった。テクタイトはさっと身がまえた。ヤツはこっちの姿を見失ってあきらかにうろたえている。

そこをついて、攻撃した。真上から剣をかまえ、急降下。鈍い音。手応えとともに、クモの目を刺し貫く。(**LIFE エネルギー♥プラス１・10ルピー得る**)

怪物の死骸に背を向け、ぼくはまた歩きだした。さっき、ライネルに会った場所にきた。この勢いでヤツもやっつけてやる。

ところが、ライネルの姿は見当たらない。さては逃げたな。なんて思っているうち、ぼくは坂道の向こう側に……。

→289

303

モルドアームの体にささった剣を思いっきりひっこ抜き、雪の中に飛び込んだ。

怪物はそのまま身をくねらせつつ、雪原の彼方に消えてい

303 これは、伝説の秘宝、ミラクルミラーだ！ ぼくはそれを拾い上げた

303

った。ぼくはすぐに引き返し、さっきの場所に行った。

あった。雪の中にキラリと光るもの。手に取って拾い上げた。おお、これは――伝説の秘宝、ミラクルミラーだ！

（ミラクルミラー得る） だが、喜んだのもつかの間。突如ぼくの立っている場所が、山のように盛り上がった。雪の塊といっしょに、ぼくは宙にほうり投げられた。モルドアームのヤツ、いつの間にかぼくの真下に来ていやがったのだ。

★バトルポイント…リンクは♥＋C／モルドアームは６＋Dで戦います。結果は？

●勝った　→136

●負けた　→42

304

力をふりしぼり、何とか立ち上がった。だが、とてもまともな状態では歩けそうにない。

めまいがし、視界がぼやけてくる。方向感覚など、とっくの昔になくなっている。したがって、今ぼくはどっちに向かって歩いているのか、さっぱりわからないってわけだ。

それでも東と思われる方角に必死で歩いて行く。　**→247**

305

ぼくはミラクルソードをかまえ、怪物を待ち受けた。

矢のように突き進んでくるガーゴイル。それをシールドで受けとめる。が、ぼくはすごい勢いで後方にふっとばされた。

石壁に激しくたたきつけられ、床に転がる。気が遠くなりそうだ。**（LIFEエネルギー♥マイナス１）** かろうじて立ち上がる。が、情け容赦なく怪物は襲いかかってきた。

★バトルポイント…リンクは♥＋J／ガーゴイルは７＋Bで戦います。結果は？

●勝った　→86

●負けた　→102

306

ぼくはヤツを迎え撃つべく身がまえた。さあ、また決断だ。

使う武器は何にする？

●（持っていれば）マジカルロッド　→45

●剣を使う　→139

307

逃げようとした。が、ぼくはあまりに疲れすぎていた。

たちまち妖怪に追いつかれ、背中にカギツメを突き立てられた。地面に引き倒され、ぼくはうめく。あがいて起きようとした。そこにギーニの牙が迫った。ぼくの血を吸おうと、喉元に――。もはや逃れるすべはなかった。

END

308

洞窟のある所まで、岩肌をけずって作った道がある。そこを登った。穴の奥から、ひんやりとした空気が流れてくる。

中に入っていくと、そこにたいまつがともっている。その淡い光の向こうにヒゲづらの商人がいた。

「おう、若いの。何かここで買っていけや。ローソクをおまけにサービスするぜ」

見れば、床に置いた敷き布の上に様々な商品が並んでいる。

商品	値段
バクダン（５個）	**40ルピー**
マジカルブーメラン	**30ルピー**

308

マジカルロッド	30ルピー
バイブル	60ルピー
銀の矢	100ルピー

（どれかを買うならチェックリストに記入して値段分のルピーをマイナスします。買い物すると、ローソク１本得る）

さて、ひきあげるとするか。すると——

「あんたリンクだろ？　うわさにきくところによれば、東のほうにある風の峠ってところに、ミラクルソードという神秘の剣があるそうだぜ」

商人の言葉を聞いて、ぼくはうなずいた。

「ありがとう」礼を言って、ぼくは洞窟を出た。　→196

309

私は〈OCT〉と打った。すると——

像はグルリと後ろを向く。そして床を割って沈みだした。

「ダメだっ」リンクが叫んだ。とたんに、その像はパッと強烈な光を放った。

それは毒々しい赤色の光だった。私もリンクも一瞬にして蒸発し、この世から消え去った。そしてその光は神殿の石壁をも突き抜け、ハイラル全土、そのまわりの地方すらも焼き尽くしてしまったのだ。

UNHAPPY END

310

ぼくは黒騎士のいる場所に背を向け、違う方向に歩きだした。陰うつな沼地を、のろのろと歩く。足元のぬかるみは次第に深くなり、足はようとして進まない。

枯木に手をかけ、ため息をつく。ふいに顔を上げると、岩山がある。見れば、その中腹に洞窟があるじゃないか。

ぼくは元気づいて歩きだし、洞窟に向かった。

そこに入ると、たいまつの明かりがぼくを迎えてくれた。敷き物の上にすわっているのは商人だ。

「はや〜、あんたあ、お客さんかのお？」と彼は言った。

「そ、そうですが……」

「ひ、ひさしぶりじゃあ。わしゃあ、あんたの来るのを10年も待っておったんじゃあ」

そう言うなり、商人はホロホロと涙を流した。

「わ、わかった、わかったから、なにか売ってくれよ」

すると彼は、はっと気づいた。「おお、そうじゃった。そうじゃった」敷き物の上に商品が並ぶ。

バクダン（５個）	30ルピー
マジカルキー	70ルピー
ローソク	30ルピー
マジカルロッド	40ルピー
バイブル	80ルピー
銀の矢	110ルピー

（どれかを買うならチェックシートに記入して、値段分のルピーをマイナスします）

「あんたあ、ひょっとして、リンクさまかね」

「そうだけど？」

「おお、わしゃあんたにぜひ伝えたいことがあるんじゃ。こ

310

の沼地の南に神殿がある。そこへ行きなされ」
「ありがとう」ぼくはお礼を言った。
「ところでわしゃあ、あんたの大ファンなんじゃが、ひとつサインをもらえんかな」「失礼、忙しいので……」
ぼくはボーゼンとする商人を残し、岩穴を出た。
さて、東へ行けば、この陰気な沼地をすぐに抜けられるが、さっき教えられたように南へ行くと、しばらくは沼が続く。
さあ、決断してくれ。

- **南へ　→174**
- **東へ行き、早々に去る　→290**

311

飛んでくる敵のビームをシールドでよける。
そして、イカダにはい上がろうとするゾーラをかたっぱしから斬り捨てた。長い時間にわたって激闘が続いた。やがて、怪物どもは退却を始めた。１匹ずつ波間に没し去ってゆく。後に残されたのは、無数の半魚人の死骸。**（５ルピー得る）**
ため息をつき、ぼくは再びイカダをこぎだした。　**→117**

312

ぼくはブーメランを投げた。
それは鋭い曲線を描き、怪物をかすめた。
アルゴンは怒りの唸り声を上げ、ブーメランに視線を追わせた。今だ。ぼくはダッシュした。　**→298**

313

その場で身がまえた。
サヤから剣を抜き、縦真一文字にかまえる。
さあ、来い。ぼくは怪物を待ち受けた。と、いきなり草む

313 サヤから剣を抜き身がまえた　と、草むらからもう一匹のトトンゴが

313

らが揺れ、もう1匹のドドンゴが現れた。うはあーっ。2匹となれば、話は別だ。ぼくはあわてて近くの草むらに飛び込んだ。　→295

314

バイブルがあった。

ふう、もう少しで忘れるところだった。ぼくはバイブルを取り出し、それを天にかざした。とたんに、赤い光がぼくをつつみ込む。

その光がさっと剣に飛んだ。そしてすぐに消えた。これで——いいのだろうか。

ぼくは剣に手をかけ、引いた。次の瞬間、その剣はぼくの手にあった。この喜び。ぼくは、ついに最強の剣・ミラクルソードを得たのだ。**（ミラクルソード得る。ここで、レベルが上がって命の器が5個増えます）**　→120

315

ヤツは翼を広げた。威嚇のつもりか。

飛びかかろうとしたとたん、その子供のグリオークは火を吐き出した。身を投げ出して、それをかわした。起き上がると体勢をととのえ直す。そして、走った。

「やあーっ！」

かけ声と同時に、ぼくは地を蹴った。体を反転させつつ天井の岩をもう一度蹴る。敵はぼくを見失った。そのチャンスをぼくは逃さない。

急降下に移り、剣を突き出した。それはヤツの背中のウロコを貫き心臓に達した。

大きく悲鳴を上げ、子供のグリオークはどうと倒れた。どうだ、こんな超アクロバット攻撃はめったに見られるものじゃないぜ。**（20ルピー得る）**

さて、そこでぼくはビッグプレゼントを見つけた。岩に突きささっていた1本の剣。柄を握りしめて力いっぱいひっこ抜く。そして、見れば——何と魔法の剣・ファイアソードじゃないか。**（ファイアソード得る。ここで、レベルが上がって命の器が5個増えます。LIFEエネルギー♥プラス1）**

強力な武器を見つけ、ぼくは大喜び。さっそくそれをサヤに差し込んだ。——と、あまりぐずぐずしていられないんだっけ。そう、親グリオークが迫ってくるのだ。

子供を殺されて烈火のごとく怒り狂っている。　→19

316

ローソクはあいにくとない。

それでも入っていく？　よろしい、きみのその勇気にめんじて中に行こうじゃないか。

というわけで、ぼくはその岩穴に入って行った。手さぐりで進んでいくと、岩の床を何かがはいずりまわっている音。

目をこらして見た。長いものが、無数にうごめいている。蛇だ！　ロープという魔物の一種。ぼくは思わず、後退った。だめだ。ここはこれ以上一歩も進めない。ぼくはその岩穴を出た。**（LIFEエネルギー♥マイナス1）**　→29

317

あきらめるのは早い。ぼくは今、ファイアシールドという、強力な武器を持っているのだ。ヤツが二度目に呪文を放った時、ぼくはとっさにシールドでそれをはねかえした。

魔物がひるんだスキに、剣をかざして突進した。

317

「やあーっ!!」

縦真一文字に敵を叩き斬った。ウィズローブはまっぷたつになって、地に崩れ落ちる。**(LIFEエネルギー♥プラス2・15ルピー得る。またクリスタルを失っている場合は、そのうち1本が戻ります)**

剣をサヤに収め、ぼくは神殿に向かった。　→184

318

ドドンゴのいない方向に逃げた。

背後を振り返らないように無我夢中で走るが、背後に聞こえる落雷のごとき足音は、だんだんとぼくに迫ってくる。

ヤツらは徐々にぼくに追いついている。思わず後ろを見る。

「ギャッ!!」

口をついて、悲鳴が飛び出した。ぼくのすぐ後ろに、大地いっぱいに広がり走っている無数のドドンゴ。いつの間にかこんなに増えていたのだ。

そのとたん、ぼくは小石につまずき、地面に倒れた。立ち上がる間もない。重量感あふれる無数の巨大な足。それが、ぼくをメチャクチャに踏みにじった。もちろん、生きていられるはずはなかった。

END

319

近くの大きな石柱に隠れた。

そっと陰から鏡を突き出して見る。アルゴンは壁ぞいに歩いている。同じところを行ったり来たり。どういうことだ。

あれ。ヤツの背後の壁に、何かがかかっている。

よく見れば――。

あれは、ミラクルシールドだ。あれを何とか取りたいが。

どうやって取る？

- **(持っていれば) マジカルブーメラン**　→79
- **(持っていれば) 銀の矢**　→49
- **怪物にスキができるまで待つ**　→4

320

穴に入ってみた。

奥にともるたいまつの明り。そのため、ローソクはいらなかった。よかった。どうやら怪物はいないようだ。

明かりに向かって歩いていくと、そこにひとりの老人がいた。白いヒゲに赤い僧服。敷き物の上にあぐらをかいてすわっている。

「誰じゃ!?」

狭い洞窟に、老人の声が響いた。

「ぼくはリンクです。名前はお聞きでしょう」

すると老人は静かに言った。「全然知らん」

「時空を超えてはるばるやってきた、勇敢なる少年ですよ」

とんだところで、自分の宣伝をすることになった。

「そんなこと言っても、まったく知らん」と、老人。

ひどいこと言うなあ。まったくプライド傷ついちゃうよ。

「あんた、ちょっとボケてんじゃない？」

「失礼なこと言うな。これでもワシはナーバスなんじゃ」

老人は後ろに隠していたものを出した。「――旅人へのプレゼントとしてこれを用意しておったのじゃが、やるのはやめた。誰か他の人にあーげよ」

「おお、老人よ。そなたの慈愛は至上の美！」ぼくは彼の

320

膝元にすわった。

「案外と、現金な性格じゃな」

おっと、こんなアホらしい会話に貴重なページを使っている余裕はない。仕方なく差し出した老人のプレゼントを開けてみた。

それはバイブルだった。**(バイブル得る)**

礼を言い――もちろん本心で――そしてぼくはその穴を出た。 →107

321

だが、逃げようとしたとたん、足が滑った。固い岩の床に転倒したぼくは、思わず背後を振り返った。風を切って伸びてきた触手は、たちまちのうちにぼくをからめ取った。そのまま宙に持ち上げられ、怪物のほうへ引きよせられていく。

リーバーは恐ろしい口をカッと開いた。花弁のような毒々しい色をした口だった。

やがてぼくは、そのまっただなかに頭から突っ込んでいった。

END

322

ぼくはその墓場のある丘を降りた。

坂道を下りつつ、また思いにふけっていると、前方に人影。

よく見れば、黒いマントを羽織った騎士、黒騎士だ。

彼はぼくの方を見、来いとばかりに手を振っている。ぼくは迷った。どうしよう。その決定はきみにまかせよう。

- **ついて行く** →202
- **ついて行かない** →21

323

マジカルキーで扉を開けた。

そしてローソクをともし、闇の中に漂いこんで行く。

しばらく行くと、地下へ降りる階段があった。そこをゆっくりと降りて行く。

地下はさまざまに入り組んだ迷路だった。ぼくは何度もあちこちを行き来し、やっとさらに下に降りる石段を見つけた。

そこを降りると、だだっ広い部屋に出る。明るい部屋だ。壁という壁にはたいまつがともり、その光に照らされ、無数の石像が浮かび上がっている。苦痛の表現を浮かべた何とも不気味な像だ。あちこちには石の円柱が立っている。

床の石畳はよく磨かれ、テラテラと光っている。その上にゴロリと落ちているのは――像の手首だ。

ぼくはハッとして身がまえた。ローソクを捨て、剣を抜く。その時背後で、何かを引きずるようなシュウという音がした。怪物がいる。それも、ぼくのすぐそばの柱の後ろに……。

磨かれた床にその姿が映っているのだ。

醜い姿をしたヤツだった。トカゲのような全身。長いシッポ。ギザギザの背びれ。大きな口から出ている赤い舌。そしてその目は……(！) ぼくは心の中でアッと叫んだ。とっさに目をそむける。

あちこちに立っている石像。その正体が、ふいにわかった。

これらは――いや、この人たちは魔力によって石に変えられてしまったのだ。**(リストからローソクを１本消す)**

ぼくは思いだした。こいつはアルゴンという怪物だ。こいつを倒すには並の武器じゃダメだ。

今、ぼくはミラクルミラーを持っている？

323

●持っている　→26

●持っていない　→16

324

だが、ギーニはやってきた。

動けないぼくを、思いきり蹴とばした。ぼくは近くの墓石に体をぶつけ、うめいた。（LIFE エネルギー♥マイナス１）

だが、その時ぼくは気づいたのだった。今のショックで、ギーニの呪文が解かれている。とっさに逃げようとした。

LIFE エネルギー♥はまだある？

●YES　→241

●NO　→307

325

マジカルロッドを出し、それをかかげる。

まぶしい光がさっとさし、ぼくを縛りつけていた呪文が解けた。体の自由が戻った。ぼくは逆襲に転じるべく、勢いよく飛びすさった。　→163

326

幸運なことに、今のエネルギーはじゅうぶんにあった。

ぼくは剣をヤツに向け、気合いを放った。同時に切っ先が７色に光り、ビームの矢を飛ばした。それは怪物の体を貫く。

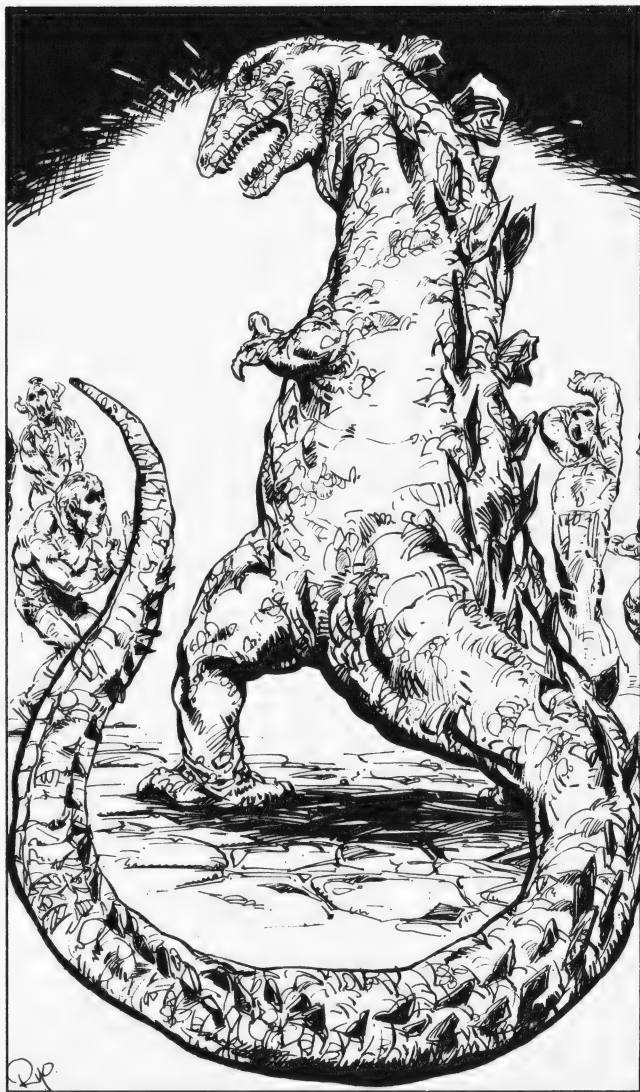
とたんにリーバーはぱっと燃え上がった。

二度三度とビームを飛ばすうち、やがてヤツはドロドロに崩れていった。

（10ルピー得る）結局その洞窟には何もなかった。

ぼくは外へ……。　→197

323 長いシッポ、ギザギザの背びれ　こいつはアルゴンだ　するとこの石像は

327

丘の上に向かう。坂道を登りながらこう考えた。

危険に近づけば、死んでしまうことがある。危険から逃れれば、いつまでもゴールにたどりつけない。怪物と戦わなければいいというものでもない。とかく人の世は住みにくい。

さて、丘に登ればそこは墓場だった。

灰色の墓石がいたるところ、点々と立っている。その時だった。

「おーい」

妙な声が聞こえた。あたりを見回してみるが、誰もいない。

「おーい」また、声がした。

足元だ。そう、地面の下からその声は聞こえてくるのだ。どうやら目の前にある、四角い墓石の下らしい。気になるなら、墓石をどけて、その声の主を捜してみてくれ。

●墓石をどける　→145

●無視する　→47

328

こいつは退却（たいきゃく）するに限るな。

そう判断すると、ぼくは逃げ出した。グリオークから身を隠（かく）すようにし、走る。ぼくを見失った怪物は、憤然（ふんぜん）として吠（ほ）えた。ところが——これは後で気づいたんだけど、ぼくはこの時大切なクリスタルを落としてしまったんだ。

くやしいけれど、ここはどうにもならない。

だけど——このカタキは必ず取ってやる。

覚えてろォォォォォォォ……!!

（LIFEエネルギー♥マイナス１、クリスタルを１本失う）

→169

329

アルゴンに対して、身がまえた。

ヤツはシッポをズルズルと引き、なおも、迫ってくる。ぼくは剣をかまえ直した。

よし、このままヤツを倒してやる。ぼくはとっさに飛び出した。

剣を突こうとしたとたん、足がもつれた。危ない！

★バトルポイント…リンクは♥＋B／アルゴンは８＋Eで戦います。結果は？

●勝った　→81

●負けた　→220

330

やがて谷を過ぎた。

そこは崖（がけ）っぷちだった。足元は深い谷底。落ちればいっかんの終わりだ。

向こう側には山肌が見え、遙（はる）か上に向かってそそり立っている。その中腹。大きな岩にはさまれたところに、石造りの建物が見えた。

〈大神殿〉だ！　とうとうやってきたのだ。だが、どうやって渡ろう。崖の向こうに行くための橋はある。ただし、それは、はね橋で、今は２本のロープによって向こう側に引き上げられている。

あの橋を何とかこちらへ降ろさねば……。

どうやるか、よく考えてくれ。方法はふたつだけあるぞ。

●（LIFEエネルギー♥が満杯なら）剣のビームで　→55

●（持っていれば）マジカルブーメランで　→277

●ふたつともダメ　→243

331

だが、ぼくはけっしてあきらめない。(いいかえれば、しつこい性格！)

もう一度剣をかまえなおし、突進した。触手の大部分を斬り落とされ、オクタロックはすっかり弱っていた。トドメの一撃とばかりに、剣を突く。粘膜の下に隠された小さな目。そのひとつを貫いた。

怪物は悲鳴を上げ、絶命した。(LIFEエネルギー♥プラス1・5ルピー得る)

そして、ぼくはまた歩きだした。　→43

332

そろっていない。となると、ここへ来ただけ損をしたことになる。つまりこれ以上行けないということだからだ。

ぼくは仕方なく、トボトボと引き返した。まったく泣きたい気分だよ。また他をまわり、アイテムをそろえて再突入しなければならないのだから。　→192

333

死にものぐるいで石段を登ろうとした。

だが、足はもはやまったく動かない。体力の尽きたぼくに向かって、怪鳥の影が迫る。振り返ったぼくの目に、アルプの人面の、耳まで裂けた口。その端からのぞく鋭い牙が見えた。それが、この世で見た最後の光景だった。

END

334

だが、ぼくにはマジカルロッドという強い武器がある。

ウィズローブは呪文を使う魔物だが、このロッドはさらに強力な呪文を、光にして相手にぶつけることができるのだ。

——なんていちいち説明したりせず、ぼくはすかさずロッドを振った。その先端がカッと光り、青白い光の矢を飛ばした。

魔物は一瞬にして、炎に包まれた。たちまちのうちに、燃えつきてしまう。今さらながら、ぼくはマジカルロッドの威力に驚かざるを得なかった。(LIFEエネルギー♥プラス3・20ルピー得る)

魔物の死骸をあとに、ぼくは神殿に向かった。　→184

335

「だまれ！」

ぼくはなおも黒騎士と戦った。この男、やけに強い。余裕を持ってぼくと剣をあわせている。ぼくを見るその目がキラリと光る。

殺気を感じ、ぼくは背後に飛びすさった。その時だ。

ぼくはそこにヤツらが迫っているとは気がつかなかったのだ。そう、ぼくの背後にはスタルフォスがいたのだ。

怪物の持つ剣がすばやく風を切った。次の瞬間、凶刃がぼくの胸を貫いた。茫然として胸から突き出した剣の先端を見ている。ゆっくりと振り返ると、白骨の怪物と目があった。ヤツが剣を抜くとともに、ぼくはくずおれた。

心臓を貫かれてはもはや助かりようもない。

沼地のぬかるみにつっぷして、ぼくは絶命した。

黒騎士が味方だと気づいたのは——皮肉にも——その瞬間だった。そして、その時の彼の正体すらもわかったという

335

のに……。

END

336

雪の中を走りに走った。が、いかんせん体力がない。

のろのろとはうように逃げるぼく。モルドアームは突然、雪中深く潜(もぐ)りこんだ。思わず立ち止まり、振り返る。静寂(せいじゃく)がぼくのまわりに満ちている。

どうしたんだ？　ヤツはあきらめたのか。そう思った時だ。

ぼくのいる雪原の表面が、小山のように盛り上がった。そう、モルドアームは、ぼくの真下から出現したのだ。その衝撃(しょうげき)で、ぼくは勢いよく宙に舞った。と同時に、ぼくはクリスタルを落としてしまった。**（クリスタル１本失う）**

ドサリ！　ぼくは雪の上にほうり出された。ピンチだ。

いったいどうすればいいんだ？

●あくまでも戦う　→37

●逃げる　→269

337

だが、ぼくはそれを持っていなかった。

そして、逃げるにももはや遅い。こうなると、ミラクルミラーに頼って戦うしかないが。

怪物がぼくを見つけた。ヤツが襲(おそ)いかかってくる前に、ぼくはその場を飛び出した。

ん——!?

いないぞ。どこへ行った？　あちこちとキョロキョロ見回していると、突如(とつじょ)背後から影がさした。

振り返ったとたん、ぼくの目にアルゴンの姿が飛び込んで

335 スタルフォスの剣が胸を貫く　ぼくは茫然とその先端を見ている　やがて

337

きた。そしてヤツの金色の目も。

一瞬後、ぼくは人型の石と化していた。

END

338

体力はじゅうぶんにある。

さて武器だが、今ぼくは最強の武器、ミラクルソードを持っている？

●**持っている　→96**

●**持っていない　→240**

339

糸の噴流を横っとびにさけた。

すかさず剣を抜き、怪物に向きなおった。

★バトルポイント…リンクは♥＋H／テクタイトは3＋Cで戦います。結果は？

●**勝った　→165**

●**負けた　→3**

340

ところが、すでにぼくの体力は尽きていた。

しきりに雪をかきわけつつ行こうとするのだが、ちっとも進まない。そのうち、雪の中に上半身を突っ込んでしまった。

もうだめだ。手足をぐったりとさせ、ぼくはその場を動けなくなった。そうしているうち、モルドアームは雪の中をぼくの真下まで追いついていた。

ヤツは巨大な口を開け、ぼくを、包み込む雪といっしょに呑み込んでしまった。

END

341

あわてて崖にしがみつこうとした。

が、ムダな努力にすぎなかった。ぼくの手はむなしく空をつかんだ。そのままぼくは落下――。

下で燃えたぎる溶岩に向け、死の降下をはじめたのだった。

END

342

南へ向かい、進んだ。

まさにそこは熱砂の海。灼熱の太陽は、情け容赦なくぼくの上に照りつけてくる。水筒の水は、ついになくなってしまった。後は気力と体力の問題だが……。

砂漠はあまりに広大で、オアシスはどこにもなかった。

歩けど歩けど砂ばかり。喉の渇きは激しくなる一方だ。そしてついに、ぼくは倒れた。(**LIFEエネルギー♥マイナス1**)

意識を取り戻し、砂地に埋もれていた顔を上げる。その時だった。

前方の空に浮かぶ幻。森に囲まれた岩山。池もある。だがそれは蜃気楼だった。ぼくは茫然として、そこに漂よう逆さの光景に見入っていた。

どうすればいいのか。しっかり判断してくれ！

●**蜃気楼に向かって歩く　→104**

●**その場でしばらく休む　→279**

343

暗がりの中。ぼくは目をこらしつつ、歩く。すぐに行きどまりになった。あまり深い洞窟じゃない。

そこにたいまつがともっている。明かりの下、敷き物にす

343

わっていたのはひとりの老人。

「おぬし、リンクじゃな？」

白ヒゲの老人はそうきいた。ぼくはうなずく。

「ふむ、無事息災でなによりじゃ。おぬしが雪の中でもがくのが見えたでな。ちょいと救ってやったまでよ」

それでは、あの幻は……？

するとまるで、ぼくの心を読んだように、老人が言った。

「――わしは人の心にテレパシーで語りかけることができるのじゃ。いちばん気にかけている者の形をとってな」

そうだったのか。

「ありがとうございました。あなたがぼくを助けてくれたのですね」

老人はうなずく。「ついでに、おぬしの行く目的地について教えてやろう」

「**〈死の谷〉**についてご存じなのですか？」

「もちろん。じゃが、あそこへ行くのは容易なことではないぞ」

「わかっています。いえ、わかっているつもりです。どうか、教えて下さい」

「よろしい。大神殿のある**〈死の谷〉**は、幽鬼の墓場の東にある。そこへ行く道は二通りある。ただし、そのうちの一方を慎重に選ばねば、おぬしは確実に死ぬ」

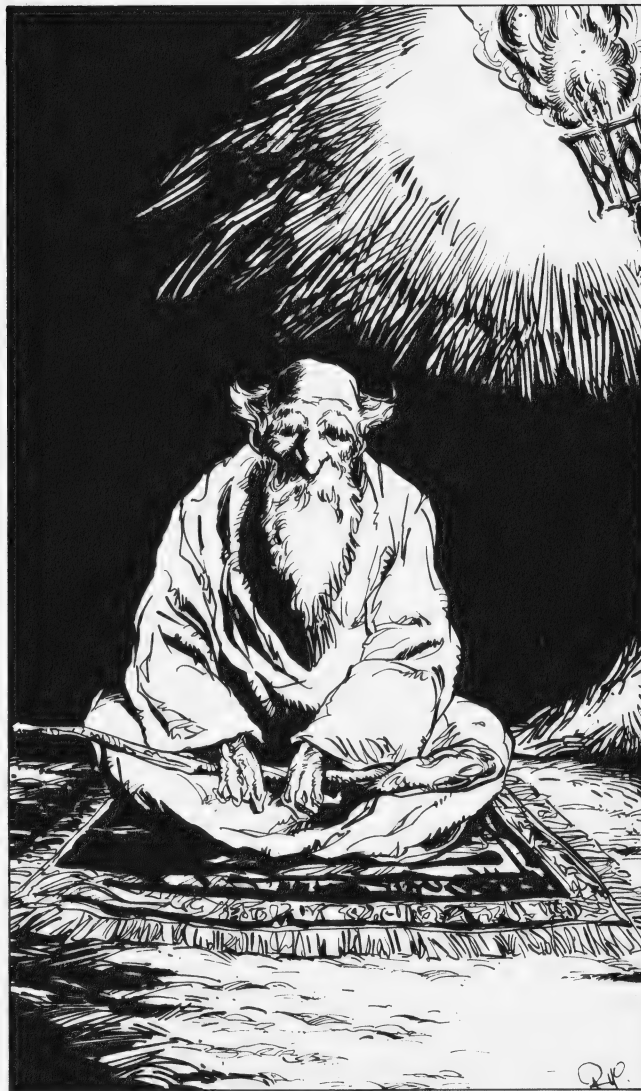
うえー、ぞーっとしない話。

「ところで、わしのやれる情報はもうひとつある。10ルピーを出せば話してもよいぞ」

そら来た。これだから困るんだよね。でも情報はほしいし、

343

死の谷に行くのは容易ではないぞ　老人は情報の提供を申し出たが

343

命を助けてもらったお礼もしたい。

これはきみに選んでもらおう。どうする？

●**10ルピー払う**　→57

●**払わない**　→231

344

山地を後に再び旅を続ける。

ここでまた、きみの賢明なる判断に期待しよう。行き先は二通りある。東か南か。

●**東へ行く**　→30

●**南へ行く**　→181

345

砂の上にすわったまま、夜を待った。

日はじきに沈んだ。ぼくは立ち上がり、砂漠を歩きだした。

体力は相当おとろえてはいるが、気温が低いぶんだけ、何とかなりそうに思える。それに、あの騎士のくれた水もあるしね。

夜どおし歩きつづけ、やがて東——前方の空に日が昇り始めた。　→263

346

グリオークは一度高空に舞いもどり、旋回して再び急降下してきた。今度は３つの首から一度に炎が吐き出された。ぼくはまたシールドをかざす。

炎といっしょに、再びすごい風が押し寄せてきた。

今、ぼくが持っているのは——。

●**マジカルシールド**　→53

●**ファイアシールドもしくはミラクルシールド**　→22

347

バクダン１個を、迫る触手に投げた。轟音がして、火柱が立った。黒煙に巻かれて、ズタズタに寸断された触手が飛び散った。**(バクダン１個失う)**だが、本体は生きているし、触手はまだ何本もあった。煙を突いて、怪物は迫ってくる。

★バトルポイント…リンクは♥＋C／オクタロックは３＋１で戦います。結果は？

●**勝った**　→134

●**負けた**　→71

348

その場所を去り、ぼくは北に進んだ。

やがて遠くに山脈らしき影が見えてきた。ありがたい。ようやく灼熱の砂漠から抜けられそうだ。安心して、元気づいたぼくは、その山に向かって歩き出した。　→10

349

しばらく行くと、雪は少しずつ消えていった。

そして、ぼくはやっと地面に立つことができたのだった。

さて、どっちへ行く？

●**北**　→30

●**南**　→50

●**東**　→70

●**西**　→181

350

ぼくは確実に死に向かっていた。

そこに疾風のように現れた者がいた。黒いヨロイ！

そう。あの黒騎士だった。彼は入口からこの部屋に入るや、ぼくの肩に手をかけた。そして、デオーを振り返った。

350

「きさまっ！」デオーは狂ったように叫んだ。巨大な翼を振り、威嚇しようとする。だが、黒騎士は平然と腰の剣を抜いた。その剣は７色に輝いていた。

「だれだあ——っ！」デオーは飛びかかっていった。

「ぼくは、ぼくさ！」

黒騎士はその顔からヨロイの面を取る。下から出てきたのは——リンクの顔——そうだったのか！

ぼくは——いや、私はこの時初めて気がついた。

黒装束のリンクは、一刀のもとにデオーを斬り捨てた。やっぱりデオーといえども、本物のリンクの前には敵じゃなかった。よかった……。

「ゼルダっ！」リンクは駆け寄ってきた。そのたくましい手で私を抱きしめる。優しい瞳が、私を見すえる。

「ごめんよ。駆けつけるのがおそくなったばかりに、こんなことになって」

「いいのよ。だって、トライフォースは無事だったから」

私はそう言って、彼を見上げた。そう。これまでリンクの名で冒険をしてきたのは、私——つまり、ゼルダ。

私の病気は、敵をあざむくための芝居だった。

なぜなら、あの時リンクはこの世界へ来ていなかったから。

でもいつの間にか、彼は来ていたのだ。そして、黒騎士の姿となって、陰になり日なたになって、私を助けてくれていたのだ……。それを知り、私は満足して微笑んだ。

そして——私は勇者リンクの腕の中で、ゆっくりとこときれたのだった。

UNHAPPY END

350

疾風のように現れた黒騎士に、デオーは怒り狂い、威嚇の声を上げる！

エピローグ

まずは、いっしょに戦ってきてくれた相棒――そう、きみにひと言謝らなきゃいけないか。

そう。ラストでいきなりびっくりしたと思うけど、今までリンクと名乗っていたのは、私。つまり、プリンセス・ゼルダ。寝台にいた私は、ニセ者よ。

なぜ、こういうややこしいことをしたか、と言えば――。

まず、敵の目をあざむくためってこと。これは言ったわよね。魔獣デオーは、それにまんまとひっかかったってわけ。

それからね。この“勇気”のトライフォースがどうして必要になったかはもう知っていると思うけど、それをなし得る伝説の勇者リンクは、他の世界。私たちがいくら祈っても、彼は現れなかった。

だから、私は父つまり国王に頼み、伝説の勇者・リンクになりすました。そして、トライフォース捜索の旅に出たのね。なぜならリンクの他、あの神殿に入れる人間は――リンクと同じアザを持つ者。つまり――私だけだったから。

ところで、旅の途中で会った黒騎士。この人が本物のリンクだって気づいていたかな？

そう。本当の彼は、別の世界のハイラルから、時空を超えて来てくれていたの。私たちの必死の祈りが、リンクのいないこの世界に、本物のリンクを呼び寄せていた！

私から姿を隠していたのには、理由があるんだよ。

それは私が自分で始めた旅――つまりいいかえれば、私自身の修業の旅を、成功させるため、ってとこかな。

おやおや、照れないで。リンクくん。

じゃ、最後になるけど——これまでともに戦ってきた読者のきみ。

今思ってみれば、ハラハラドキドキの旅だったね。いつだって死と隣合わせだった。繰り返すけど、きみには感謝(かんしゃ)の言葉もない。ありがとう。そして、いつまでも、この冒険を愛する気持ちを忘れないで。

きみたちのような、夢や冒険が好きな人々がいるから、私やリンクもこの世界で幸せにやっていけるのだから。

じゃあ、また。次に会える時まで————。

さて、リンクの冒険の旅は、ひとまずここで終わりです。

いかがでしたか？　ところで、このエピローグへたどり着いたきみは、どんなエンドをむかえたのでしょうか。

実は、このゲームには、エピローグへ続くエンドがもうひとつあるのです。えっ、どんな終わり方なのかって？　それは——ゲームをやってもらえばわかります。

さあ、きみ、もう一度チャレンジしてみて！　前回とは別のルートをたどって、もうひとつのエンドを見つけ出してください。

巻末付録

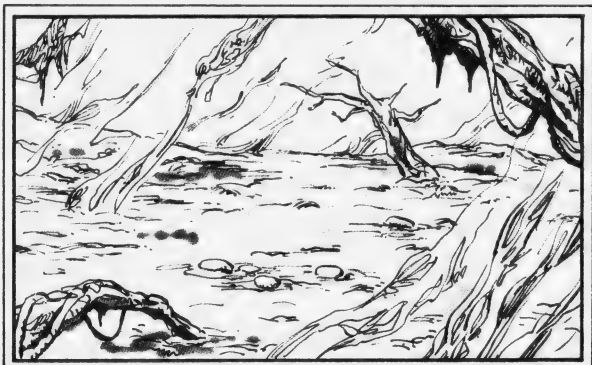
■ハイラル伝承(でんしょう)マップ■

ハイラルに古くから伝わる地図です。ゲームを進めながら、地図を完成させてください。

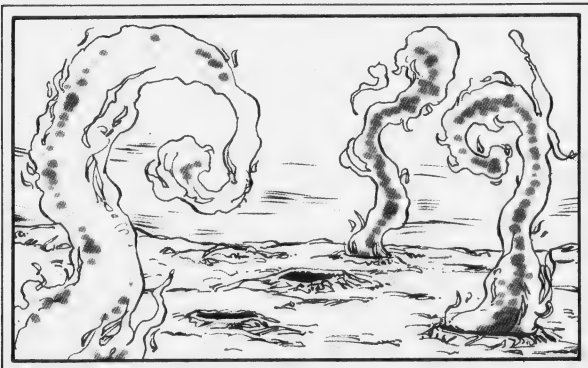
■資料・アイテム紹介■

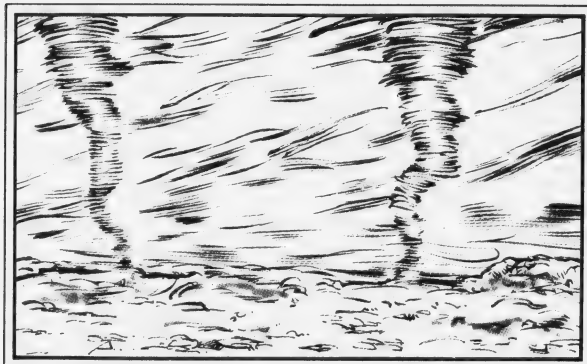
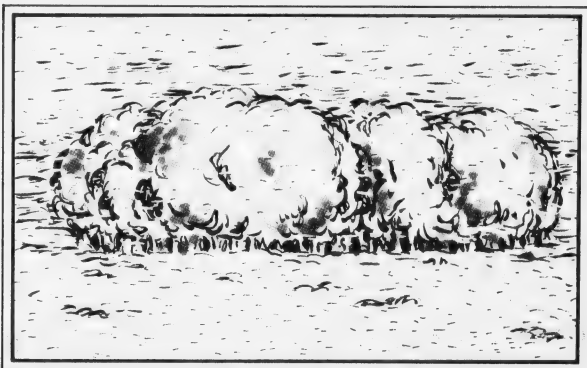
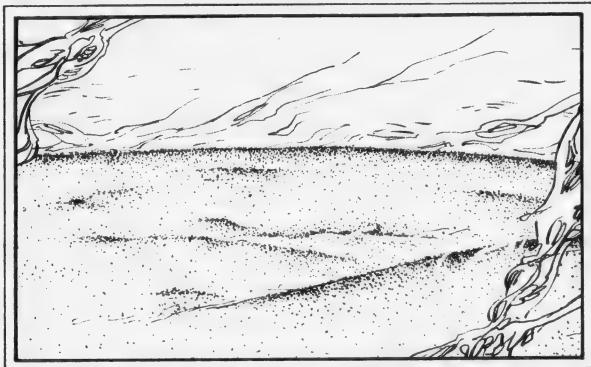
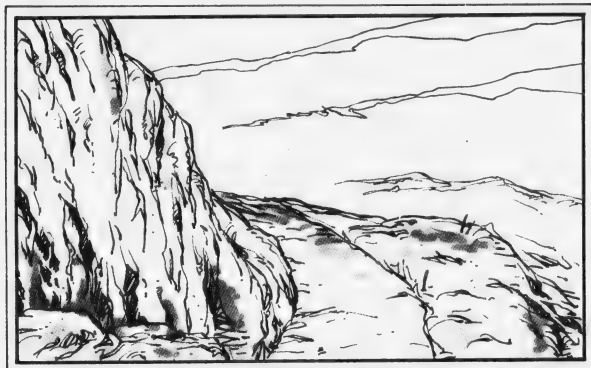
リンクがゲーム中に使うさまざまなアイテムです。説明を読んで参考にしてください。

ハイラルに伝わる古地図と言い伝え

絶望の入江　広大な海。その一角にある入江。ここは昔から旅人に恐れられている。なぜ、そんな名がついているのだろうか？

妖気の沼　不気味な霧。白骨のような枯木の群れ。どす黒く水をたたえる怪しい沼。旅人はおろか、野生の動物ですら、この場所へは近寄らない。

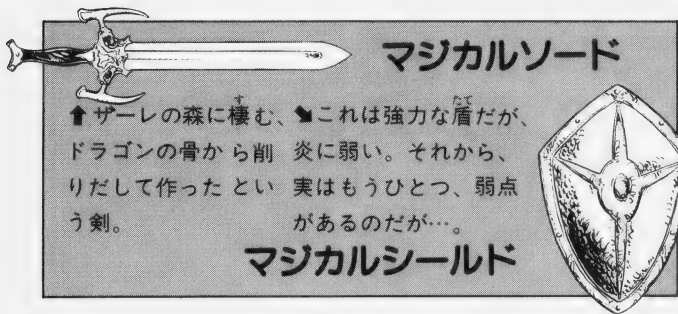
廃墟の町　かつては大勢の人間が住み、栄えた町。だが、もはや家々にともる灯はなく、ノラ猫一匹姿はない。今、人間に変わってここに住むものは…？

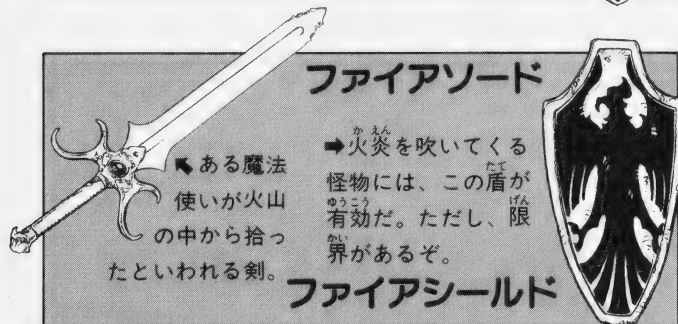
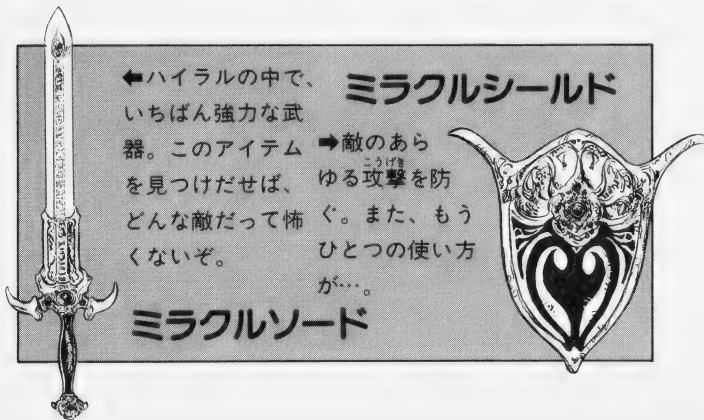
魔の山　切り立った岩山があり、恐ろしい怪物もたくさん棲んでいる。だが、ここにはある秘密が隠されている、と伝えられている。

炎の原野　遠々と続く岩の荒野。その岩の亀裂から、時折ものすごい熱と炎が噴き上げている。ここには恐ろしい怪物が棲んでいる。

幽鬼の墓場　坂道を登り切ると、丘の上に出る。ここは不浄の魂がさ迷うといわれる墓場だ。この場所へ迷い込み、命を落としたものは数知れないといわれる。

嵐の平原　ゴウゴウと唸りを上げながら、風が吹きすさぶ荒野。そして、身をくねらせながら踊り狂う竜巻。ここへ入ってはならないといわれているが…。

霧の森　うっそうと繁った森。木々の間を流れるのは——霧。うかつにこの中に足を踏み入れてはならない。怪しい霧の中に、どんな怪物がいるかわからないからだ。

熱砂の砂漠　あらゆる生き物の命を奪う、恐ろしい砂の海だ。泉の湧き出すオアシスは二か所。そこへたどり着けなければ、生きて出られないと伝えられている。

風の峠　頭上にのしかかるように、厚くたれこめる妖雲。それをバックに高くそびえたつ岩山。ハイラル中、最も魔物の多い場所だ。

鬼火の草原　風になびく、草の海。だが、その中にどんな怪物が潜んでいるのか分からない。

吹雪の平原　情け容赦なく吹きつける、恐ろしい猛吹雪。灰色の空から降る雪は、絶えることを知らない。零下20度の地獄だ。

〈ゲーム中にリンクが　使う武器、アイテム〉

剣(ソード)と盾(シールド)

手に入れることのできる小道具(アイテム)

〈それぞれのアイテムの特長をいかして、有効に使おう!!〉

●バクダン　強力な敵や、多数の敵に立ち向かう時、このバクダンが有効。持てる数に制限はないぞ。

●ローソク　まっ暗な洞窟や、神殿の奥に怪物が待ち受けているとき、このローソクが役に立つ。

●マジカルブーメラン　投げても自分の手元に戻ってくる。何度も使えるから有効な武器だ。

●マジカルキー　このキーを持っていないと、入れない場所がある。見つけたら、必ず手に入れよう。

●銀の矢　強力な怪物を倒せる、数少ない武器のひとつだ。ただし、使うチャンスを選べ。

●バイブル　呪文を出せるアイテムのひとつ。もうひとつのアイテムと合わせると、さらパワーが…。

●マジカルロッド　呪文を発する、魔法の杖だ。強い敵には有効な武器だ。必ず見つけよう。

●マジカルミラー　一見ただの鏡だが、実はある力を秘めている。これを得ていないと、大変だぞ。

●命の器　リンクが持てるLIFEエネルギー♥の数を増やすにはこの器が必要だ。

●命の水　この水を飲めば、LIFEエネルギー♥が持っている器の分だけ満杯になるぞ。

以上のアイテムをうまく手に入れて、冒険を進めていくと、ぼくは有利な戦いができるんだ。では、きみとぼくの幸運を祈ろう！

伝説の英雄・リンク

記録紙の使い方

●バトルポイント表

Ａ～Ｊの空欄に１～10までの数字を記入します。戦闘は、本文の指示に従がって、ポイントをあてはめます。計算して大きい数字の方が勝ちです。

●ルピーチェックシート

はじめに、リンクは50ルピー持っています。使ったらその分をマイナスします。途中で手に入れたルピーは、その都度書き入れていきます。

●LIFEエネルギー♥チェックシート

LIFEエネルギー♥は、リンクの体力を示します。ゲームを進めていく中で増えたり、減ったりするので書き入れていきます。

●持てるハートの数チェック

持てるハートの数は最高17個です。命の器を取った時やレベルアップした時などにチェックします。満杯かどうかを見る場合に、満杯の条件を満たしているかを判断するのに使用します。

●アイテムチェックシート

手に入れたアイテムを忘れてしまわないようにメモします。

●ステップメモ

自分がたどってきた項目を１から順にメモします。

さらに細かいルールは、ゲームのルール（９ページ）にありますので、しっかり読んで理解しましょう。

冒険記録紙

●バトルポイント表

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J

●ルピーチェックシート

50→

●LIFEエネルギー♡チェックシート

♡3→

持てるハートの数チェック

▶命の器(命の器を取ったらチェックします)

命の器１個目　♡　♡

命の器２個目　♡　♡

▶レベルアップ(各ソードを取ったらチェックします)

ファイアソード　♡　♡　♡　♡　♡

ミラクルソード　♡　♡　♡　♡　♡

〈持てるハートの数がそれぞれハートマークの分だけ増えます〉

冒険記録紙

●アイテムチェックシート

マジカルソード、マジカルシールド、クリスタル３本

●ステップメモ

冒険記録紙

●バトルポイント表

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J

●ルピーチェックシート

50→

●LIFEエネルギー♡チェックシート

♡3→

持てるハートの数チェック

▶命の器(命の器を取ったらチェックします)

命の器１個目　♡　♡

命の器２個目　♡　♡

▶レベルアップ(各ソードを取ったらチェックします)

ファイアソード　♡　♡　♡　♡　♡

ミラクルソード　♡　♡　♡　♡　♡

〈持てるハートの数がそれぞれハートマークの分だけ増えます〉

冒険記録紙

●アイテムチェックシート

マジカルソード、マジカルシールド、クリスタル３本

●ステップメモ

企画／スタジオ・ハード
文・構成／スタジオ・ハード
制作／宮下貴代美　田原一朗
イラスト／中村亮

リンクの冒険
ハイラル英雄伝説

著　者　スタジオ・ハード
発行者　加納将光
発行所　株式会社 勁文社
〒164 東京都中野区本町3-32-15
電話　東京　372-3281(編集)
　　　　　　372-3291(営業)
振替　東京9-13311

印刷　株式会社　放光社
製本　明興製本工業株式会社

ー定価はカバーに表示してありますー
著者と了解のうえ検印を廃します

ISBN4-7669-0518-0　C0276　Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替えします

ADVENTURE HERO'S BOOKS

アドベンチャーヒーローブックス 10 リンクの冒険 ハイラル英雄伝説 スタジオ・ハード／構成・文 勁文社

アドベンチャーヒーローブックス 10

リンクの冒険
ハイラル英雄伝説

スタジオ・ハード／構成・文

勁文社

昭和62年3月1日　初版発行

発行　株式会社　勁文社

振替　東京9-13311 Tel 03-372-3291営業
03-372-3281編集
〒164 東京都中野区本町3—32—15

ADVENTURE HERO'S BOOKS

ここは、もうひとつのハイラル。長きにわたり魔王ガルゴアとその配下の怪物たちにより支配されてきた。だが、この国を悪の手から救い、平和を取り戻す方法がひとつだけある。それは、隠された第3のトライフォース〝勇気〟を見つけ出すことだ。

そして、それができるのはただひとり——そう、それは伝説の英雄リンク！　はたしてハイラルに平和は甦(よみがえ)るのか!?

勇者リンクの新たなる冒険が始まる——。

ISBN4-7669-0518-0 C0276 ¥580E

勁文社
定価580円

アドベンチャーヒーローブックス 10
リンクの冒険 ハイラル英雄伝説
スタジオ・ハード／構成・文
勁文社

アドベンチャーヒーローブックス
ADVENTURE HERO'S BOOKS No.10

リンクの冒険
ハイラル英雄伝説

スタジオ・ハード／構成・文

挑戦者のあなたへ

本書アドベンチャーヒーローブックスは、ロールプレイングゲームの要素を取り入れた、鉛筆一本で楽しめるゲームブックです。

主人公はあなたです。決められた戦闘システムに従がい、数々の危機を乗り越えていかなくてはなりません。主人公の力量やあなたの選択によっては、戦いの途中で命を落とすこともあるかもしれません。しかし、エネルギーのポイントを上げ、アイテムを有効(ゆうこう)に使い何度も挑戦することで、必ずあなたはトライフォースを手に入れることができるでしょう。

では、あなたの幸運を祈って……。

カバーイラスト／中村　亮
カバーデザイン／樋口文子
スタジオ・ハード